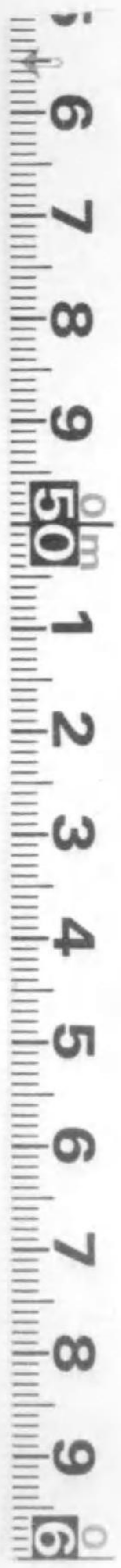


318  
367



始





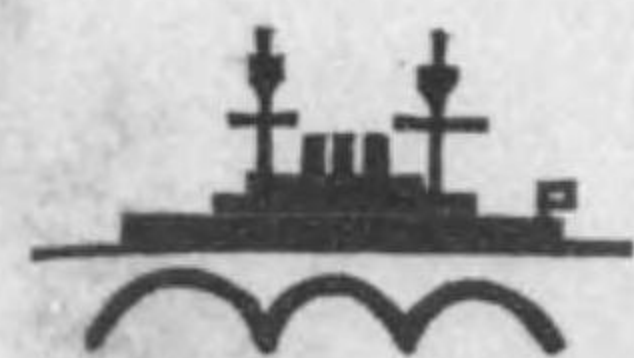
318-367

# ては下の旗艦軍

下閣篤俊本坂爵男將中軍海

字題

著郎三米崎山佐大軍海



版堂陽洛

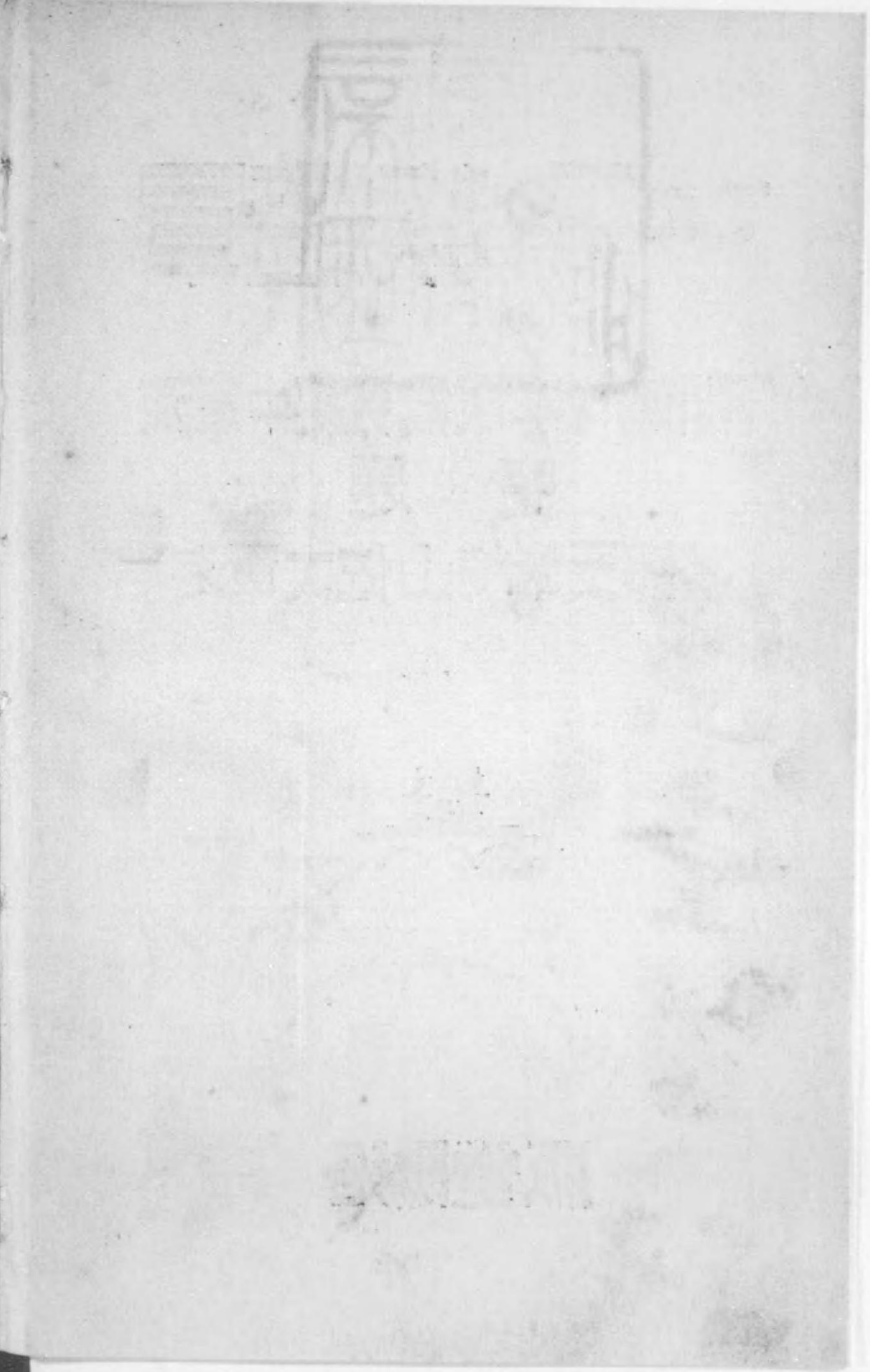




成慶米三郎殿  
海生

丁巳秋日

溪堂







峨船如山蔽海旌  
 將軍挽上日章紅  
 勢乘天子觀兵處  
 乘氣秋清錦旂風

錄陪觀船式所感之作似

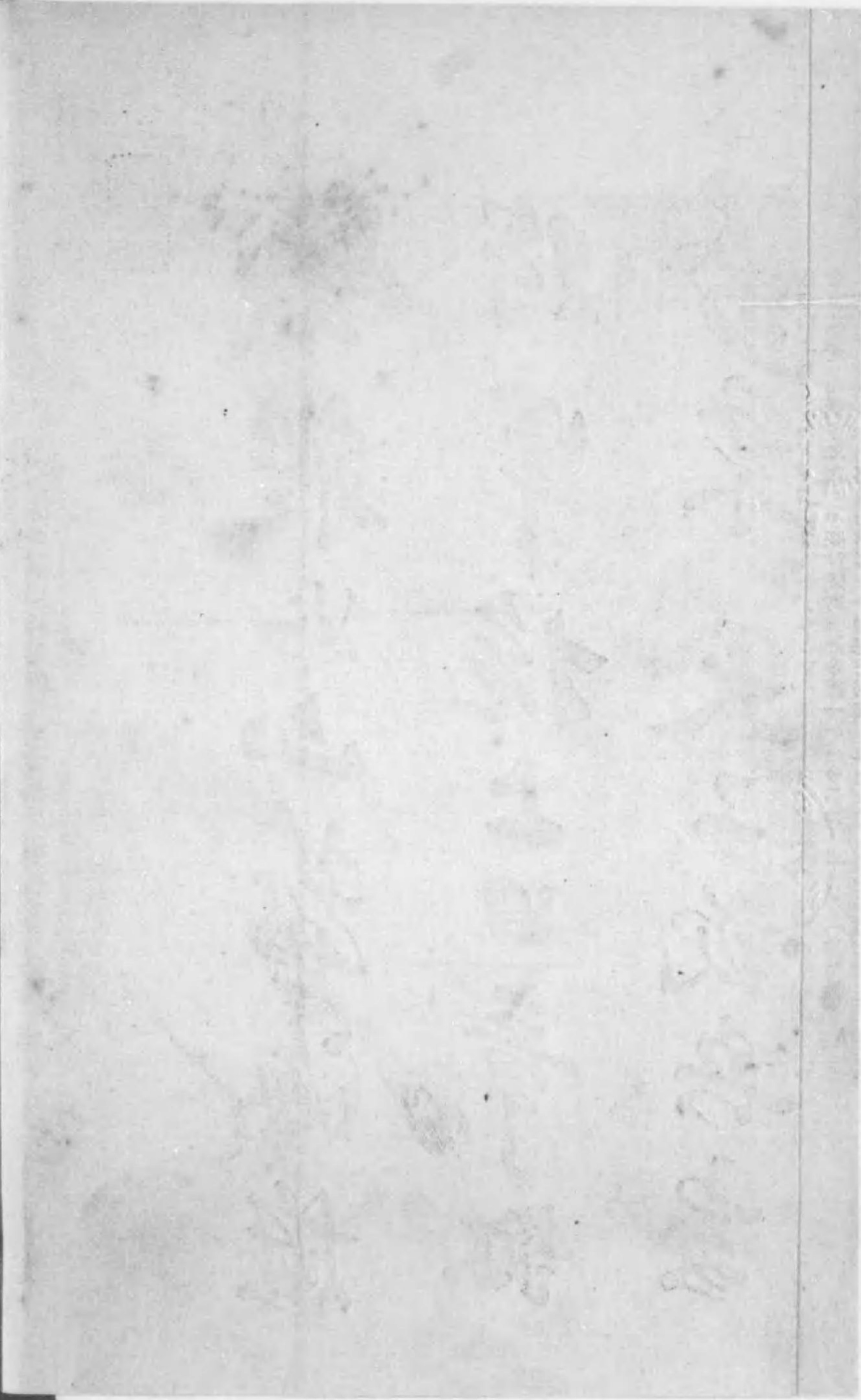
山崎米三郎君

丁巳秋日

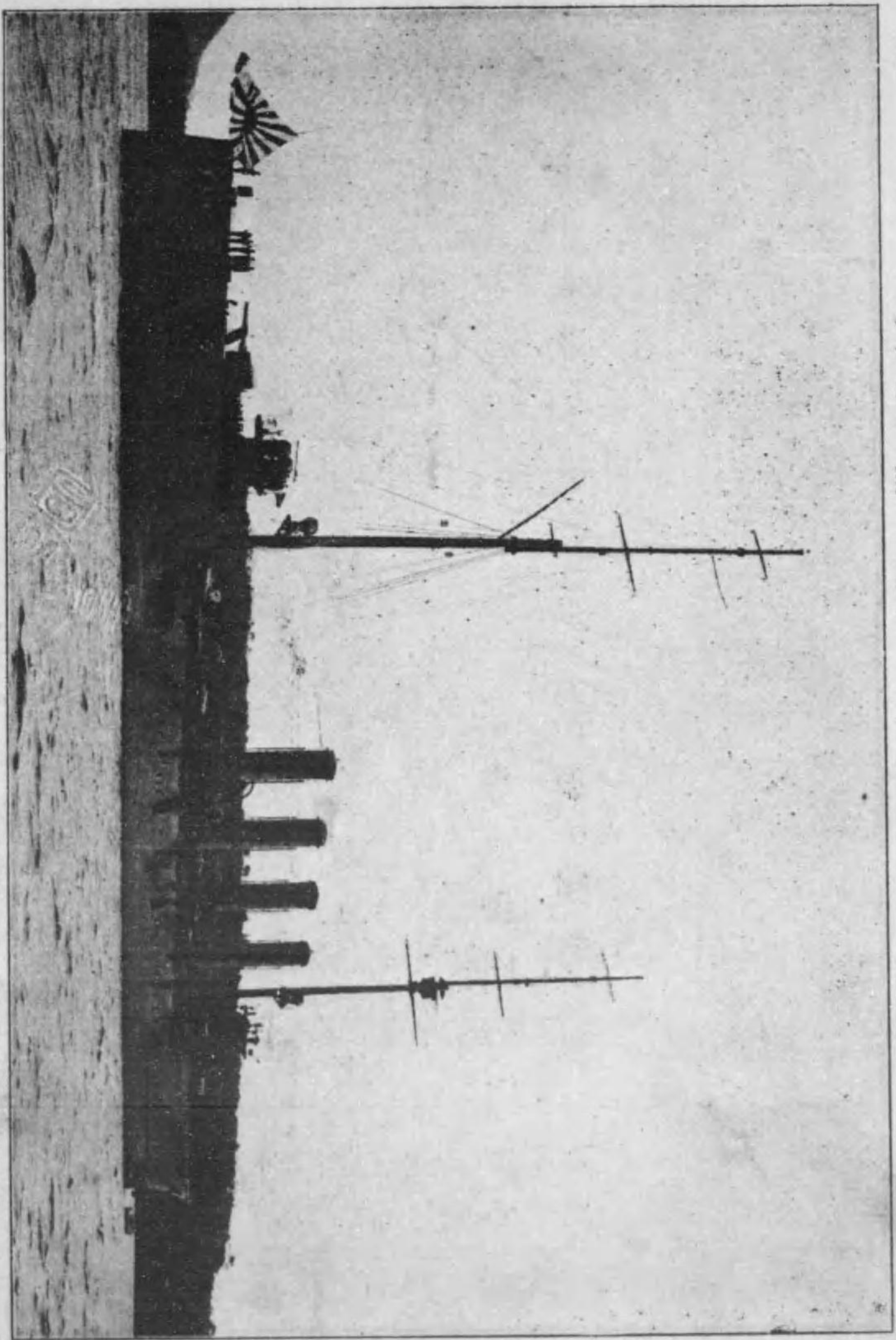
溪堂







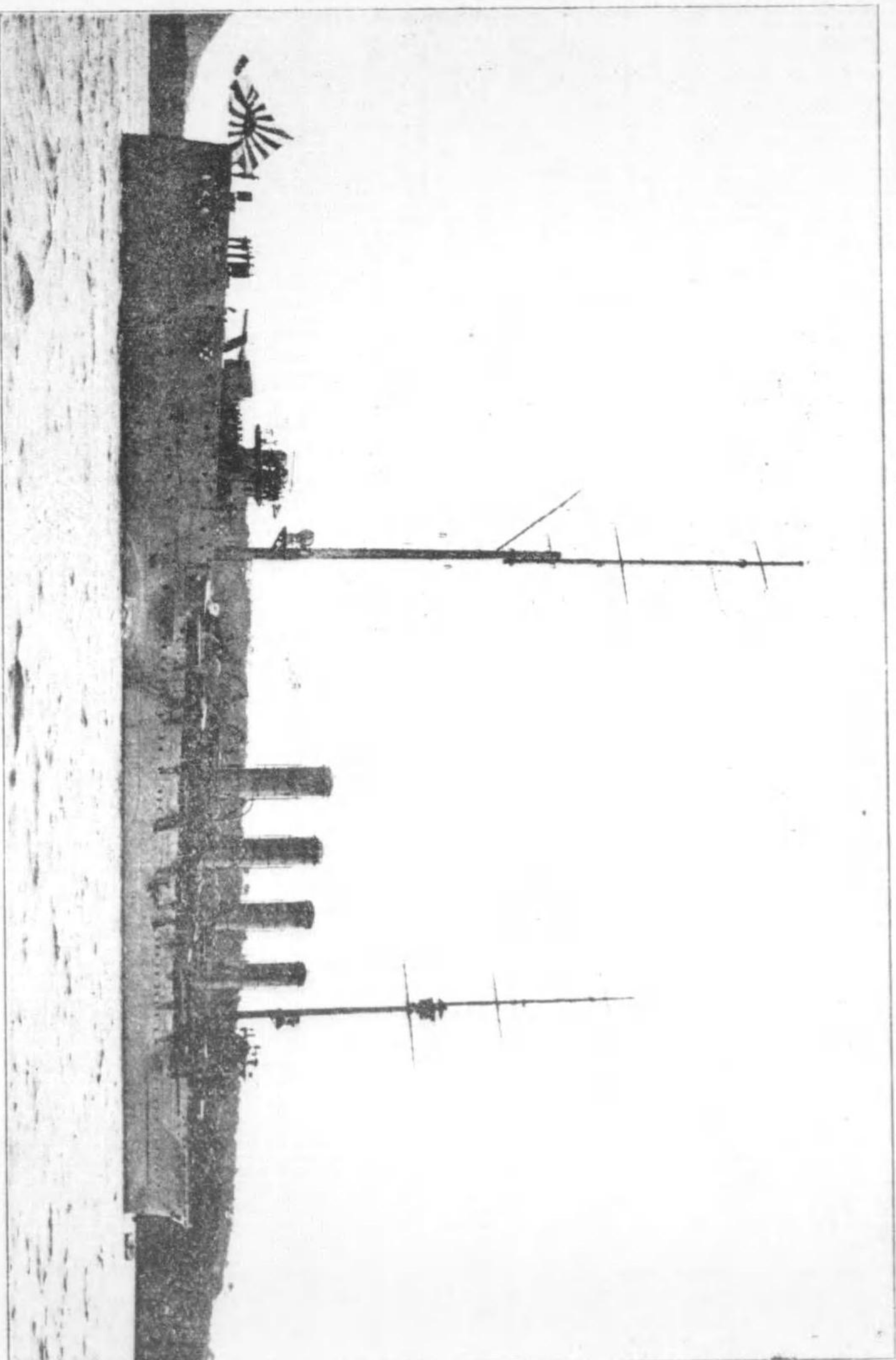
州八大る 薫は風坤乾、城浮新る 懸てめ始旗艦



の掲掲旗艦軍てめ始、てしと長艦回に時者著、工竣摩旗艦軍日七十月五年五十四治明は國本  
禮敬最然肅てし面に尾艦に共、し列整に板甲上てけ着な裝禮常通皆員乗。りな景光ふる行を式  
れらけ掲に竿旗の尾艦と々徐は旗艦軍大の幅十もし今に共さ音角の『代が君』、に埋ふ行な  
。そ威武の等何、そ嚴崇の等何。りあつし宿を魂維の護守國帝海此、まつ



州八大る 薫は風坤乾 城浮新る 蘇てめ始旗艦



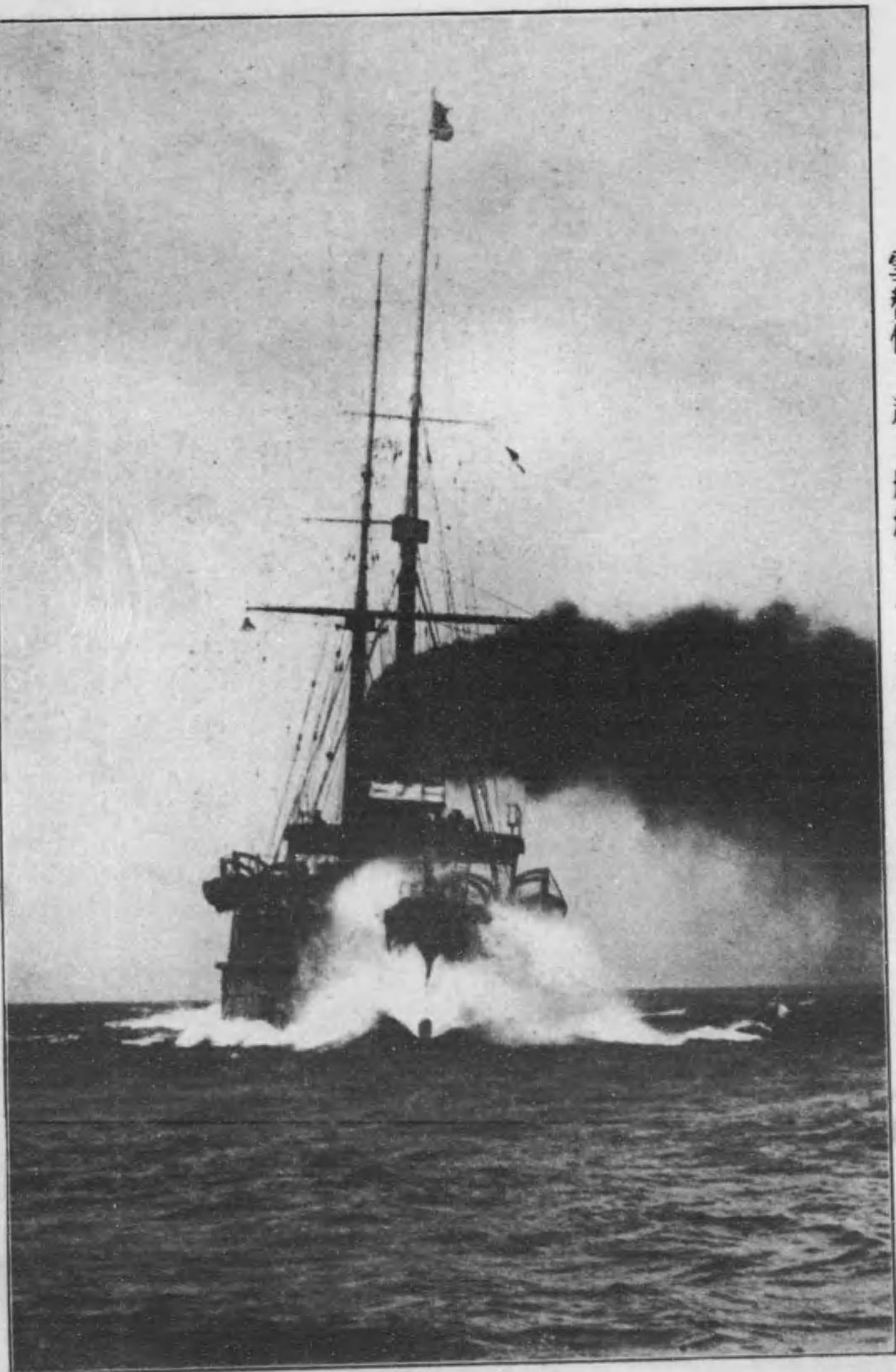
の揚掲旗艦軍てめ始、てしと長艦同に時者著、丁竣摩筑艦軍日七十月五年五十四治明は國本  
禮敬最然肅てし面に尾艦に共、し列整に板甲上でけ着を裝禮常通皆員乗。りな景光ふ行な式  
れらげ掲に竿旗の尾艦と々徐は旗艦軍大の幅十もし今に共さ音角の『代お君』、に種ふ行な  
。ぞ威武の等何、ぞ嚴崇の等何。りあよつし宿を魂雄の護守國帝海此、よつ



海の我が國

海の國かな我が國は 東亞の海を壓へつゝ  
環らす四方に萬疊の 波渺漫と連りて  
入るも出づるも海を越え 攻むも守るも海の上  
富も榮も海に頼る 海は御國の寶にて  
御國は海の主なり 海の國かな我が國は

雪巒倏ち起る艦艦の上、龍神夢驚く春の海



本圖は明治四十五年三月軍艦千歳大修理成り、著者亦同艦長として其全速力運轉を公試する光景にして、艦首直前にある撮影船に向つて轟然疾走しつゝ、彼我共に手に汗を握れる瞬間に撮影せるもの、實に珍中の珍とす。見よ、艦首に蹴破する千波萬波の躍り上つて高く白皚々たるを。何等の壯觀ぞ、何等の雄姿ぞ。



我が太平洋

廣袤僅かに四萬方里  
何ぞ狭き日出の國  
狭しとてそを嘆く莫れ  
我にあり太平洋  
太平洋波漫々たり  
是れ我が園、是れ我が畑  
此園に花撩亂と咲かしめよ  
此畑に狗盜の輩を入らしめぞ  
太平洋上波靜かなるとき  
我等の夢は圓かなり

自序

靈藥は概ね口に苦がし、是を以て舊時の醫家は甘味を服藥の後  
に取らしめ、現代の醫家は包むにオブラートを以てして、共に其  
苦味に悩むことなからしむ、洵に至れりと謂ふべし。余の前著「海  
國魂」を以て靈藥に比するは甚だ潜越なりと雖も、而も此海帝國  
に於ける富國強兵の根元は一に七千萬の同胞が旺盛なる海國魂を  
有するにありとすれば、是れ正に國運發展の靈藥なり。故に余は  
曩きに「海國魂」を稿するに際し、醫家の嚮に倣ひて甘味を添へ  
オブラートに包み、其裡に余が同胞に向つて訴へんとするものを  
挟まんとする當初の計畫なりしが、紙數多きに過ぎ書肆が刊行の  
都合之を允さず、所謂靈藥のみを抽出して先づ江湖に見えたるも、  
投藥の効果を完ふせんが爲めには、甘味たり將にオブラートたる



我が太平洋

廣表僅かに四萬方里　何ぞ狭き日出の國  
狭しとてそを嘆く莫れ　我にあり太平洋  
太平洋波漫々たり　是れ我が園、是れ我が畑  
此園に花撩亂と咲かしめよ　此畑に狗盜の輩を入らしめぞ  
太平洋上波靜かなるとき　我等の夢は圓かなり

自序

靈藥は概ね口に苦がし、是を以て舊時の醫家は甘味を服藥の後  
に取らしめ、現代の醫家は包むにオブラートを以てして、共に其  
苦味に悩むことなからしむ、洵に至れりと謂ふべし。余の前著『海  
國魂』を以て靈藥に比するは甚だ潜越なりと雖も、而も此海帝國  
に於ける富國強兵の根元は一に七千萬の同胞が旺盛なる海國魂を  
有するにありとすれば、是れ正に國運發展の靈藥なり。故に余は  
曩きに『海國魂』を稿するに際し、醫家の聲に倣ひて甘味を添へ  
オブラートに包み、其裡に余が同胞に向つて訴へんとするものを  
挾まんとする當初の計畫なりしが、紙數多きに過ぎ書肆が刊行の  
都合之を允さず、所謂靈藥のみを抽出して先づ江湖に見えたるも、  
投藥の効果を完ふせんが爲めには、甘味たり將にオブラートたる



部分を棄つるに忍びず。乃ち之を集めて茲に本著を成すに至れる所以なり。

本著は已に甘味のみオペラートのみ、故に一も議論を加ふることなく、余が多年軍艦旗の下にありて見聞し遭遇したる記憶を辿り、興味的圈内に於て前著の旨趣を敷衍し、讀者をして快然艦艦に駕し、海洋を馳するの思あらしむるを以て余が當面の目的と爲す。唯だ拙き鈍き余の筆力は果して此目的を達するや否や、従つて口舌に適する甘味となり、良好なるオペラートとなりて、靈藥の効果を完ふするや否やを憂ふるものなり。

大正六年九月

海軍大佐 山崎米三郎識

## 凡例

本書第一篇に於ては、海洋の大自然的な大壯觀を讀者の眼前に髣髴せしむる爲め、故らに一帆一鳥を交へず、陸影を加へず、唯だ我が艦を中心として大海原の光景を描出し、第二篇に至り海洋に配するに艦艇を以てし、陸影を以てし、漁舟を以てし、海鳥を以てし、其他艦上に目撃する種々の現象を以てして、海上の美觀雄觀を叙し、第三篇に至つて著者が海軍生活中遭遇したる逸話の若干を叙し、前二篇に對する讀者の印象を一層深からしむるに力めり。而して之を總括するに海洋思想海軍思想を喚起するを以て其骨子とす。第三篇を獨り口語文にしたるは讀者により多くの感興を與へんとするの微意に外ならず。



大正六年九月

著者記す

軍艦旗の下にて目次

第一篇 海洋の大自然

|   |        |    |
|---|--------|----|
| 一 | 海洋の日出  | 一  |
| 二 | 海洋の快晴  | 三  |
| 三 | 海洋の驟雨  | 四  |
| 四 | 海洋の日没  | 五  |
| 五 | 海洋の暴風雨 | 七  |
| 六 | 海洋の星月夜 | 二  |
| 七 | 海洋の暗夜  | 一五 |
| 八 | 海洋の月明  | 一六 |
| 九 | 海洋の濃霧  | 一九 |



|    |       |    |
|----|-------|----|
| 十  | 海洋の流水 | 二二 |
| 十一 | 海洋の波濤 | 二五 |
| 十二 | 海洋の雲翳 | 二六 |

第二篇 海上の雜觀

|   |         |    |
|---|---------|----|
| 一 | 艦隊の出港   | 三三 |
| 二 | 艦隊運動    | 三六 |
| 三 | 艦砲射撃    | 四一 |
| 四 | 全速力航海   | 四五 |
| 五 | 艦隊の入港   | 五九 |
| 六 | 泊れる夜の軍艦 | 六七 |
| 七 | 端舟競漕    | 七〇 |

|    |        |     |
|----|--------|-----|
| 八  | 滿期兵の退艦 | 七九  |
| 九  | 石炭搭載   | 八八  |
| 十  | 勅諭奉讀   | 九四  |
| 十一 | 軍歌の合唱  | 九六  |
| 十二 | 陸影     | 一〇〇 |
| 十三 | 漁火白帆   | 一〇〇 |
| 十四 | 海鳥     | 一〇三 |
| 十五 | 艦上の畫趣  | 一〇九 |

第三篇 舷窓閑話

|   |         |     |
|---|---------|-----|
| 一 | 海軍々人の出征 | 一一九 |
| 二 | 小孤島     | 一二三 |



|    |                 |     |
|----|-----------------|-----|
| 三  | 砲塔長の熱涙……………     | 二五七 |
| 四  | ホノル、の失敗……………    | 二五〇 |
| 五  | 土都君府の思出……………    | 二六二 |
| 六  | 希臘皇帝と握手……………    | 二七六 |
| 七  | ピラミッドに登る……………   | 二八二 |
| 八  | アレキサンドリア港……………  | 二九一 |
| 九  | 海軍今昔の感(其一)…………… | 二九九 |
| 十  | 同 (其二)……………     | 二〇三 |
| 十一 | 同 (其三)……………     | 二〇六 |
| 十二 | 同 (其四)……………     | 二〇八 |
| 十三 | 同 (其五)……………     | 二一〇 |
| 十四 | 艦上飾り物の失敗……………   | 二二二 |

|     |                 |     |
|-----|-----------------|-----|
| 十五  | 金剛艦上の鼠……………     | 二二五 |
| 十六  | 野 蕃 島……………      | 二二九 |
| 十七  | 日清戦争の頃(其一)…………… | 二三三 |
| 十八  | 同 (其二)……………     | 二三九 |
| 十九  | 軍艦千代田の艦長従僕…………… | 二三三 |
| 二十  | 少尉の外交演説……………    | 二三六 |
| 二十一 | いたづら波……………      | 二三六 |
| 二十二 | 開いた口が塞らぬ……………   | 二四一 |

附 録 目 次

|   |             |     |
|---|-------------|-----|
| 一 | 軍艦観覧心得…………… | 二四七 |
| 二 | 船暈豫防策……………  | 二五四 |



三 海軍軍歌……………二五九

目次終

# 軍艦旗の下にて

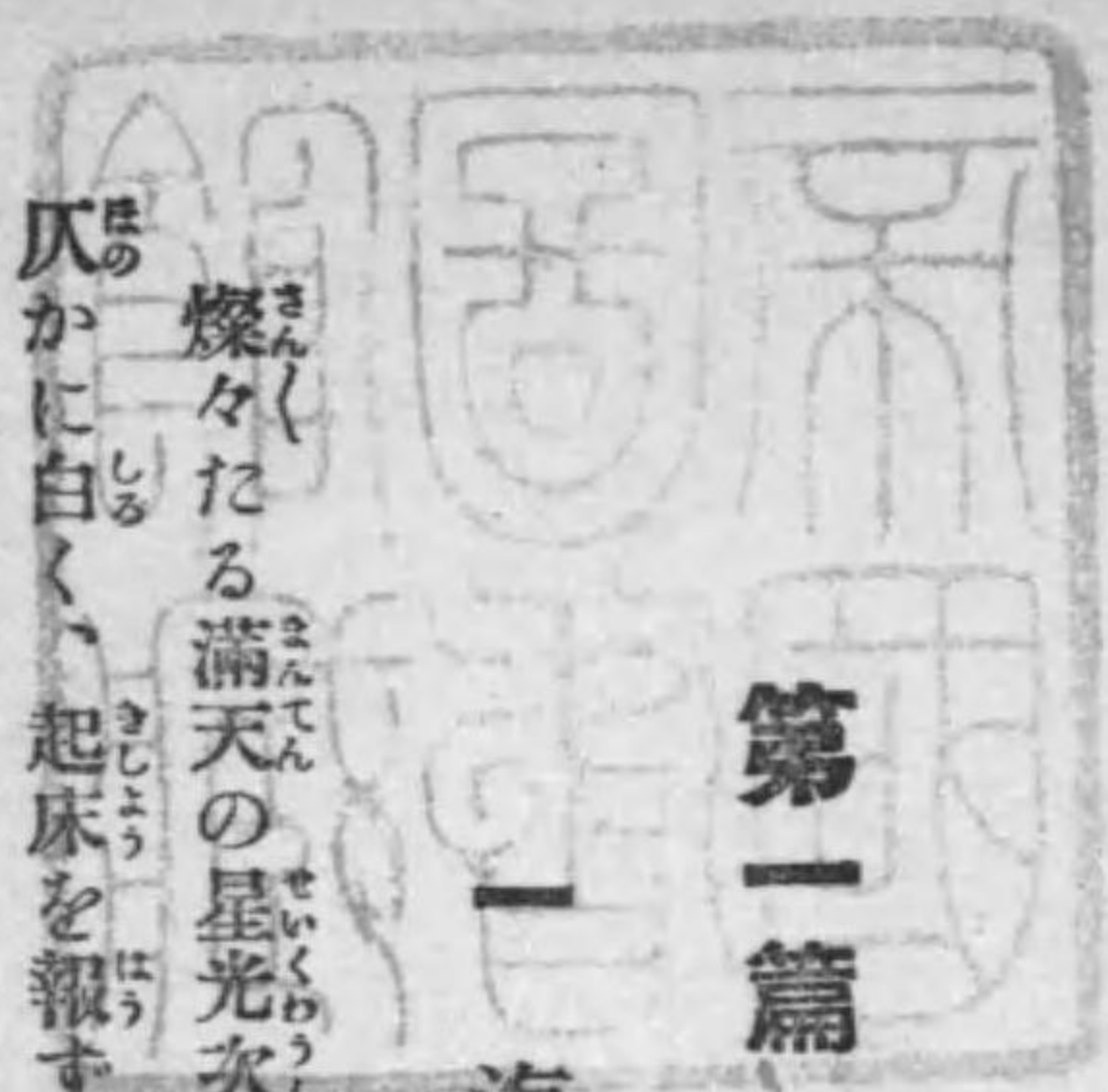
山崎米三郎著

## 第一篇 海洋の大自然

### 一 海洋の日出

燦々たる満天の星光次第に衰へ、夜の帳は徐ろに東天より捲き上げられんとして  
仄かに白く、起床を報ずる喇叭の號音は嘲哂として波間に響きぬ。

此時艦橋に立てば、皁月始めの曉風は冷やかに鬚髯を吹いて戎衣の薄さを覚え、  
四顧尙ほ朦朧、獨り東天の益々白み渡るを見るのみ。東天愈々白くして艦橋の人互





に顔容を認むるに至れば、白中黄を染め、次で黄中淡紅を帯び、次で一點の紅を潮  
すると見る間に、紅は次第に濃く次第に擴がりて、紅芒幾千條天空に奔り、そが直  
下の海は早くも紅を染め、一波又一波、次第に我が方へと染め來りて、千波萬波宛  
ながら臙脂を溶かしたるが如く、人も橋も煙突も亦紅となり、波上艦上見渡す限  
り萬株の杜鵑花唐紅に燃え出で、人は其間にありて九十の青陽謝を告ぐるを惜み  
つゝ、陶然として酔へるに似たり。

須臾にして金龍一閃深紅の中に跳ると見れば、幾千の光芒は倏忽として金色の光  
芒と變じ、紅の千波萬波は卒然として金色の千波萬波と化し、炫然灼然天も海も大  
氣も艦も人も皆躍如として眠より覺め、清新の活氣は潑々宇宙の間に滿ちぬ。海を  
家なる兵も崇嚴にして神秘的なる此自然の大壯觀に接したる刹那には、覺えず合掌  
して東天を拜せんとするもあり。心意爽々快極りなく、元氣は昨に十倍し百倍し、  
如何なる強敵も物かは、萬里の鵬程も物かは。

## 二 海洋の快晴

日已に三竿。秋天雲なく萬里一碧。微風和かに面を撫で、大氣清く澄みて甘露を  
吸ふにも似たり。水天の界は我が艦を中心として判然一大圓周を書き、細波だに起  
たざる海面は宛ながら碧瑠璃の如く、空に一鳥を印せず、水に一帆を點せず、四顧  
浩々、唯だ我が艦の潺々水を切り行く後に、長く一條の素練を曳くを見るのみ。

人若し高所より此光景を瞰視するあらば、我が巨艦も滄海の一粟粒に過ぎずして、  
艦上の我は更に其幾萬分の一にも足らざるを思ふとき、吾人は此光景の如何に雄大  
なるかを感じざるを得ず。

斯の如き豪宕、縹渺、清爽の境は海洋を措て天地の間何れの處にも覓むるを得べ  
き。吾人此境に蒞みては些の煩悶もなく、懊惱もなく、痛嘆もなく、邪念もなく、  
唯だ自ら身神悠々曠々として、いつしか宇宙の大、自然の壯と同化したるの感を覺



ゆるのみ。

### 三 海洋の驟雨

赫々たる赤日は今しも吾人の頭上を過ぎりて、水や空なる洋中も炎熱宛ながら燦くが如く、滿艦の武夫涼を懐ふこと轉た切なるとき、遙かに西の方、水天相交はる處に、一團の黒雲小島の如く起ると見えしが、見る／＼碎けて散りて四方に瀰漫し、益々瀰漫して益々黒く、忽ち半天を鎖し、次で滿天に及ぼし、今まで猛威を逞ふしたる炎帝もいつしか姿を隠して、眼界總て暗澹、風は漸く疾く波は次第に高まり、電閃輝々、雷鼓轟々、天海悽然たり。やがて風上には雨脚急がしく奔りて海面泡立つと見れば、瀧爲す豪雨は沛然として來襲し、先きの苦熱は卒然去りて萬斛の涼味肌に沁み、俄かに秋の到れるが如し。

斯の如きこと數分、雨は次第に霽れて暗雲皆風下に驅け去り、西天は早くも一片

の雲翳だに止めず。日輪は再び耀々として姿を現はし、風波亦元の静けさに復りぬ。

此時風下を顧みれば、雨師尙ほ雷霆を叱し、荐りに海若の夢を驚かして已ます。

即ち半天は晴、半天は雨、已に天下の奇觀を見る。時に姪々たる一大紅霓は鮮彩絢爛として忽然艦側に現れ、秒一秒風下に向つて遠ざかり、更に一段の奇觀を極む。

間もなく風下の驟雨は遠く水平線の彼方に去りて、滿空又暗雲の残れるなく、一天拭ふが如し。

初め西天に拳大の黒きを認めてより此間僅に十數分、忽ちに陰、忽ちに雨、忽ちに晴、其變轉の速かにして端睨すべからざること、到底陸上に於ける氣象の夫れを以て比すべくもあらず、誰か之を海洋の壯觀に非ずと言はん。

### 四 海洋の日没

天高く氣澄み、初秋の大海原は風きて鏡の如し。



日輪は蒼穹を滑りて西に傾き、今や水平線上數尺の處にあり。燿々たる光輝は次第に弱りて黄金色を呈し、團々たる靈體は次第に膨れてそが大きを増しぬ。

聽て夕陽の下端將さに水平線に觸れんとすれば、黄金色は漸々赤味を帯びて朱金色となり、天に映じ海に映じ、宛ながら熱火の燃え出でたるにも似たり。いつしか西空一帶低く其處彼處に現はれたる雲翳は裏面より此處光を受け、鎔鑄の半ば凝固したるが如き濃淡斑々たる黑影の間に微かに朱金色の焰を燃やし、そが周圍は紫に縁取り、更に其外周に朱金の縁を畫き、雲の絶間よりは朱金の光芒長く天空に射出し、人をして靈雲の翳くかと疑はしむ。又我が艦と落陽との間は爛々たる朱金の波を萬頃の海に湧かし、炫々眼に反映して疑視すること難く、莊嚴靈妙壯美の觀を極む。

日は次第に水平線下に隱るゝに隨ひ、形は益々大に、色は益々赤く、水天益々燃ゆ。首を回らして我が艦上を見れば、濃き鼠色爲せる煙突も橋も艦橋も砲塔も、赤

銅色爲せる人も我も、西に向へる一面は皆赫として燃ゆるが如し。

日は天海の間に紅蓮の焰を燃やしつゝ、終にそが靈容を水平線下に没したるも、餘曠尙ほ西天を燃やして愈々赤く、紅蓮の光芒幾百千道半天を射て、愈々靈玄壯麗の觀を呈し、恰も吾人に今日の別れを告げ、一瞬の後に來るべき暗黒世界に心して御艦を守るべく吾人を戒むるものあるに似たり。

須臾にして紫黒色の暮靄は東の海より遠く馳き來り、暮靄愈々馳きて愈々黒く、赤き夕焼の空も秒一秒色褪せて、終に四顧溟濛夜の帳は下れり。

## 五 海洋の暴風雨

朝來暗雲低迷して日輪は曇如と鈍き光を放ち、大氣は重苦るしく我が頭上を壓して、身體甚く倦怠を覺え、晴雨計の指鍼は次第に降りて止まず。さなきだに時は一歳中の荒天期たる八月末にして、目前の現象亦斯の如し。乃ち氣象激變の來るべき



こと最早一點の疑なきに至りぬ。加ふるに無線電信は幾度か颶風襲來の警を傳ふるあり。今や閩艦擧つて此自然の大敵と闘ふべく奮然満身の勇を鼓して對戰の準備に怠る所なし。

時已に午を過ぐれば晴雨計の降ること益々急にして、太陽は陰雲密々の間に消え失せ、風は加はり波は高まり、敵の先鋒は早くも戦を吾人に挑めり。

十分と過ぎ二十分と過ぎて時の進むに隨ひ、敵の勢力は愈々強烈となり、午過三點の頃には、敵は已に其強猛なる本隊を以て驀然吾人に殺到せり。見上ぐる空は満天暗灰色の雲に蔽はれ、そが下に墨を流せるが如き亂雲幾段の層を爲して、千切れ〜に飛び行く様箭よりも疾く、荒びに荒ぶ風伯は如何なる物をも吹き去り吹き倒さんとして咆哮怒號し、檣桁索條に撞りては幾百の猛獸が一時に叫び出だしたる如き唸りを發し、我が弩級艦の進行をも阻止せんとして幾萬馬力の機械力をも少からず徒勞に歸せしめ、動もすれば吾人の衣帽を奪ひ吾人の體驅をも奪ひ去らんと

するなり。二基の煙突より朧々累々吐き出づる漆黒の煤煙は上騰するを得ずして、斜めに風下の海面に吹き付けられ、煤煙水烟相交りて、其處一帶の海の面は暗濛咫尺を辨せず。澎々湃々天空を壓して來る狂瀾怒濤は山の如く突起し谷の如く陷落し、浪々相重り相闘ひ、艦首に激しては跳つて幾丈の雪齧となり、舷側を衝いては越えて幾條の奔瀑となり、時には其餘勢天に冲して橋頭を洗ひ、煙突を洗ひ、幾度か吾人に潮水の洗禮を受けしめ、風に碎くる波頭の水沫は縦横に飛び散り、潮煙濛々として海面を鎖し、甲板に打ち上げられたる水は、艦の動揺するに伴ひ、左右に驅けり前後に激し、白浪皚々として荐りに巨砲の間に漲り、之に加ふるに盆を覆へす許りの猛雨は風に壓されて横様に飛び來り、沙磔の如く憂然吾人の面を打ち、眼臉満開するに由なく、半眼細眼辛ふじて至近の物色を辨するのみ。天水混亂して益々晦暝、満目夜の如く、風聲と雨聲と濤聲と機關の聲と其他の雜聲と、混然紛然相交はりて、騰々、嘈々、聲々、響々耳は聾し語は傳はらず。人をして天と海とに住む幾



千萬の魑魅魍魎、魔神羅刹があらん限りの力を以て、哮りに哮りに狂ひに狂ふかと思はしめ、果ては天も茲に落ち海も茲に覆へるかと思はしむ。眞に此刹那の光景の凄絶絶倫なる到底言辭の克く盡くす所に非ざるなり。されど吾人は此境にありて、寧ろ其雄大跌宕なるを感ずるものにして、天地の間何れの處にか之に及ぶ大自然の大壯觀やあるべき。彼の戰場の光景は亦壯觀なるも彼は人爲的にして悲惨なり、之は自然的にして必ずしも悲惨ならず。吾人は此光景裡に在りて大自然の大敵と闘ひつゝ、泰然航路の安全を案じ、悠然氣象の推移に注意して、克く艦と人とを併せて全ふし、護國の務を果さんとすの外、恐怖も苦痛も毫末吾人の念頭に往來することなく、只唯吾人は大八州帝國の男子として、此強敵と闘ひ此大壯觀に遇ふを以て、寧ろ一の誇りと思惟し、一の修養と考慮し、終には吾人自身も亦此大壯觀中の一小壯觀なるが如くに感ずるなり。

此時小艦ならんには艦體の傾斜二十度に及び、三十度に及び、或は更に其以上に

及び、前後に動き左右に揺れ、忽ちにして山嶺、忽ちにして谿谷、艦上の人々は右に仆れんとして復た左に踏めき、甲板に張り渡せる索條に縋りて僅に顛倒を免れ、卓上の食器は木枠の内に置かれ辛ふじて滑落を防ぐも、尙ほ羹汁溢れ炙肉躍り、喫食の間些の注意をも怠るを得ざるなり。又室内の椅子は倒れて此方に仰臥し、書冊は落ちて彼方に散亂し、狼籍到らざるなく、其他艦内の混雜名狀すべくもあらず。されど日新科學の智識を以て建造されたる現代の艦船は、氣象の推移に注意し、其操縦を誤らざる限り、決して覆没難破の顧慮なく、吾人は斯る光景裡にありても毫末疑懼の念を生ずることなし。況んや今吾人の乗れる艦は三萬噸に近き弩級艦にして、其巨體は克く風浪に抗し、そが猛威を逞ふせしめず。傾斜十度を越ゆるが如きは極めて稀にして、儼然浮城の如きに於てをや。

已にして夜に入れば、黑白も分かぬ黒闇々の裡に、破浪碎濤綿の如く雪の如く、其處に現はれ彼處に立ち、百千の怪物海の底より躍り出でたるにも似て、更に一段



の壯觀を加へ、甲板の上に進る白浪の中には燐光點々燦として輝き、又一奇觀を添へぬ。

七時の頃には風向の變動甚だしくして、愈々其極度に達したりと覺しく、敵は一段威力を逞ふしたるも、終に吾人の撃退する所となり、次で殿軍亦敗北して勢力次第に挫け、晴雨計は漸々上騰し來り、風は次第に和らぎ、夜半に近づきては著るしく靜穩に復し、天明の頃は更に靜穩となり、聽て朝暾晃々雲間を洩れて、吾人の勝利を祝するが如く、唯だ長濤の緩やかに來りては去り、去りては來り、惡戰苦闘の名残を止むるのみ。

## 六 海洋の星月夜

夕陽既に落ちて六合漸く仄暗く、早くも宵の明星は獨り微光を放ちて寒空に生れ出でぬ。

頃くにして星は星を生み、二星又一星、五星となり、十星となり、天空愈々暗くして星は愈々多く、光は愈々鮮明を加へ來りぬ。

吾人今悠然艦上に立つて、一點雲なく晴れ渡りたる天邊を仰げば、一目彌望、滿空皆是れ星の林にして、恒星の一定不變なる、遊星の不休運行せる、大なるもの、小なるもの、白光に富むもの、黃輝を帯ぶもの、群星紛然として霄漢を飾り、又北斗七星の屈折せる、三宿星の串連せる、密々集團せるもの、離々疎散なるもの、幾百の星座錯然として位置し、更にそが中に銀河は蜿蜒々群星を壓して天心を貫き、滿目燦として女神の碧衣に輝く點々萬顆の眞珠か、爛として天宮の藍氈に閃く斑々千區の銀紋か。寒威坐ろに身に沁む洋上の星月夜は寂寥沈靜の内に幽渺肅嚴の氣を湛へ、吾人は此大自然的壯觀裡に轉た超人化するの思あり。

吾人は斯の如く藐々無邊の天漢を仰ぎ、有らゆる星震の大半を同時に指顧する刹那に於て、又赤道の南北十數度の洋上にありては、有らゆる星震を殆んど一望の下



に指願し得るを思ふ刹那に於て、又肉眼に見る此幾萬の星が、其實幾萬幾億萬なる  
を知れる刹那に於て、更に又其或る者は我が地球よりも幾百千倍の偉大なる世界に  
して、其或る者は幾百千年を経て始めて光輝を吾人の眼眸に達せしむるものと知り  
たる刹那に於て、吾人は愈々天漢の無邊際無限大に高遠なるを感ずると同時に、洋  
上星月夜の壯觀が愈々益々大壯觀たるを覺えぬ。

眼を下して海上を眺むれば、宛ながら油を流したるが如き水の面に満天の星を宿  
して映光微動し、星の亦海中より浮び出でたるかと疑はれ、眸を放てば水平線に出  
没する遊星は、朝暎夕暉の夫れに似て、我に向ひ一線長く銀光を水面に投げるを見、  
更に復た首を上げれば流星二三箭の如く我が艦を掠めて飛び、一段幽玄の感に打た  
れぬ。

艦橋のほとりには、一二の將校六分儀を手にして頻りに此等星震の高度を測るあ  
り。浩蕩たる霄漢の内に一點豆の如き天象を捉へて、茫茫漠々月なき夜の洋上に毫

釐誤らす艦の所在を知るに至つては、其人亦此壯觀と同化したるの感起りぬべし。  
瞻望之を久ふして寒冷益々加はり。星光愈々澄んで凍れるかと恠まる。

## 七 海洋の暗夜

星斗闌干として幽寂なる壯觀の海上も、夜の深くるに従ひ何處よりか一片の雲翳  
現はれ來り、次第に擴がりて終に満天を掩ひ、星震悉く影を潜めて、輕風吹き出  
で漣波起り、寒威は更に海上を渡りて迫りぬ。

低き波頭は徐かに崩れて朧ろに白く、艦首に分けられ機關に攪亂されたる水の共  
に白く泡立ちたるが、燐光の爲め一段鮮かに見ゆるの外、黒闇々として一線一點の  
瞳底に映するものなく。吾人は水天滔蕩際涯を知らざる海洋にあるも、宛として地  
底幾千尺の暗室に入りたるが如く、俄かに狹隘を感ずるに至りぬ。されど此暗室が  
亦茫茫として極みなきに思ひ及ぼしたるとき、再び浩濶の感に復れり。



吾人は我が家の内にてすら、暗きを行くには、手もて探り足もて警め、辛ふじて一步一步を進むるに、今我が艦は一瞬數十尺の速さを以て、此暗黒世界を突破しつゝ、猛然巨體を馳するを思へば、此光景も亦壯觀ならずとせんや。況んや諾冊二尊が天の瓊矛を以て滄溟を探り給へる神代の蹟を偲べば、幽玄壯大の感は更に油然として湧き出づるを覺えぬ。

## 八 海洋の月明

満天満海唯だ紅蓮の焰に焼けたる入日の影も己に跡なく。天地溟濛として點々數星を仰ぎ、一千の豺豨盡日の苦熱より始めて蘇りたるを覺ゆるとき、白光靡ろに東天に起り、宛ながら夜の明け初めんとするにも似たり。

白光荐りに白光を加ふれば、やがて笠形爲せる銀塊は燦然白光の内より波上に現はれ、銀滴忽ち水に落ちて銀波となり、銀笠の上りて銀半圓となるに隨ひ、銀滴は

一波より一波に移り、見る々々波上を疾走して我が艦側に來りぬ。

忽ちにして一面の銀盤は龍神下より之を擎げ、天女上より之を扛げて、全く水天の界を離れ、淨々昭々百鍊の明鏡を開きたるが如く。朦朧たる天空に清光忽ち漲りて星辰光を失ひ、煌々たる銀色は千波萬波に湧きて、滿目濶然、涼風更に涼味を加へて爽快極まりなし。

吾人は此急速なる眼界の變轉に接して、僅々半時の前夕照の壯觀に驚嘆の聲を放ちたるを顧れば、彼の落日が逸早く水平線の下を西より東に廻り、そが紅蓮の金衣を白妙の銀服に更へて、茲に再び其靈容を現はしたるに非ざるかと疑はれ、暫し此自然の壯觀に茫然たらざるを得ざりき。

斯くて月は清空を破つて一尺を上れば、艦は銀波を蹴つて一漚を進み。水天杳渺の間、月艦互に活動を競ふが如く、形影の伴ふが如く、浩浩たる空中の孤月輪と、漫々たる波上の一浮城とが絶妙の對照を爲して、益々壯大の感に打たれぬ。



初更の頃再び艦上に出づれば、月は益々娟々として已に高く半天にあり。清輝千里に渡りて銀波萬頃に流れ、皎潔浩蕩の感更に深きを覺ゆ。乃ち身を臥榻に横へ、萬斛の涼味を掬しつゝ天漢を仰げば、心氣曠然として宇宙の壯觀を獨り我が物としたるが如し。仰臥久しくして爽涼骨を洗ひ、夜色沈々艦上聲なく、立つて艦室に下らんとすれば、月の雫か、桂の露か、衣袂悉く沾ふを見る。

三更の頃三たび艦上に出づれば、月色水の如く天心に懸りて、冷涼已に夏去り秋の到れるかと訝しむ。此時波濤稍や高まりて艦體軽く動揺し、艦の中央線に立つて月に對すれば、橋頭は月の右に見えつ、左に見えつ、交々更はる様の面白さに、暫く恍惚として眺むる内、いつしか我が艦の動揺するを忘れ、橋頭の左右に動くを見ずして、唯だ月の橋右に走り橋左に駆けるを見、玉兔鞦韆に乗りて戯るゝかと恠まれ、天津乙女が天のテニスコートに月球を弄するかと疑はる。

五更の頃四たび艦上に出づれば、月已に傾きて斷雲頻りに去來し。雲は月を停め

んとしき抱き、月は雲より脱せんとして奔り。忽ちに滿目皓々、忽ちに天海朦々、或は半海輝き半海暗く、匆忙變轉の狀亦洋上月夜の壯觀なる哉。

### 九 海洋の濃霧

洋上には若葉青葉の新緑を見るを得ざるも、青空一碧、蒼波激澗、隈なく照らす。日光は未だ強烈の感を與へずして、習々吹き來る軟風は肌心地良く、天海自ら初夏の趣を漂はして見えぬ。

我が艦は此日光を浴び、此風に吹かれて、雄然進み行く前程に、遠く水平線を蔽ひて、左右に濶く天空にかけ、朧ろに白き長城の築き出だされたるを認めぬ。艦の次第に進むと共に、長城は次第に此方に近寄り、忽ちにして艦は長城の中に突き入りぬ。

唯だ見る滿目濛々漠々、煙の舞けるにも非ず、夜の近づけるにも非ず。宛ながら



陰りガラスに包まれたるが如く、僅かに己が周邊咫尺の間を見るを得るに過ぎずして、眼界已に天なく、海なく、又我が艦もなく、今や吾人は全く濃霧の内に封鎖されたるなり。

吾人は已に天も、海も、將た我が艦をも見るを得ざるが故に、又我が身の艦上にありて波間を進むの感なく、恰も白雲に乗じて天津御空を翔けるが如き心地し、低く艦首に水を切る濤々の響も、高く雲際に吹く颯々の風かと疑はれぬ。

斯の如く漠々として幾湮幾十湮に互れる濃霧も、罌子の種粒にも足らざる水球の紛々風に從つて浮動するにありと知るとき、誰か宇宙を容器とする水の作用の偉大なるに驚かざるを得んや。

雨雪は海上の展望を妨ぐるも、尙ほ多くは若干の前程を認め得べし。獨り濃霧に至つては吾人をして全然盲目に化し、眼の世界より耳の世界に移らしめ、猛獸の吼ゆるが如き汽笛を鳴らしつ、聞きつ、目に見るを得ざる他船の所在と航路とを、目

見るに如く判断して、此自然の妨害を排するに至つては、吾人人類も亦偉なる哉。吾人は斯の如き漠々世界を一二時間にして脱出することあるも、時としては半日に彌り、一日二日に彌り、或は數日に彌ることあり。茲に至つて吾人は更に自然の壯大を思はざるを得ず。

## 十 海洋の流氷

驚くべきは自然かな。地球の兩極一帯が極みなき氷山に掩はれて、陸か海か千古未だ秘密の謎の解けざるは措て問はず。一望際涯なき大海原に朔風一たび吹き起れば、結んで氷海となり、碎けて流水となるに至つては、何ぞ其變化の甚だしく、其自然力の偉大なるぞ。

我が艦は某の年或る任務を以て北海に游弋しぬ。時は彌生のやがて柳櫻をこき交せて、都に春の錦を織り出だし、人は蝴蝶と共に花に狂はんとする頃、千島列島の



一角に鯨鯨を蹴つて艦を進むれば、寒威凛々肉を徹し骨を刺し、幾重の防寒衣も  
龍大の菱船も、未だ暖を覺ゆるに足らずして戦慄禁じ難く、狂瀾舷頭に碎けて飛び  
散る水沫は、艦側に、砲身に、欄干に、甲板に一面の堅氷を結びて、鐵の浮城を水  
晶の艦と化し、指大の索條は一夜にして頭大の水晶桿となりぬ。

前程の水域はいつしか次第に減じて、唯だ見る白皚々の小島點々波上に浮ぶを。  
是れ間はずして流水たるを知る。艦は進んで流水の間に入りぬ。其處に彼處に散在  
する大小無數の小白島が、風潮の誘ふが儘に浮動しつゝある様の、宛ながら雪中の  
小松島が活動するにも似て、吾人は先づ驚愕の聲を發しぬ。氷上雪を載せて、大な  
るは方數十間、小なるは一二間、水上の高さ數尺に足らざるも、水下の深さは間餘  
に及ぶべし。艦は大塊を避けて、其間を縫ひつゝ進めば、幾多の中塊小塊は絶えず  
艦腹を敲いて烈しき響を發し、水雷に觸れたる如き震動を艦體に感せしむ。艦首水  
塊を衝いて兩斷すれば、外鉞の赤き塗劑は其破面を染めて恰も鮮血の滴る如く、艦

速著るしく減じて艦行甚だ惱み、吾人は再び驚愕の聲を發しぬ。

數時の後辛くも之を突破して、艦は復た一目彌望の大海原に入り、始めて安堵の  
思を爲しぬ。されど自然は吾人に一段の壯觀を示さんが爲め、幾何もなくして、再  
び我が艦を流水の内に鎖しぬ。

凍雲荐りに寒空を罩めて寒威益々募り、終には六花紛々として降り出で、剩つさ  
へ日は暮れて夜の世界は來りぬ。此儘進行を續けんか、大氷塊に衝突して艦體を  
傷ぐる恐れあるを奈何せん。此處に錨を投せんか、水深くして錨の海底に達せざる  
を奈何せん。止むなく艦を停めて氷塊の内に漂へば、雪は益々降りしきり、海馬の  
友呼ぶ聲にやあらん、奇しき叫びは雪を徹して遠く彼方に聞こへぬ。

一夜は警戒怠りなく不安の内に過ぎて、明くれば雪は全く霽れしも、個々の氷塊  
相集りて凍結し、そが上には白雪堆積して、見渡す限り遼々たる一大雪野となり。  
艦は大雪野の真中に植え付けられて、寸尺をも進むに由なく、吾人は三たび驚愕の



聲を發しぬ。やがて朝暾凍雲を破りて雪野を射れば、幾十百渚の間に展開せる白金の板上に幾百萬燭力の大電光を浴びせたるが如く、炫然燦然、人をして忽ち眩目せしめ、英雄も、賢者も、凡人も、愚物も、此清淨森嚴なる大自然の大壯觀の前に、當さに一齊に平伏するに至るべく、吾人は四たび驚愕の聲を發しぬ。變り易き北海の天候は午後に至りて急變し、風力次第に加はり、朔風積雪を捲いて起れば、復た滿目溟濛として咫尺を辨せず。須臾にして風益々強く狂瀾怒濤は遠くより氷下に突き入り、其水壓の力が氷床を動かすと思ふとき、砲聲に似たる響は前後に左右に生じ、殷々として戰場に近づきたるが如し。忽ち見る幾多の龜裂は氷原に現はれ、怒濤其間より跳り出で、氷上に奔騰し、氷原は再び元の氷塊となりて動き始め、怒濤荐りに到れば氷塊は愈々動きて、見る／＼風下に向つて駆け、艦は茲に羈絆を脱して自由の水上に出で、吾人は五たび驚愕の聲を發しぬ。嗚呼驚くべきは自然かな。

## 十一 海洋の波濤

世に活動變化の極まりなきもの海洋の波濤に如くはなかるべし。風全く枯死し海面滑かにして動かざること、宛として一面に紺碧の羽二重を敷き詰めたるが如きとき、微風煽々として吹き來れば、海は倏忽眠より覺めて漣波微かに起り、海面一體に小皺を生じて、縮緬を敷きたるに宛も似たり。更に風少しく加はりて波稍や高まり、波頭の軽く碎けて白く亂れたるは濃藍の緋にも似たる哉。風の次第に加はるに隨ひ、波は次第に高まりて、海面漸く凸凹を増し來り、始めは犬の如く犢の如く突起せる波濤も、聽て馬の如く象の如く、終には家の如く山の如く洶湧天を衝いて殺到し、唯だ見る幾千萬の浪山濤嶽白雪を戴きて突起しつ陥落しつ猛然傲然活動する處、風伯哮り狂ひて波頭を掻き撈り、潮烟濛々海面を閉ぢ、何處までが浪にして何處より空なるか、天海混亂判別し能はざらしむ。而して暴風吹き去り氣壓上騰し



始むれば、狂態次第に鎮まりて、漸々元の静けさに復へる。斯の如く海洋の波濤は一日の内、將た一刻の間にも千變萬化して止まざるなり。

波濤の運動は奈邊に始まり、奈邊に終るともなく、一浪轟乎として躍れば、他の一浪は蒼惶として崩れ、一濤脹然として起れば、前の一濤は悠然として去り。浪々相繼ぎ、濤々相追ひ、時には相打ち相重り、巨浪は細浪を呑み、長濤は短濤を負ひ、上つては高く星界を摩し、下つては低く奈落に近づき。静かなるとき蒼海萬里の晴光に詩人の興を唆かし、激するときは濤山千疊の險海に旅客の膽を冷やす。

若し夫れ波濤活動の状を一層眞個に味はんとせば、小艇に乗じて波浪の間を航するに如かず。艇の浪巔にあるや、浪々相闘つて起きつ倒れつする壯觀は盡く雙眸の間に集り、恰も高山の頂に上りて群山の糾紛せるを脚下に眺むるが如く、已にして艇の浪坂を滑りて急轉直下浪谷に入るや、巍峩たる峻嶺に圍まれたるにも似て、眼界頓に狹隘となり、氣泡の交はりて淡綠色を呈せる四周の水壁は、今にも崩壊

して、我が頭上に墜落し來るかと恠まる。されど自然は眞に自然なり。浪谷いつとなく高まり、浪山いつとなく下り、艇は自然に浪谷より浮び出で、浪背に乗つて浪坂を駆け上れば、展望茲に再び開け、艇は早くも復た浪巔にありて、天下の群小にも譬へつべき千波萬波を傲然眼下に塵ぐにぞある。

風雨の害は厭ふべけれど、五風十雨草木始めて繁り百穀始めて實る。生存の競争は悲酸の極みなれど、克く人智を進め人類を幸す。戦争の慘禍に至つては最も怖るべしと雖も、爲に國民を發奮せしめ國家の進運を來すこと多きに非ずや。海洋の波濤亦時に船を呑み人を殺すと雖も、其活動に由りて無限の水量を常に清新に保ち、魚介海獸の族依て蕃殖し、海藻の類依て茂生し、沿岸の大氣依て清澄となり、海の人依て健康を損するなし。實にや活動は有らゆる事物が向上發展の根本にして、海洋の波濤は吾人人類に活動の貴重なるを教ふるものなりと言はん哉。更に海島國の國民は此教訓を受くること最も大なりと言はん哉。



## 十二 海洋の雲翳

海洋の雲翳が壯絶、美絶、奇絶の觀を現はすこと、到底陸上に於て見るを得べくもあらず。水天髣髴として四方に陸影なき大海原にありては雲こそ實に宇宙の綾なれ。彼の縹渺たる蒼穹の瑠璃色を地として、其處に織り出ださるゝ雲の綾文と、その色彩の千態萬狀變幻極まりなきに至つては、誰か自然の偉觀に憧憬せざるものあらんや。

雲は倏忽の間に起りて倏忽の間に擴がるあり、徐々に起りて徐々に擴がるあり、雲層一段なるあり、雲上更に雲を戴くあり、高く飛揚するあり、低く垂下するあり、離れては合し、合しては離れ、舒びては捲き、捲きては舒び、悠然去來するあり、匆忙奔馳するあり、其出沒運行の狀已に甚だ一様ならず。

吾人の日常望見する雲には狹長なると、繊細なると、團積せるとあり。此等は或

は單純に現はれ、或は複雑に現れて、其形狀の變化最も多く、細く散りては魚鱗となり、漣波となり、團く分かれては羊群となり、怒濤となり、一條の雲堤長く突出しては丹の橋立となり、大小の雲片錯々布置しては陸の松島となり、或は羽毛の蓬々たる、或は洗髮の氈々たる、愈々出で、愈々窮りなく、其洒々淡々の狀、人をして爽快平和の感を起さしむ。

夏日水平線より天心に向つて團々簇々堆積して起る濃淡斑々灰色の雲こそ、詩人の所謂雲の峰にして、或は奇巖怪石相抱擁して立ち、或は千巒萬峰相重疊して聳え、宛ながら南畫の山水圖より脱け出でたるにも似たり。又或は佛陀の巨像となり、或は力士の角技となり、人をして豪壯雄大の感を起さしむ。

朝暉夕陰雲に映じては、光彩絢爛、或は百花撩亂の春を現はし、或は萬株錦繡の秋を見せ、紫雲翳き金雲漲ざり、其濃艶にして神秘的なる光景は、人をして崇嚴神聖の感を起さしむ。



陰雲空を鎖せる下に亂雲黒く雨を帯びて斷々飛來せば、蛟龍半天に翔けり、猛獅巖頭に怒り、或は機雷の爆發したるかと思ひ、或は鱗鱗の殺到するかと恠み、人をして荒涼殺伐の感を起さしむ。

杳渺たる水平線上唯だ一團の雲塊低く現はれたるとき、吾人は往々之を陸影と誤り、覺えず雲耶山耶吳耶越を低吟すなり。

若し夫れ洋上月夜の雲に至つては、妙趣更に一段の深きものあり。低く西に傾ける殘んの月影漸く白く、横雲三四條細く月を掠めて變き、そが下に銀波の微かに輝ける、水平線上累々高く現はれたる雲の峰の月光を浴びて、宛ながら氷山の如く銀波の上に立てる、微雲天心に點綴して半輪の月寂びしく其間に懸り、月光朧ろに雲を透して波に映せる、一抹の低雲月を蔽ひて水天濛々たる處、白輝雲邊に映じて銀の縁を取れる、斷雲徂徠して切りに月を吞吐し滿目晦冥なるとき、遙に遠き海原に獨り銀波の宿れる、孰れか洋上月夜の雲の壯觀ならざるものあらん。

斯の如く海洋の雲は天空を飾る唯一の綾にして、吾人に自然の壯觀を感せしむること絶大なると共に、亦吾人に詩情と書趣とを湧かしむる無盡の雅庫なり。吾人は多年海洋の雲を見て、奇と呼び、美と叫び、壯と稱へたること幾百千回なるや知るべからざるも、之を詩とし之を書とすること能はざりしを憾む。



## 第二篇 海上の雜觀

### 一 艦隊の出港

帝國海軍の中堅たる戰艦巡洋艦巡洋艦約二十隻及水雷戰隊一隊に成れる龍大の一艦隊は、茲旬日來威風堂々港頭を壓して、我が南門の鎖鑰たる佐世保軍港に碇泊中なりしが、今日しも某地に向け出港せんとするなり。

約五十隻の艦艇に屹然樹立せる大小一百數十の煙突よりは、曉來漆黒の煤煙高く立ち騰りて溟々濛々滿空に漲り、麗かなる晩春の日光も靡ろに霞みて、遠き周圍の山の端に僅に蒼天を見るのみ。

前日上陸を許されたる萬餘の豺貅は一人として期を違へる者なく、早くも己が艦に歸りて、夫れ々々擔當の業務に就き、浮標に繋げる錨鎖は已に索條に換へられ、汽艇端舟は已に悉く引き揚げられ、幾萬馬力を出すべき蒸汽は已に沸々汽罐の内に



蒸成せられ、種々の機關は已にそが運轉を試みられ、命令一下皆活動を開始せんとして、艦々已にそが雄魂を宿しぬ。

艦て午前八時旗艦の甲板上に嚙々たる君が代の奏樂起り、同時に他の各艦よりも亦君が代の喇叭吹奏され、乗員三萬の最敬禮の裡に、紅鮮かなる大軍艦旗は嚴かに各艦々尾の旗竿に高く掲げられぬ。次で彩旗敷旋旗艦の桁端に翻りて下ると見れば、出港を令する角音は勇ましく各艦同時に鳴り渡り、乗員は疾驅して瞬時に皆己が部署に就き、見る／＼番兵塔は取拂はれ、舷梯は揚げられ、左右に突出せる長き繫艇桿は舷側に收められ、其外有らゆる出港作業は忽ちに行はれて、早や旗艦は浮標を離れ、軍艦マーチの奏樂裡に徐々として浮城の如きそが巨體を搖ぎ始めぬ。

此時各艦の前艦橋には一艦保安の重任を負へて、艦長親ら艦の操縦を掌り、副長は出港諸般の作業を指揮しつ、航海長は艦の操縦に關して艦長を助けつ、機關長は艦底深く機關室にありて、精巧複雑而かも強大なる幾多機關の作動に寸毫の過誤

なからしめんとして部下の諸員を指揮しつ、其他の職員皆各々一部一局の擔任作業に従事しつ、閩艦一千の人は一人艦長の意志に従つて活動するにぞある。更に旗艦を見れば、司令長官は幕僚を従ひ後艦橋の上に儼然として立ち、此大艦隊を己が意のままに／＼に指揮する榮譽の赫々たるをそが頭上に戴き、至尊に對し奉り將た國家に對する責任の重大なるをそが雙肩に擔ひ、雪白の鬚髯を朝風に靡かせつ、雄姿颯爽として四方を睥睨し、其冷靜沈着水の如き頭腦と豪大斗の如き膽力とは、其春秋幾十鍛練に鍛練を重ねたる優秀の手腕、崇高の人格と相俟ち、人をして坐るに此海帝國の一大重鎮たるを思はしむ。

旗艦に次で二番艦續き、三番艦續き、四番艦五番艦次第々に運動を起して續けば、艦の進行漸く疾く、序列整々港口に向へる様は、恰も錯然盤上に散亂せる基石を取りて一個一個等距離に置き並ぶるが如く、或は紛糾せる亂絲を其緒より一方にすら／＼と引き出して、一絲紊れたる躑を止めざるが如く、先頭遠く港外に出で



殿艦始めて錨地を離れ、颯々追々數裡に亘りて一大長蛇の如く、百數十條の煤煙は黯々相並列して、同じ方向に翳きつゝ天の一方を焦し、數十旒の軍艦旗は形々輕く海風に翻りて、時に各艦の檣桁に翻々たる信號の彩旗と共に、波上萬朶の花を咲かしめ、更に又紺碧の水を切り行く艦の後尾に海面白く残れる跡は宛ながら白妙の裳裾を曳くに似て、壯絶雄絶の觀、懦夫をも奮起せしむべく、婦女をも勇躍せしむべく、又過去の幾戰役に我が艦隊が纜を此軍港に解いて征途に上りたる當時をも回顧せしむべし。

## 二 艦隊運動

人若し郵船に搭じ海洋を航するとき、水天髣髴の間に煙か雲か黯々たる一塊を認め、須臾にして其形状の變化しつゝ風下の方に淡く翳き、濃く黒き部分の數個處に斷續するを見、同時に尺にも足らぬ五六の細桿參差として其間に立てるを見出だし

なば、それは艦隊の航行し來るにぞある。分一分彼我の近づくに隨ひ、二三條と見たる煤煙は十條となり、二十條となり、百條となり、尺にも足らぬ五六の細桿は、丈にも餘る數十の艦橋となり、間もなく艦體は水平線上に現はれ、幾十隻の巨艦快艇は黒煙天を焦し、白波を蹴立て、殺到するの壯觀を望むめり。

吾人の艦隊は斯の如く商船を驚かし、漁舟を驚かし、海鳥を驚かし、龍神を驚かしつゝ、驅逐隊を一側に從ひ、颯々たる單縱陣を以て、軍容整々、今し某地點の洋上に達しぬ。時に日僅に午を過ぎ、天空隈なく霽れて、碧波疊の如く滑かなり。

聽て艦隊運動開始の信號旗艦より傳はるや、艦長はケースを去れる雙眼鏡を肩にして、其緊張せる面影を艦橋に現はし、副長航海長は又艦橋に、機關長は機關室に、各々が任務に當り、其他一般の將校は他年己れが一艦を指揮するとき、天晴の手腕を振はんとして、熱心之を見學せんとしつゝあり。

忽ち見る彩旗一二旗艦に掲げられて陣形の變更を令すれば、各艦一齊に艦首を九



十度左に轉じ、茲に長蛇の陣は瞬時にして單横陣となり、舷々横に見て排列し、幾十の艦首出でたるもなく、入りたるもなく、宛ながら魚頭を揃ひて一串之を横に貫きたるが如し。須臾に二列の縦陣に變じ、四列の横陣と化し、忽ちにして雁行、忽ちにして鳥翼、合しては離れ、離れては合し、艦首東に向つては復た西に戻り、陣列南に馳せては復た北に駈け、艦は幾回か轉頭し、列は幾回か旋回し、時に艦々相觸れんとするが如く、列々相接せんとするが如く、無心の兒童をして之を觀せしむるも、手に汗を握ること幾回なるや知るべからず。而も此間艦々の距離と列々の間隔とは常に規々正々として毫末紊れざる、恰も熟練せる兵士の練兵場裡に於ける運動にも譬へつべし。

是に於て試みに想へ、若し二十隻の艦を彼の艦觀式に於て見るが如く四百米宛の間隔に一直線に並列するとせば、其延長實に四裡に餘るを。此一大長蛇が二十節の速力にて種々陣形變化の運動を爲すとせば、縱令狹隘を忍ぶとするも、十裡四

方即ち二百平方哩の海面を要し、若し稍や運動の自由を得んとせば、二十裡四方即ち四百平方哩の海面を以て、そが練兵場と爲さざるべからず。此一望浩として際涯なき大海原を、幾十隻の艦が空に黒龍を漲らし、水に白蛇を躍らして馳驅する様の如何に雄渾壯大なるぞ、鯨鯢も驚きて深く海底に潜み、海若も怖れて遠く龍宮城に逃れやしつらん。

又試みに想へ、人に個性の別あるが如く、同大同型の艦にてすら、喫水の深淺にも、舵、機關の作動にも、將た風浪の艦體に及ぼす影響にも、若干の差違を免れずして、必ずしも常に同一の機械回轉數に依りて、同一の速力を保ち、同一の轉舵に依りて同一の回頭を爲すものに非ざるを。況んや艦型艦體の相違せると共に、其運動性の著るしく異なる幾多の軍艦を驅つて、齊一の運動を行はんとするに至つては、操縦者の手腕を要すること一段甚深なるものあり。尙神ならぬ人間の業には必ずしも過失なしとせず、若し萬に一、信號を誤り操縦を誤らんか、外國海軍に前例尠か



らざる如き艦々衝突の大惨事は目前に起り、幾千萬の國幣を投じたる巨艦も、陛下の赤子たる國家の干域も、忽然として海底に葬り去らるゝに至るべし。是れ吾人が艦隊運動に最大の努力と最深の注意とを傾注する所以にして、而も吾人は此至難なる運動を憤の如き巨彈飛び、鯨の如き魚雷走り、空には空飛ぶ猛鷲狙ひ、水には水潜る怪獸窺ふ敵前に於て、所謂戰鬥速力を以て疾走しつゝ巧妙神速に遂行し、克く戰術上の要求を充たさんとするに至つては、其容易ならざること蓋し局外者の想像だも及ばざる所なるべし。されど請ふ杞憂する勿れ、吾人は先輩が多年の努力と戰役の經驗とに依りて、優に先進海軍をも凌ぐ程度に既に其室に入り、克く我が國民の信頼に答へ得る固き覺悟を存するなり。

更に又試みに想へ、幾萬馬力の機關を有する幾十隻の艦艇を驅つて、大海原に此壯大の練習を爲す爲め、幾何の燃料を要すべきかを。一艦一時間平均一百噸とするも、二十隻にて二千噸の燃料を消費すべし。若し此運動を三時間行ふとせば是れ約

五千噸の普通貨物船が二萬數千哩を航行し得るに相當すべきものにして、僅々數時間の訓練に此多額の費を要するに至つては、誰か一驚を喫せざる者あるべき。されど之が爲め我が海軍をして意義あるものたらしめ、我が國家の權威を克く維持し克く増進するを得るとせば、之を以て寧ろ廉價なる代價と言はん哉。

已にして吾人の艦隊は運動終りを告げ、再び元の單縱陣に復して茜さす入日の方向に向ひ、悠然水天の間に入りぬ。

### 三 艦 砲 射 撃

治に居て亂を忘れずてふ古人の訓戒は更に言はずもがな。累次の戰役に依り、砲弾命中の多寡は維れ戰勝を左右するの主因たるを痛切に覺れる吾人は、上は霞が關に樞機を握れる最高の幹部より、下は新募の五等水兵に至るまで、日夜最善の努力を爲しつゝあるなり。又獨り射撃のみならず、有らゆる戰技に關し、各隊、各艦、各



人が優等の成績を擧げんとして、熱心と言はんよりは寧ろ熱狂の態度を以て奮勵しつゝあるなり。更に又技術家は絶えず機能の改善に腦漿を絞り、活用者は絶えず効率の増進に手腕を練り、兩々相頼つて歩一步向上しつゝあるなり。今日しも吾人の艦隊は某地に於て、眞に此意氣を以て艦砲射撃を行はんとするにぞある。

艦體何分の一にも足らざる標的は已に海上に据えられ、各艦は旗艦の信號に依り數分の間に實戦と等しき有らゆる準備を了りぬ。吾人が優に匍匐出入し得べき巨砲の二門を載せ、其總量六百噸にも及ぶ大砲塔は、砲塔長の一手に依り左右に輕々と旋回され、八十餘噸のそが砲身は、上下に易々と動かされて運轉を試みらるゝ様の宛ながら掌裡に拳銃を扱ふにも似たる哉。又副砲臺は悉くそが砲門の扉を撤して砲は整然と正横に向けられ、彈丸火藥は將さに裝填されんとして砲側に並列せられ、そが名残を互に囁くが如く、又神經系統の人體に於けると同じく、艦の首腦部より四通八達せる通信機關は、彌やが上にも異狀なきを慥められ、滿艦の整備已に寸毫

の残れる所なし。

準備已に終りを告ぐるや、艦長は總員を後甲板に集合し、嚴かに訓示して曰く、「今日こそ實に吾等が平素心肝を碎き、練磨に練磨を積みたる伎倆の程を示すべき大試験なり。射撃に關する委曲の事項に至つては、砲術長砲臺將校より屢々教示されたる所なるべきが故に、茲に本職が言及するの要を見ず。唯一言すべきは、一たび砲側に就て彈丸を放たんとするに當り、縱令平時の射撃にありても決して練習と思ふべからず。必ず之を實戦と思ひ、標的を敵艦なりと思ひ、今己れが放つ一彈丸の命中すると否とは、是れ我が全艦隊の勝敗の岐るゝ所、延いては帝國興亡の繫がる所なりと觀念し、必ず其彈丸を命中せしむべしとの大覺悟大決心を以て放たざるべからず。斯くてこそ其一發の彈丸にも、克く汝等が忠勇義烈の心靈移り、敵艦を追つても命中するに至るべし。而して之が爲めには冷靜沈着の最も必要なること言はずして明かなり、彼の徒らに熱中して却て亢奮するが如きは、眞個の軍人の



爲す所に非ず。終りに臨み、本職は一同と共に、今日の射撃に第一位の成績を獲んことを固く期待するものなり云々」と。其語氣莊重にして又沈痛、一千の部下聞として聲なく、一言一句克く彼等の肺腑に沁徹したるを視る。是に於て暫時休憩は令せられぬ。

此間多數の下士卒は、前部甲板の此處に一團、彼處に一團、煙草盆を圍み、或は逞ましき腕を扼して、今日こそ砲身に噛み付きて、我が艦に最良の成績を得せしめずんば止まずと言ふもあり、或は胸を摩り天を仰いで、吾等の勉勵と誠意とは神明も納受して、今日の射撃に良果を得せしめらるゝこと疑なしと語るもあり、其他己がよし、最良の成績を收めんとする自信を談じ、意氣昂然として已に月桂冠を獲たるの概あり。而も艦長訓示の旨趣を肝に銘じたる彼等は、次第に冷静に復し、そが頬邊に潮したる紅も次第に消えて、唯だ深き期待と固き覺悟の眉間に濼ふを見るのみ。時に一兵曹の砲後に肅然として立ち、そが頭を軽く砲に觸れて眼目し居

るは、射弾の必中を心に誓ひ砲に誓ひ神に誓ふにやあらん。又他の一兵曹の懷中より守り札を取り出して、頻りに之を頭上に戴けるは百發百中を神明に祈るにやあらん。之を以て迷津と嗤ふを止めよ、彼等は今や人事の總てを盡くして、茲に神明の加護を乞ふもの、決して凡俗の迷津者流と同一視すべきに非ず。口こそ言はね、艦長一人として誰か此心のなかるべき。實に吾人は平時にありても、鉅萬の國帑を以てする這般の大訓練を爲すに當りては、寢食も尙安んせずして、終には神明の加護を乞はんとすなり。

又此時後甲板には、折り椅子に腰を下ろして煙草盆を圍める將校の一團あり。年若き將校の荐りに快活に談ずる中に、砲術長と二三の砲臺將校とが相對して靜かに紫煙を翳かしつゝ黙々語らざるは、胸中抑も何をか藏する。直接射撃の指揮に當るべき砲術長はいふも更なり、之を補助すべき砲臺將校等が此時に於ける苦心の慘澹たる譬ふるに物なく、縦し平素の努力に依り自ら信ずる所深しとはいへ、兵



器も機關も固より死物にして、又之を活用する者は人にして神に非ざる以上、何時如何なる部分に障礙の起ることなきか、己等が射撃指揮の上に微少だも過誤を生ずることありて、あたは優秀なる射手の伎倆を發揮せしめざるることなきか、射手が亢奮して不正の照準を爲し己等が指揮の手腕を畫餅に歸せしむることなきか、孰れにもせよ、萬一成績の不良なる曉には、艦長に對し、將た艦員に對し、如何に此顔を向け得べきぞ、又此艦の名譽を如何にせん。斯の如く彼等が千々に思を焦すとき、其衷心忪々として己が任務の重きに懊惱せざらんとするも得べからず。されど常に修養を怠らざる彼等は、斯る場合に臨みて徒らに苦悶する者に非ず。既に爲すべき最善を盡して剩す所なく、唯だ天命を待つのみなりと自覺し來れば、憂慮は消え失せ迷霧は吹き散り、心頭澗然として光風霽月の感を覺ゆめり。

已にして射撃開始の令は先づ我が艦に下れり。艦は二十餘節の速力を以て馳せ出せり。戦闘の喇叭は忽ち艦内に響きて、全員皆直ちに戦闘部署に就けり。彈丸火藥

は已に裝填せられたり。滿艦堅睡を飲んで一語なく、瞬時の後振天湧海の大活劇を起すべき艦上も、こゝ暫しは静寂の境を現はしぬ。

聽て射距離と苗頭とは令せられ、砲は標的に向けられ、照準は定められ、一指將さに電輪に觸れれば、霹靂一聲、彈丸空を切りて飛ぶべくして、而も未だ發放の令は下らず。此時標的を見れば、吵として恰も手巾を擲げたるが如く僅かに波上に出づるのみ。嗚呼此大距離、此小標的、縱令我れに優秀の伎倆あるも、如何にして此彈丸を彼の標的に命中せしめ得べき。憐れ一段神明の加護を垂れさせ給へと祈る射手もありぬべし。其昔源平屋島の戰に源軍の騎士那須與一宗高が、平船船頭の扇を射んとして、波浪高く標的動搖し、狙ひを定むるに由なきとき、馬を波間に打入れ、縦し我が餘命を縮むとも、此浪を静め彼の扇を射さしめ給へと、暫し那須明神に祈りたる古話も、今目前に偲ばれて、吾人は覺えず一掬の涙を潑ぎぬ。されど已に頭腦の冷々静々たる我が射手は、茲に到りて徒らに狼狽喪心するものに非ず。曩



きに艦長の訓示されたる如く、今我が狙ふ所のものは標的に非ずして敵艦なり。萬一此彈丸命中を誤らば、我が艦隊は敗るゝなり、我が帝國は亡ぶるなり。敵艦如何に小なるも我が報國盡忠の魂を以て如何でか此彈丸を彼の敵艦に命中せしめなくてはきかと、一念固く五體に滿つれば、渾身の心氣茲に集中して一點丹田に澄み、百八の煩惱消えて跡なく、不知不識、鞍上人なく鞍下馬なきの境に入り、其心靈は凝つて彈丸に移り、更らに飛んで標的に移り、已に我が艦もなく、我が砲もなく、我が身もなく、唯だ此彈丸と彼の敵艦とあるのみ。唯だ此彈丸と彼の敵艦とを己が心靈の糸もて結び付くるにありと感じたる時、見る々々標的は一大艦の如く彼等の瞳底に映じ來りぬ。與一が波浪靜まり標的の動搖止みたりと見たるも即ち是れのみ。今や我が艦上幾多の與一は弓を滿月の如く引き絞りつゝあるなり。

發砲の時機は愈々來れり。艦長より砲術長にそが令の傳はると見れば、先づ數門の砲は轟然靜寂の境を破りて第一彈を放ち、大氣を切り行く奇しき唸りの尙ほ耳

朶に殘れる間に水柱已に白く標的の少しく前方に數條高く騰れり。斯くと見たる砲術長は從容迫らず、直ちに射距離に修整を加へしかば、次の數彈は美事標的に命中しぬ。是に於て主砲副砲一齊に發放を令せられ、一發又一發、大彈又小彈、數十門の砲口より迸出する彈丸は連續として間斷なく、殷々轟々萬雷一時に落ち、艦體は振動し大氣は攪亂され、砲下の水は躍つて波立ち、無限の天蓋も落ち萬尋の海も覆へるかと思はれ、勇絶壯絶の觀、人をして血湧き肉振はしむ。

砲火の指揮者は此大活劇場裡にありて、我が艦と標的との相對關係の推移其他の變化に鑑み、複雑極まる計算を冷靜の頭腦もて機微の間に判定し、絶えず射距離と苗頭とに修整を加へ、而も分厘の誤差だになく、又一念凝りたる射手の心靈が乗り移れる彈丸は、左右に偏せず前後に違はず、そが心靈の糸もて彈丸正しく標的へと結び付けられ、命中に次ぐに命中を以てし、殆んど虚彈なく、今は指揮者の超越せる手腕と、射手の靈妙なる伎倆と相俟て、眞に射撃の妙諦、砲火の極致を現出し、



観る者悉く恍惚として酔へるが如し。

十四時の巨弾も其砲口を離るれば直ちに人頭大となり、次で拳大となり、鶏卵大となり、副砲弾に至つては、更に指頭大となり、豆粒大となり、而も往々吾人の視線より脱して水に落ち、水に落ちたる弾丸は直ちに水柱を天に冲して、標的の直後には水柱無數に立ち騰り、大弾は數十丈、小弾は數丈、參差として恰も水の林を見るが如く、吾人をして日本海々戰の當時我が艦の前後左右に現はれたる。曰、皚々の大水林を端なく茲に思ひ出さしめぬ。又彈丸一たひ水に落ちて高く水柱を立てたる後、更に反跳して遠き彼方に復た一段低く水柱を立て、更に反跳して更に低き水柱を立て、反跳又反跳數回に及び、遠く之を望めば、幾百の跳弾は低く點々水柱を立て、鯉魚の池水に躍るにも似たり。

艦は斯の如く連續發放しつゝ、標的を正横に見て航過し、艦て一舷側の射撃を終りぬ。此間僅々數分にして射出したる彈丸は大小幾百千發、命中したる彈丸亦極めて

多し。若し之を實戰なりとせば、此數分間こそ實に勝敗の岐る、關頭にして、幾千萬の巨費を要したる軍艦最後の任務も、幾年幾十年日夜吾人が心肝を砕いて、向上し來りたる軍人精神も、戰鬪伎倆も、實に此數分の間を以て其効果の如何を判定するものなり。彼の戰鬪の勝敗が最後の五分間にありと云ふが如きは、互角の戰鬪を爲す場合にして、最初の五分間に早くも戰勢を我れに有利ならしむるの萬々優れるに如かざるなり。嗚呼最初の五分間、是れ豈獨り吾人が綱頭の戒と爲すべきのみならんや。

艦は轉回して再び元の航路に入り來り、反對舷の砲門を以て再び前つ如く射撃を行ひ、彈着亦前の如く良好にして、其末期には標的の甚だしく破壊したるをさへ認めぬ。

一艦終つて又一艦、落日西に傾ける頃、漸く全艦隊の射撃を終り、艦て旗艦より其調査したる成績を示されんとす。今や艦長副長を始めとし、砲術長砲臺將校



等は立ち騒ぐ胸裏の波を抑へつゝ、旗艦を凝視して瞬きだにせず。出づる所佛か鬼か、現はるゝ所吉か凶か。嗚呼喜びも悲しみも其決此一瞬にあり。皇天后土憐れ希くは佛を出さしめよ吉たらしめよ、我も此艦の名譽を揚げしめよ、我が此面目を保たしめよ。

信號は旗艦に掲げられたり。皇天后土我れを捨てずして、無量壽佛は出で大吉は現はれ、果然我が艦は艦隊中第一位の成績を得たり。實に吾人の期待したる月桂冠は正に我が艦に贏ち得たるなり。艦長は欣然として満面に笑みを浮べぬ。副長も砲術長も砲臺將校も皆欣然として満面に笑みを浮べぬ。艦長は先づ砲術長の手を執り、次で砲臺將校等の手を執りて固き握手を交はされぬ。殊に一艦榮辱の岐るゝ重任を負へて射撃の指揮に當れる砲術長等が喜悅の情は將さに溢れんとして見え、彼等は今猛戦の後敵艦を撃沈したる時の如く、其雙眸は勇ましく輝きぬ。此報艦内に傳はりたる時、全員齊しく肩上の重荷を卸し、歡天喜地手の舞ひ足の踏むを知

らず、或は萬歳を高唱するもあり、或は己が砲に向つて低頭感謝するもあり、或は感窮まりて涙を流すもあり。

艦長は直ちに總員を集合して曰く、「今日の射撃は吾等の固く期待したるが如く非常の良成績にして、艦隊中の第一位を占め得たり。而も從來未だ曾て有らざる良成績なり。本職は先づ一同と共に大に此成效を賀せざるべからず。次に指揮者と射手との偉功を最も賞讃せざるを得ず。同時に其手腕に依つて本艦の榮譽を博したるを他の艦員一同と共に彼等に對し感謝せざるを得ず。又砲員は勿論、同心一體となりて直接間接之を補助したる一般艦員の功績も閑却すべきに非ず。抑も此艦隊に屬する軍艦の幾十隻、射手の幾百人、孰れも吾等と大同の熱心を以て日夕練磨を積みたるもの、其伎倆に至つては固とより吾等と大なる徑庭の存する理なし。然れども吾等が此榮譽を得たるは、畢竟彼等に比較して優れる所ありしが爲にして、即ち吾等は自ら種を蒔きて此榮譽の收穫を得たるに外ならず。今日の此成效に鑑みて、何事



も非常の熱誠を以て事に従へば、必ず其目的を達するものたるを一同永く肝銘し置くこと必要なり。吾等は今日の勝利を喜ぶと同時に勝つて益々兜の緒を締むることを忘るべからず。吾等の前途は遠遠なり、益々奮勵して益々伎倆を進めざるべからず。若し夫れ今日の成効に見て慢心一たび萌さば、急轉直下忽ち拙劣の手腕となりて、他艦の脚下に跪かざるべからず。尙今後逐次に行はるべき魚雷發射其他に於ても勤勉精勵克く今日の如き榮譽を獲ることを期待せざるべからず云々と。之を聽きたる艦員一千の顔には、今日の勝利の嬉しさに堪へざる満足の漾ふと共に、艦長の誨へられたる如く、前途に横はる幾多の難關を美事に一蹴して飛び越し、逸早く彼岸に先登第一の譽を輝かさんとする固き決心の現はるゝこそ頼母しけれ。

暮靄漸く海を罩めて來れる頃、艦はそが附近に錨を投じぬ。知らず今夜滿艦の猘貅夢路何處をか辿れる。砲聲殷々として彈丸飛び水煙騰るを見るもあらん、合掌冥目して神明に加護を祈るもあらん、嬉し涙の點々雙頬を傳はり落つるもあらん。

#### 四 全速力航海

城の如く將た山の如き艦體が、千波萬波を切り行くを見て、誰か壯觀を感ぜざる者あらん。況んや今我が艦が三十節に近き全速力を以て、驀然鯨鯨を蹴つて奔馳するに至つては、其壯絶雄絶克く言辭の盡くす所に非ず。

艦首に押し分く水は左右斜めに後方へ大水堤を築き、又艦體に排除されたる水は高く艦後に山となり、夫等が波及する所長濤を起して、我が航路に近き小舟を宛ながら木の葉の如く掀舞翻弄し、時には潮待つ漁舟の閑夢を破り、そが漁夫の俄然苦を拂つて大聲蹶起するさへ見えぬ。

前程遠か雲煙縹渺の間に有るか無きかの陸影は見る々々鮮明となり、忽ちにして赭山翠峰、忽ちにして白砂青松、復た見る々々有るか無きかの陸影となりて、後方遙か雲煙の間に消え行き、或は雲片の現はれたるが如き黒團の瞬時にして一大汽船



となり、或は海鷗の浮べるが如き白點の倏忽として一大帆船となり、一岬過ぐれば早くも次の一岬迎ひ、一船去れば已に他の一船來り、送迎應接殆んど違なく、轉た吾人の視感を忙殺するなりけり。

此日海上風なきも、艦は三十節に近き速力にて疾走しつゝあるが故に、艦上に立てる吾人は同速の風を受くるに等しく、即ち疾風騰々として艦に當り、折しも中夏の暑さに涼氣頓に生じて快言はん方なく、又艦尾に眞一文字に走れる煤煙は艦行疾きが爲數渾の後に黒龍を殘し、海に印せる航跡と相須つて、我が艦は上黒下白二條の長尾を曳き行くなり。

此時吾人艦上を去つて機關室に下れば、今や我が艦が大活動の鎖鑰を握れる四箇の推進機關は一分間約三百の回轉數を以て各推進軸を回し、室内の温度百二十度に上れるのみか、注油の蒸發する一種厭ふべき臭氣の紛々鼻梁を撲つ中に、機關長は泰然として衣帽に油沫を浴びつゝ部下を指揮して、或は活動部の擦熱することな

きか、或は異様の音響を發することなきか、或は汽壓の降下することなきか、其他有らゆる細心の注意を拂ひて、幾萬馬力を出だしつゝある大機關の動作を監するそが責任の重きと、そが勞苦の大なるとは、人をして坐ろに敬意と同情とを表せしむるものあり。轉じて罐室に到れば、一二機關將校の指揮下に數十の汽罐には石炭と重油とが爛々たる紅蓮の炎を燃やし、そが前には其處に彼處に石炭の堆く積まれたるを踏み越え飛び越え、幾十名の焚火手は今や流汗淋漓として焚火口を開き、滿身に烈火の熱氣と焰光とを浴びつゝ、或は火床を掻き均らし或は石炭を投げ入れ、又搬炭手は黒暗々、炭粉濛々たる炭庫の内より荐りに石炭を搬出して、間斷なく三百ポンドに近き高壓蒸汽を供給しつゝあり。そが室内の温度は機關室よりも更に一段高くして百五十度以上に及び、慣れざる者暫し此處に佇まば眩暈卒倒するに至りぬべし。大推進機關も、幾多の砲塔を易々操縦する運轉装置も、此巨艦を左右任意に轉頭せしむる操舵装置も、發電機も、製氷機も、其他有らゆる機械装置は、悉く



其原動力を此處に發生さるゝものにして、若し瑣末の注意を怠ることあらんか、汽  
壓は降り汽罐は損じ、忽ち艦内幾百の機關に大凝滞を來すに至るべし。即ち現代の  
艦艇にありて焚火伎倆の優劣は是れ戰鬥力の消長を意味するを思へば、彼等の任務  
の亦至重至大なるを知るべきなり。巨艦の疾驅するを見て唯だ徒らに快哉を叫び、  
這般の消息を解せざる者は、未だ以て海國民たるの資格なしと言はん。

四箇の大推進翼が非常の速度を以て回轉する爲め、そが直上なる艦尾は勢ひ多  
くの震動を感せざるを得ず。吾人此時最艦尾の室内にあれば、身體は椅子と共に絶  
えず一二寸の上下動を爲し、更に此處に喫食せんとすれば、食器は卓上に舞踏を始  
め、麵麩は躍つて皿外に走り、羹汁は波を起して四邊に溢れ、時に皿々相觸れ刀匙  
相撞ち、憂然縱然奏樂を聞くにも似たり。

三萬噸の巨艦を三十節に近き速力もて驅るさへ、吾人は其進歩の大なるに驚くも、  
外國海軍にありては、已に三十節以上の巨艦が續々建造されつゝあり。更に遠から

す吾人をして一層驚倒せしむる底の進歩發達を見るべきに想到するときは、今自他  
共に壯絶雄絶を叫ぶ我が艦の駛力も、牛歩の遅々たる嘲笑を招ぐ日の早晚來るべき  
を思はざるを得んや。

## 五 艦隊の入港

吾人の艦隊は尙ほ仄暗き太平洋上鯨鯨の夢を驚かし、神戸港を指して奔りつゝあ  
るなり。

友が島の燈臺次第に光を失ひ天海將さに明け離れんとするとき、雙眼鏡を取りて  
前方を諦視すれば、紀伊阿波の山嶺は已に依稀として曉霧の間に出没し、宛ながら  
吾人を招ぐに似たり。又時に一群の海鳥艦側近く飛び來り、數回急がしく波上を翔  
け廻りて遠く陸地の彼方に去れるは、吾人の入港を迎ふにも似たる哉。

刻一刻艦の進むに隨ひ乾坤次第に白く、山容次第に鮮明を加へ、起伏綿互せる千



巒萬峰は墨繪の如く吾人の眼前に展開し來り、墨繪の如きそが千巒萬峰の復た次第に縁に變せんとするとき、東の空には旭日堂堂波上に躍りて、金波激澗萬壘の錦を浮べ、暉光煌々吾人の艦隊に映發して、清爽雄大譬へんに物なし。

已にして吾人の艦隊は鬱蒼たる阿山紀嶽を遙に左右に見分けつゝ紀伊水道を過ぎて、今や右の方遠く靄霧模糊の間に和歌の浦一帶の形勝を眺め、左の方近く由良要塞を見上げ、旗艦を先頭として紀淡海峡に入り來りぬ。翠綠滴るが如き友が島は手の届かん許りに近く航路の右に屹立し、青松參差として茂れるそが頂きには幾多の砲臺相連り、一段低きそが一角には燈臺白く聳えて、一さわ松の緑を湛へ、そが下に二三の漁舟泊れる、又そが漁舟のあたりに五六の白鷗浮べる、宛として一幅の繪畫を見るが如し。而も此繪畫の如き海峡を今幾十隻の艦艇が紅鮮かなる軍艦旗を朝暎に翻へし、蜿々長蛇の陣を以て航過する光景こそ、更に々々大活畫とも見ゆめれ。

渺漫たる海波萬里の境より此狹隘なる海峡に入り來れる吾人は、轉た宇宙の小さなるを感ずると同時に、鬱蒼たる満目の翠色に暫し恍惚たるを覺ゆるとき、早くも吾人の艦隊は海峡を通過して和泉灘に入りぬ。

神戸港は已に吾人の眼前に横はるも、靄霧煤煙相交はりて唯だ紫黒の一角に掩はれ、獨り六甲、摩耶、鉢伏の諸山巍然として淡彩を雲表に粧ひ、左手淡路の海岸は老松蟠踞して翠雲影を潮水に浸し、低林遙村朝烟の間に隠れつ見えつ、右手は紀の突角急に右折して泉の西端に接し、斜めに東北に走りて所謂茅渚の海のあたり糝糊として雲煙相連り、此處に圍める天惠の良灣は、漣波微かに動て艦は壘の上を行くが如し。

吾人の艦隊は碇泊陣形を作りつゝ次第に錨地に近づけば、殷賑なる神戸港海陸の全景は次第に吾人の眼眸に入り來りぬ。林立せる船檣煙突、更に天を摩せる陸上の大煙突、山腹より斜めに海に連る幾萬の家屋、そが間に散在せる大厦高樓、丘上翠



緑の間に點綴せる繪の如き洋館、天を焦す煤煙、頻繁なる出船入船、東馳西走する列車、孰れか天下の大貿易港たるを語らざるものあらん。嗚呼此般賑と繁榮とは抑も何に依つて來れるか。縱令海陸の地形良好なりとはいへ、海上貿易の發達に非ずして何ぞ、海上權力の伸長に非ずして何ぞ、海上武力の發展に非ずして何ぞ。今吾人の大艦隊が此大貿易港に錨を投せんとするに當り、吾人いかで感慨なきを得んや。又吾人が壯時屢々弱小なる軍艦に搭じて此港に來れる頃、大船巨舶は殆んど總て外國旗を翻へすを見しに、堂々たる大艦隊にて入港する今、殆んど總てが日章旗を掲ぐるを見て、吾人は更に今昔の感深からざるを得ず。

艦隊は今驅逐隊を二列とし、大艦を二列とし、四列の横陣なせる碇泊陣形を以て錨地に向ひつゝあるとき、港内に碇泊せる某外國軍艦の橋頭高く我が旭日旗の翻るを見れば、轟然白煙迸りて、我が司令長官の大將旗に對し十七發の禮砲放たれ、次で我が旗艦は彼が軍艦旗を掲げて同數の答砲を發しぬ。更に國籍を異にせる他の

外國軍艦との間にも同じく禮砲の交換あり、殷々たる砲聲は旗艦に起る奏樂と相和して、波間に轟き山に響きぬ。

艦隊は尙ほ若干の速力を以て豫定錨地に進入し、旗艦の信號下ると同時に數十隻の艦艇一齊に右舷錨を投すれば、水煙さつと各艦の艦首に立ち騰り、錨鎖の走出する音は輓々として遠雷の鳴るが如く、艦の前進力を阻止せしむる爲め俄然機關を反轉して逆まに攪亂したる海水は一面の水泡となりて、艦の四周を白皚々の海と化し、艦容一段鮮かに見ゆるとき、艦隊は全く靜止の狀に入り、之と同時に舷梯は卸ろされ、番兵塔は裝備され、繫艇桿は出だされ、水雷艇汽艇は水上に浮べられ、斯くて艦は皆港の艦となり、人は皆港の人となりぬ。見渡せば艦々列々正しく並びて一尋一尺の差違なく、恰も觀艦式場を見るが如し。

吾人の海洋にある、無線電信の外、外界との交通なく、心情常に悠々たるも、一たび錨を投するや、艦外との關係は卒然として蜂起蟬集し、身心忙々、天人の下界に



降れる心地も斯くやありなにかと思はしむ。先づ當直艦の軍醫官は陸上に於ける衛生視察に差遣され、各艦は公私の郵便電報を發送して、着信を受領し來る爲め公用使を差遣し、外國軍艦よりは時を移さず訪問使を我が旗艦に送りて、無事の入港を賀し、彼が長官の敬意を傳へ、我れよりも答禮使を送りて好意を謝し、次で彼の長官は我が旗艦に來訪して交歡の辭あり。そが退艦に際しては其官等に對する正規の禮砲放たれ、續て我が長官彼を答訪すれば亦其退艦に彼れの禮砲あり。尙ほ縣知事其他の續々訪問するあり。やがて軍醫官の陸上より歸りて、衛生状態の良好を旗艦に報告すれば、信號に依りて忽ち全艦隊に傳達され、各艦よりは生糧品等を購入すべく係員を上陸せしめ、又一方には新聞記者を始めとし、商人面會人等陸續殺到し、其間に山爲す郵便物は持ち歸られて、艦内夫々々配達さるれば、或は新聞紙を開いて世上の出來事に驚異の眼を睜るもあり、或は絶えて久しき家信に一喜一憂を催ふすもあり、或は進級に欣然たるもあり、或は轉職に惘然たるもあり。

眞に入港後の光景は活動寫眞を見るにも似たり。此等の騒ぎの一幕が終りたる頃、各艦長は旗艦に召集され、種々の重要な件と共に在泊中の事項を長官より示達されて歸りぬ。曰く本日午後聯合陸戰隊を編成して湊川神社參拜、曰く當港在泊日數七日間、曰く在泊中は艦内手入炭水補充の外力めて乗員の休養、曰く各自三日間休暇許可、曰く十二時間以内に往復爲し得る近縣出身者には滞在三日間の歸省許可、曰く在泊中艦務に支障なき限り、一般人民に艦内觀覽許可、曰く學校團隊等より海軍講話希望の交渉あらば、力めて將校を派遣して其希望に應せしむべき事等是れなり。人の性は單調を厭ふものなり。松江の鱸、興津の鯛も、日々之を食膳に上げせば誰か復た顧みる者あらん。海洋は吾人をして豪宕、雄大、清爽の感を起さしめ、吾人をして曠快を覚えしむと雖も、久しきに彌れば亦時に陸の人となり、陸上の光景に接せんことを欲する、素とより異むに足らず。竹屋、三谷の渡しを過ぎるにさへ、



彼方の岸に上るとき一種言ふべからざる快を覺ゆるなるに、況んや日々夜々海洋にありて勞苦を積める身の、今眼前に此般賑にして風光絶佳なる陸上の景物に接するに於てをや。又況んや吾人の艦隊は佐世保出港以來幾多の港灣に入りしも、多くは訓練の爲めにして、數句の間充分の休養を得ざりしに於てをや。茲に艦隊幾萬の乗員は休暇を許され、歸省を許され、皆喜色滿々面に溢れて見えぬ。嗚呼僅かに三日間は是れ無爲徒食の輩には二三時間にも値せざるべきも、晨より夜に至るまで、日又日軍務に勤む吾人に取りては、幾句の光陰にも該るべし。或は須摩舞子の勝を探るべく、或は京坂地方の名區を尋ぬべく、或は慈親を故山に省るべく、各がじし、如何にして三日間を最有効に費すべきかと、其處彼處に畫策頻りなり。

吾人は數時の前まで太平洋上を馳驅して、今將さに陸上の人とならんとし、復た數日の後には卒然去つて蒼溟に入るを思ひ、更に朝に我が領土を離れて夕には外國の港灣に宿り、今日平和の宴に酔ひて明日は修羅の巷に闘ひ、忽ちにして南緯、忽ちにして北緯、須臾にして西半球、須臾にして東半球、元旦に氷を噛み、三伏に爐を擁し、一歲終に冬に逢はず、一年幾度か夏を見ることあるを思ひ、更に又飛電一たび到らば、東せんとして西に向ひ、南せんとして北に航し、變幻極りなき吾人の生活に思ひ及ぼすとき、此神戸港の風光も猶レンズの前を疾過するフィルムを見るが如き感を覺ゆるなり。

## 六 泊れる夜の軍艦

泊れる夜の軍艦は不夜城の如く、歡樂郷の如く、又眠れる獅子の如し。  
幾千百の電燈は艦内隈なく輝き渡りて、明々煌々白晝を欺き、艦外より之を眺むれば、無數の舷窓を漏るゝ電光燦然として恰も一大電燈飾を見るが如く美觀極まりなし。又時に探照燈を點する艦ありて、幾多の大放芒は上下に動き、左右に奔り、屢々我が艦上を照射して、一段壯美の觀を添ひ、宛然たる不夜城を現出するなり。



一日の業務終りを告げて乗員盡く氣も心も暢び々々として、士官室に、士官次室に、將た准士官室に、夫れ々々相集りて杯を取り菓を摘まみ、或は萬丈の氣焔を吐きて、談論に花を咲かすもあり、或は無邪氣なる諧謔を弄して、戯語に腹を抱ゆるもあり、嬉々として語り、嬌々として笑ひ、和氣霽然、眞に一家族の團樂を見るが如し。此時去て下士卒の甲板に到れば、今や酒保の店頭は顧客群を爲して繁榮を極め、或は數人の戰友相擁して一壘の麥酒を圍めるもの、或は各菓子袋を手にして集れるもの、此處に一團を爲し彼處に一團を爲して、亦家庭に於ける兒女の相樂むにも似たり。更に去つて艦上に出づれば、煙草盆を取り巻ける幾群の下士卒は、或は國自慢に、或は失敗談に、到る處談笑湧くが如く日夕の勞苦も忘れて見ゆるなり。已にして定時に至れば一時艦内靜肅に歸し、副長は甲板係將校以下、關係職員を従ひ、艦内を遍く巡視して其整頓せる旨を艦長に報告すれば、茲に始めて全く大休息の状態に入り、勤務に従事せざる准士官以上は、寢衣として和服の着用を許

され、又靴に代へて草履を用ふることを許され、身心更に悠然として宛ながら己が家庭に入りたる心地し、各室は一段般賑の狀を呈するなり。斯の如きは普通人に於て毫も娛樂とするに足らずと雖も、嚴肅なる艦内にありては之を以て歡樂郷と稱するを得ん。若し夫れ月色皎々たる夏の夜に單衣身に軽く艦上に出で、隈なく渡れる清光の下に心行く許り涼を取りつゝ、會心の友と談笑して、夜の深け行くをも忘るゝに至つては、亦歡樂郷裡の一歡樂と言はん哉

航海中にありては保安の職責重き者あり、又夜間當直勤務に服する爲め早く寢に就く者多くして、碇泊中の如く歡樂郷を現出するに至らず。

やがて時の進むに隨ひ、さしも般賑なりし各室も一人去り二人去りて次第に寂寥となり、いつしか盃盤狼藉として歡樂郷の名残を止むるを見るのみ。須臾にして消燈の時刻となれば、不夜城なせる電燈は倏忽として消え、唯だ僅少の常夜燈が薄暗き光を放つを見、乗員は晝間の疲れに早くも華胥に遊び、滿艦寂として、獨り艦



橋に立てる當直員の靴音高く聞ふると、毎半時に時鐘鳴りて番兵の警戒異状なきを報ずる聲を耳にするとのみ、此時陸上より歸り來りつゝ我が艦を眺むれば、附近の丘陵影を水に落して一段黒き海面に、我が艦の更に黒く黙々として横はるは、一大猛獅の眠れるにも似たる哉。

泊れる夜の軍艦は斯の如く不夜城を現出し、歡樂郷を現出し、次で獅子の如く眠ると雖も、艦は是れ戰鬪の爲めの艦にして、人は是れ戰鬪の爲めの人なり。斯の如きを以て常規と爲すを允さず。即ち旗艦の橋頭に信燈一たび閃めき、喇叭の號音高く夜の大氣を破つて響けば、不夜城も歡樂郷も忽然として修羅場の光景と化し、眠れる獅子は俄然として跳ね起き、眼を睜らし牙を剥き出だし、天地に咆哮するにぞある。

### 七 端舟競漕

時は維れ紀元の佳節にして、地は是れ横須賀軍港。今日此地にある各艦團隊の選手を以て、端舟競漕は行はれんとするなり。

港内旋泊の大小艦艇幾十隻盡く滿艦飾を掲げて、海上宛ながら百花撩亂の觀を現はし、前夜纜かに降り歇みたる雪は、尙ほ四周の山を埋めて白皚々たる處、松樹の翠綠其間に點綴し、艦艇の彩旗と相映じて一段の美觀を湛へ、天空亦雲なく、耀光熙々として瑞氣靄々天地に漲る。

日は朗かなるも、遠く品海を渡り來りて颯々港内に吹き入る雪後の風は寒威凜烈膚を徹し、正に是れ世上幾多の柔弱男子が戸内深く潜みて爐を擁するのとき、我が可憐の兵は凍波を蹴つて、そが腕を練り、そが魂を鍛へんとするにぞある。

委員たる將校は之に屬する下士卒を従ひ、朝來荐りに汽艇を飛ばして競漕の準備に急がしかりしが、九時の頃には已に一切の整備を告げて、競漕は將さに開始せられんとし、幾十を算する競漕艇と應接艇とは、早や發艇點附近の海面を蔽へて群が



り、先づ第一回の競漕艇は發艇點に集合を令せられぬ。橈手十二名の乗れる八隻の  
カッターは、紅白青黄様々の標旗を艇首に樹て、艇長も橈手も標旗と同色の運動帽  
を戴きて、皆一様に雪白の作業服を纏ひ、而も上衣を脱して僅かに袖短き肌着一枚  
となり、鐵腕勁々袖外に露出して寒風に曝さるゝも毫末意に介せざるが如く、凜乎  
たる其雄姿こそ見るからに痛快の極みなれ。

艇て競漕艇は發艇點に正しく一直線に並列したりと見れば、轟然一發の砲聲耳を  
劈きて發艇を令し、艇は應援隊と觀覽者の喚呼聲裡に猛然波を蹴つて漕ぎ出だせり。  
滿身の力を鐵腕に籠めて、折れよと許り水を切り行く十二の橈は、其一上一下、一  
進一退整然として一橈亂れず、橈手の手を伸ばすも、手を引くも、體を反らすも  
體を屈むるも、等しく同一の瞬間にして、彼等が日頃訓練の効果は茲に漕艇の妙訣  
を現はし、艇の進むこと矢の如く、濤々艇首に漲る白浪の飛沫が、飛んで屢々彼等  
の頭上に降りかゝれる中を、八隻の端舟互に我れ劣らじと漕ぎ行けば、人の山、人

の堤を築ける兩側の艦上よりは、己が艦の選手に聲援を與へんとして、標旗と同色  
の大旗小旗幾十旗を高く低く打ち振りつゝ紅と喚き、白と叫び、青黄取々に呼び爲  
し、囂々四邊の山に響きて、海波も爲めに躍るかと思はる。而も艇は此間を少しも  
焦燥らず、益々力を奮ひ益々勇を鼓して、次第に遠く沖の方へと漕ぎ、審判員の汽  
艇一二隻はそが後へに尾して、各艇を監視しつゝ行くなり。

各艇殆んど同時に各自の轉廻浮標に達したるが如く見えしが、夫を廻つて艇首再  
たび此方に向ひたるときは、早や若干前後の差を生じ、紅艇白艇先頭にあり、青艇  
黄艇少しく後れて之に續き、其他の艇は更に後れて續き、彼等の運命は略ぼ定まり  
ぬ。されど先頭にあるもの心を許すべきに非ず、後尾にあるもの氣を挫くべきに非  
ず。果せる哉、須臾にして青艇は見る々々進み出で、忽ち白艇を凌ぎ、今や青紅二  
艇互に先を争ひしが、往返二漕の航程を漸く決勝線に近づかんとしたるとき、青艇  
は奮然一段の怪力を出し、一尺又一尺、終に割るゝが如き喚呼の内に半艇身の差



を以て、紅艇よりも先きに決勝線に入り來り、號砲の響くと共に十二槳を一齊に立て、艇長も槳手も歡喜に禁へざるが如く、そが選出艦の應援隊は躍り上りて喜びぬ。斯くて競技は次第に進み、選手は益々勇み、觀者は益々熱し、終りに毎回の先着艇のみを以て愈々優勝競技は行はれんとす。前回優勝旗を得たる艦は、之を己が手より離さじとし、累年優勝旗を獲ざりし艦は、今日こそ會稽の耻を雪がんとし、他の所轄の艦は美事此鎮守府の優勝旗を取り己が軍港に持ち歸りて僚艦に誇らんとし、此鎮守府に屬する艦團隊は、決して他の所轄に渡さじとし、幾十組の選手の心も、將たそを出だせる艦團隊の心も、皆此優勝旗の上に集中されぬ。されば今優勝競争の始まらんとするに至り、之に参加すべき選手の顔には一段緊張の氣分を漾はして勇ましが中にも稍や殺氣を帯び來りぬ。

優勝競争に加はるべき八隻の端舟發艇點に並列したるとき、陸上海上相俟つて喚呼の聲は天に轟き、山に轟き、海に轟き、狂熱の度は次第に加はり來りぬ。折

しもあれ、砲聲一發喚呼の聲を破りて發艇を令すれば、八隻の端舟は宛ながら悍馬の手綱を斷ちたる如く、轟然水を破つて漕ぎ出で、喚呼の聲は更に高く揚りて、應援隊は更に狂熱の度を高めぬ。

今此競争に與かる者は、皆是れ選手中の選手にして、鐵腕中の鐵腕なり。そが操槳の正しく、そが力の加はれる、眞に我が海軍の摸範とや言はん。操槳已に群を抜く、艇行亦一段疾く、見る々々遠く彼方に漕ぎ去り、轉じて忽ち此方に向ふを見れば、八隻の端舟流石にも著るしき優劣なく、殆んど相並んで來つるなり。

日頃の苦心を晴らすも此一舉にあり。我が艦の榮譽を輝かすも此一戦にあり。此腕折れなば折れよ。此身砕けなば砕けよ。前程僅に半湮、僅に數分時。此距離此時間の内に他艇を越して先頭に出づるに非ざれば、千悔萬恨遂に及ばじ。今や我が友は聲を嗄して、我れに聲援を與へつゝあらん。我が艦長は雙眼鏡を把りて、遙に我等を見給ふらん。弓矢八幡憐れ願くは我れに一段の力を與へて、我れに此勝利を得



さしめ給へと、思ふ心も祈る心も、八隻の選手皆異なるなく、有らん限りの力を出だし、有らん限りの勇を奮ひ、喚呼天地を震撼する中を、互に鎗を削りて殺到するそが光景は、何等の壯觀ぞや、何等の雄觀ぞや。嗚呼彼等が此元氣こそ、實に此海帝國の寶とや言はん。

喚呼の聲は一段高く起りて、應援隊の熱狂は其最高度に達しぬ。されど八隻の端舟に鐵腕を奮ひつゝある選手は、此等を見向きもせず、滿面朱を灑ぎて、渾身の勇氣を槳端に迸らし、恰も無人の境を行くが如く、今し決勝線を距る三百米可りに達したるとき、白艇は奮然として一段の勇氣を出だし、他の諸艇よりも一艇身を抜きたりと見る間に、黃艇亦劣らじと勇を鼓し、白艇黃艇殆んど相並ばんとせば、他の諸艇も亦奮進して之に及ばんとし、喚呼の聲は更に々々高く雲井に轟き波間に響き、遂に白艇は四分の一艇身の差を以て第一着に決勝線に入り、月桂冠は横須賀鎮守府某艦に屬する此選手の頭上に置かれぬ。

終つて總ての選手は、委員の指揮の下に海兵團練兵場に集合し、應援隊と觀覽人とはそが後方に堵を築きぬ。やがて横須賀鎮守府司令長官は幕僚と各艦團隊の長とを従ひて此處に臨場し、嘖嘖たる奏樂の裡に夫れ々々賞品の授與を終り、最後に優勝選手は艇長の指導に依りて長官の前に進み出で、長官の手より親しく優勝旗を艇長に授與せられ、奏樂は再び起れり。選手は艇長の翻へす優勝旗と共に、恰も凱旋軍の如く勇氣と喜色とを滿面に湛へて舊位置に復せば、喝采暫しは鳴りも止まざりけり。次で委員長たる某艦長は長官に一揖の後、競技に就て講評を爲し、茲に全く此日の競技を終りぬ。

彼等は斯の如き競漕を或は海も沸くが如き赫々たる赤日の下に、或は波も凍るが如き紛々たる白雪の中に、一年數回行ふのみならず、時には殊更波浪の高き海面に於てし、又十哩二十哩の遠距離に試み、常にそが鐵腕と勇氣とを練りつゝあるなり。更に又外國軍艦との間に競漕を行ふ場合には、實に彼等は我が海軍榮辱の岐る



る重任を負へて之に當るなり。嗚呼、端舟競漕、是れ一見遊戯の如くにして、而も堂々たる練武なり。之に依りて其伎倆を向上するの外、其肉體と精神とを鍛練するものと幾何ぞや。

語を寄す。將來此海國日本を雙肩に擔つて立つべき天下幾百萬の學生、何爲ぞ春風駘蕩櫻雲鬢、時をのみ是れ選んで競漕を行はんとするか、何ぞ剪々たる風刀骨を刺すの時に於て亦之を行ひ、以て其肉體を鍛ひ其精神を練らんとはせざる。

本文稿了の後數日を経て、時事新報紙上に一高學生が一月二日の風雪を侵して遠漕を刀水に試みたる記事を読み、吾人は無限の快感を禁ずるを得ざりき。乃ち茲に向陵の健兒に對して、吾人が滿腔の讚辭を捧ぐると同時に、益々元氣を振ひて海國日本の先覺者たらんことを切望し、尙ほ其他の學生が發奮一番之に倣はんことを慫慂せざるを得ず。(大正六年一月記)

## 八 滿期兵の退艦

男子強健にして兵役に服し、臣民の義務を盡すを得る訖に幸なり。況んや海國日本に生れて海軍兵役に服するをや。此幸福を擔つて某の年海軍に入籍せる兵も、幾回か春を迎ひ秋を送りて星霜四年、將さに現役の期滿ちんとし、今日しも某軍港に於て退艦せしめられ、所屬の海兵團に送られんとするなり。

彼等はやがて己が郷里に歸り行く嬉しさに、氣も心も浮き立ち、朝來いそ／＼として通常服に着替へ、己が毛布を釣床より取り出だして衣囊に縛着し、金字燦然たる『大日本帝國軍艦何』の帽章も、いつしか『何海兵團』の帽章に替はり、早や退艦の準備を了りて、そが戰友と別辭を述ぶるに忙はし。されど茲に至りて彼等が退艦の喜悅は、次第に別離の憂愁に蔽はれ來りぬ。

軍艦は彼等が日夜練武の兵營なり、一死報國の戰場なり、技藝學術を習得する學



校なり、起臥、飲食、慰安、親交を爲す家庭なり。即ち艦長は其指揮官たると共に其學校長にして又其家長なり。彼等の分隊長以下下士は彼等に取りて中間指揮官たると共に、教員にして又一家の尊屬なり。今彼等は此住み馴れたる兵營を去り、戰場を去り、學校を去り、家庭を去りて、それが隊長に別れ、それが恩師に別れ、それが家長以下の尊屬に別るゝなり。此時此際彼等は無量の感慨なからんとするも得べからず。此の雄大なる艦容も、彼の鮮かなる軍艦旗も、見るは今日が限りなり。嚴父の如き艦長の英姿も、慈母の如き副長の婉容も、兄の如く姉の如き分隊長以下の温顔も、見るは亦今日が限りなり。幾句怒濤の間に勇戦したる青島の攻撃も、太平洋上數日數夜に亘れる暴風との奮闘も、南洋の春も、北海の秋も、皆過ぎし昔の夢なる哉。乗艦以來軍事の訓練は言ふも更なり、種々の智識を授けられ、精神人格を向上せられ、思慮分別を養はれ、體軀筋肉を鍛へられ、假令軍隊を出づるも一個の男子たり得べきまでに、此歲月教導し給へる山海の恩は、此身の存せん限り、此命の有

らん限り、如何でか忘るゝことのあるべき。願くは艦も艦長以下も共に愈々健在なれ、愈々武運芽出度かれ」と、言ふも言はぬも、皆同じ心に彼等は祈るなり。彼等は今退艦せんとするに當り、艦と別れを惜み、艦長以下と別れを惜むのみならず、又彼等が戦友との間に萬斛の涙を澆ぐなり。「深怨結んで解くに由なき吳越の士も、一たび舟を同ふせば忘れ難き交友となるとかや。況んや我等は共に此浮城の上に一歳二歳又は三歳の星霜を過ごし、風雨寒暑一の喇叭の音に起臥し、航海碇泊同じ艱苦の務を執り來りし者、又況んや我等は共に死を誓ひて砲煙彈雨の間に馳驅し、俱に生を得て萬歳聲裡に凱旋したる者、其膠漆の交りは眞に骨肉も雷ならざるに、今日茲に別れては、雲煙遠く郷土を隔て、何れの日か復た相見ることの叶ふべき。思へば今日の別れこそ、今生に於ける生別なれ。郷里に歸りて父母弟妹と長閑に暮らす樂みは深けれど、死生を共にし艱苦を共にしたる此戦友との生別は悲みの極み哉。父母弟妹とも同棲し、此戦友とも朝な夕なに顔見ることを得たらんには、



人生之に過ぎたる幸なきも、斯る望みの固とより遂げ得べきにあらざれば、攻めて  
長へに文の音信を忘るな、忘れじ」と、涙ながらに語り合ふ彼等が衷情は、實に  
人の心の錦なり。錦の心より出づる錦の涙は、其處の一團に濺がれ、彼處の一群に  
洩れ、情緒纏綿として盡くるの期なし。

又彼等は艦に對し、艦長以下に對し、戦友に對して、別れを惜むのみならず、己  
が日夕保護愛撫を加へたる兵器にも、機關にも、艦具にも、別れを惜まんとするな  
り。「嗚呼此兵器、此機關、此艦具も、最早瞬時の後には目にも見るを得ず、手にも  
觸るゝを得ず、明日よりは誰に依りて保護せられ、誰に依りて愛撫せらるゝかや。  
憐れ此榮えある艦と共に、永へに汝が任務を盡くせよ」とぞ思ふらむ。

斯くて彼等は己が所屬の分隊長并びに下士より種々訓示を受けたる後、更に艦長  
の面前に集合せしめられぬ。艦長は威嚴ある内にも愛情籠もれる語氣を以て、徐ろ  
に告げて曰く、「汝等は一應海兵團に復歸したる後、正規の式の下に現役を免せられ

其際歸郷後の注意等を委曲説示さるべきも、本職は永く我が部下に在りたる汝等と  
茲に別るゝに臨み、豈一言なくして止まん。顧ふに汝等が本艦にあること久しきは  
三年にも及び、短きも一年を過ぎ、此間日夕煩多なる業務の外、實戦にも参加し、幾  
度か天候と闘ひ、幾萬哩の航海に、幾多の演習に、汝等が勤勞の大なりしこと擧げ  
て數ふべからず。それと同時に汝等の國家に盡したる勳績は極めて偉大にして、汝  
等は最も完全に兵役の義務を盡したるものなり。今此榮譽を擔ひて郷里に歸り行く  
汝等は眞に喜びに堪へざるべく、又汝等を迎ふる郷里の兩親家族を始め郷黨の喜び  
は察するに餘りあり。本職も亦此光榮ある汝等の満期歸郷を茲に送るは何物の快か  
之に過ぎん。されど幾年月此艦内に共に軍務に従ひ、戦闘に、航海に、同じ境遇を  
經來りたる汝等を見るも、今を限りと思へば、別離の情に堪へざるの感あり。想ふ  
に汝等も今を限りに、此艦も吾等をも、再び見るを得ざるかと思ひて、同じ心に別  
れを惜むなるべし。汝等よ、平素本職始め副隊長分隊長等より幾回か教訓注入され



たる軍人精神は、正に汝等の頭髮より趾尖に至るまで横溢する所なるべし。汝等は満期歸郷の後も此軍人精神に決して一點の陰翳だも帶ばしむこと莫れ。軍人精神を失はざるは是れ勅諭の聖意に違はざる所以にして、五箇條の聖訓は軍人精神の存在に依りて始めて實行し得べきこと、勅諭の内に誨え給ふ所なり。尙ほ此軍人精神は軍人としてのみ、將た軍隊に於てのみ必要なるものに非ず、人の此世に處する、何事も之を以て一貫して毫末の誤りなきこと、是れ亦汝等の夙に知れる所なるべし。汝等は郷里に歸りて父祖の業務に携はると、或は郷里を離れて他の業務に従ふとを問はず、終始軍隊にありたる時と同一の覺悟を以て克く艱苦に堪へ、禮讓を守り、質素を旨とし、誠心誠意に拮据勉勵したらんには、如何なる業務も必ず好果を來すものたることを忘るべからず。又一たび現役を去るも、國家非常の場合には、何時召集さるゝやも知るべからざるが故に、軍隊を去り軍服を脱するも、自己は依然軍人なりとの觀念を少時も忘るゝなく、常に健康に注意し、益々品性を修養すること

を怠るべからず。斯くて世人より天晴軍隊教育を受けたるものなりとの賞讃を博して、克く其儀表たらんことを深く心に期せざるべからず。更に又一言すべきことあり。汝等が始めて入團したる當時は勿論、此現役四年の間、日々夜々軍紀の嚴肅なるに苦痛を感じたること多大なりならん。されど汝等は今現役を離れんとするに當り、靜思熟考しなば、嚴肅なる軍紀が如何に軍隊に必要なかを了解したるなるべし。實に軍隊は千萬人の心を以て統帥一人の心とし、統帥一人の意志を以て千萬人を活動せしむるに非ざれば、軍隊としての目的を達すること能はざるなり。各々郷土を異にし、家庭を異にし、生育を異にし、教育を異にし、性質を異にし、習慣を異にする天下の壯丁を集めて、一心一體と爲し、之をして水火も辭せず、困苦も意とせず、絶對に上長に服従せしめ、確實に職責を盡さしめ、協同一致敵に當り敵に勝たんとするには、嚴肅なる軍紀を以て固く之を結合せざるべからず。而も久しく軍紀の内に生活して終に習慣となれば、決して苦痛を感じるものに非ず。寧ろ



之が爲め剛健なる鐵石心を養成して第二の天性を作り、畢生を利すること極めて大なるものなり。今後汝等は在郷軍人として、早晚兵役の義務に服すべき青年指導の位置に立つ者なれば、彼等青年をして軍隊に於ける軍紀の意義を誤らしめざる様、豫め教訓すること最も必要にして、是れ亦汝等が國家に盡すの義務なりと自覺せざるべからず。終りに臨み、本職は重ねて汝等の健康と幸福とを祈る」と。語り終りて艦長は感慨に堪へざるものゝ如く、そが兩眼には露の宿れるかとさへ疑はれぬ。「嗚呼艦長の聲を耳にするも之が最後哉、此真情溢るゝ艦長の訓示こそ、我等が今後の羅織儀なれ。我等は此教訓を朝夕拳々服膺して、父とも仰ぐ艦長の賢慮に報いであるべきか」と、彼等が固くそが心に誓ふとき、感涙の二滴三滴はらくと落つるさへ見え、並み居る將校も此光景を眺めては亦感慨に堪へざるが如し。是に於て彼等は艦長に心からなる敬禮を爲したる後、そが面前を去り、應て端舟に乗るべく命せられぬ。

今彼等は戦友に送られ、悲喜兩感に包まれ、衣囊を擔ひ舷梯を下りて、端舟へと乗り移るなり。此舷梯の始めて彼等を迎へてより、幾百回か彼等を迎ひ彼等を送りて、終に茲に彼等を永劫に送らんとする此刹那に於て、彼等は過去を懐ひ現在を思ひ、降り行く足は或は重く或は軽く、一段重く降りては仰いで艦上を眺め、一段軽く降りては思を故山に馳せ、一段又一段、懐かしき艦と別れ行き、一步又一步焦るゝ故山に向ふなり。

斯くて彼等が皆端舟に乗り移れるとき、矢の如き歸心は艇首を直ちに陸岸に向けんと欲すれども、結ばれる離愁は忽然端舟を艦より離すに忍びず。兩感交も闘つて遂に徐々と艦を一周すれば、金色爛として艦首に輝く菊花の御紋章も、艦尾に光る平假名の艦名も、見るからに今を名残と偲ばれて、復た覺えず暗涙を催ふもありぬべし。時に艦員は彼等に最後の別れを告げんとして舷上に並列すれば、彼等は手を挙げ帽を振り、暮りに別離を惜みつゝ、遂に艇首を陸岸に向けぬ。陸岸に向へ



る彼等は前方に列車の黒煙を眺めて更に歸心を馳せ、又首を回らして後方に艦を仰ぐなり。

### 九石炭搭載

労働は神聖なり。況んや直接君國に捧ぐる労働に於てをや。吾人が石炭搭載に労働するが如きは眞に神聖中の神聖なる労働と言ふべき哉。

朝來早くも甲板の昇降口には總て被覆を掛け、其他炭粉侵入の恐れある箇處は盡く密閉し、舷側には載炭用の階段を設け、炭庫の積入口は開放し、下士卒のみか、副長以下將校、機關將校、特務士官、准士官皆作業服を纏ひて、神聖なる労働者と化し、副長は緊要已むを得ざる者の外總員を集合して區處し、各分隊の載炭量と載炭口とを定め、斯くて一切の準備を終り炭庫の到るを待つなり。

頃くにして陸岸の炭庫より幾十隻の炭船續々來るを見るや、艦窓は固く鎖され、や、

がて炭船到りて艦側に繋げば、茲に石炭搭載てふ神聖なる労働は開始せらるゝなり。炭船に在りて篋に石炭を容る者、之を舷側の階段下に運ぶ者、最下の階段に在りて之を受取り、上の階段に送る者、更に順次に上に送る者、艦内に受取る者、炭庫の口に運ぶ者、炭庫に投げ入る者、載炭量を檢する者、炭庫内に堆積する石炭を均らす者、空虚の篋を炭庫に返へす者、各一定の位置に在り一定の順序を以て篋は手より手に移され、次より次に運ばれ、艇々として一道の篋が艦内に流れ込む様は蟻群の通ふにも似たり。此時副長は全般を監督し、分隊に屬する將校機關將校は各部下の作業を監し、其他の將校准士官等は各方面に分れて監督し、元氣なる少壯將校の如きは下士卒の勞苦を拱手傍觀するに忍びずとて、往々自ら篋を手にするさへあり。又一艦の主宰者たる艦長すら、訪問者の來る顧慮なく、且其身の艦を離るゝ用務の起るべき顧慮なき場合には、同じく作業服を着けて部下と勞苦を分かち、部下を鼓舞することなきに非ず。



霏々粉々として四邊に飛散する炭粉は、吾人の手と云はず、顔と云はず、衣帽と云はず、頭髮と云はず、有らゆる部分に附着し、堆積し、滿身總て黧黒、唯だ唇臉の赤く、齒牙の白く、眼眸の輝けるのみ見えて、宛ながら黒奴の如く、尙ほ眼に入り、口に入り、鼻に入りたる炭粉は、出で、黒涙となり、黒唾となり、黒鼻汁となり、又眞個に勞働の中心たる兵卒に至つては、重量數貫の箆を受けつ渡しつ幾百回に及び、肩も挫け腕も折れなん許りに見え、憐れ櫻花と芳を競ふ日出帝國の干城も、一見苦力と異なる所なし。されど此間に在りて、一人として苦痛を訴ふるなく、不満を抱くなく、皆之を以て貴重なる軍務の一課と思惟し、戰鬪に價値を等ふるものと觀念し、それが精神の忠實なる、それが元氣の旺盛なる、一片の炭塊も海に落とさじ、一瞬の時間も空しく過さざると、益々神聖的勞働の眞面目を發揮しつゝ、努力するにぞある。茲に至りて吾人の外觀は苦力の如く汚れて見ゆるも、心の内は金玉の如く輝けるなり。

斯の如き載炭の方法は横濱、神戸、長崎等に於て、日々商船に目撃する所にして固とより軍艦獨特のものに非ずと雖も、商船は乗員の少きを爲め、所謂苦力なる人夫を以てし、且載炭口は通例舷側の外面にあるが故に、作業容易なるのみならず、炭粉飛散の程度も従つて輕微なり。然るに軍艦の舷側は唯一の防禦たる甲飯に成り、其主要部に於ては一個の舷窓を設くるさへ允さざる所にして、勢ひ艦上より炭庫に投入するの外なく、爲めに載炭作業は商船に比較して甚しく困難たるを免れず。殊に近來の大艦が四千噸にも及ぶ多量の載炭を爲すに至つては、往々一日に終了せずして、此不愉快なる作業が二日三日に亙ることさへあり。流石に神聖なる勞働者も茲に至りては著るしく疲勞を感じざるを得ず。又戰時に在りては作戰地域の根據地若くは海上漂泊中に於て給炭船より直接載炭するを例とし、其方法は多少異なる所あるも、此場合には更に一分一秒の時間をも短縮せしむる必要より、作業は一段の困難を伴ふものなり。憶ひ起す、吾人は過去の戰役に於て旅順港外十數哩の沖合に



漂泊し、老鐵黃金諸砲臺の瞰視の下に敵艦の動靜を見張りつゝ、給炭船より載炭したること前後幾十回なりしかを。而も時には敵艦の出動するに會ひ、急遽載炭を中止して給炭船を根據地に回避せしめ、艦上に散亂堆積せる炭塊炭粉を處理して、甲板を洗滌掃除し、労働者の汚服を戰士の武裝に更むる間もなく、戦闘諸般の準備を整ひ、直ちに交戦に移れることさへ少からざりしなり。

石炭は重油と共に艦艇活動の唯一資料なり。殊に戦時にありては常に之を充實し置き、何時にても最大範圍の行動を爲し得る爲め、出來得る限りの短時間に、出來得る限りの多量を搭載すること極めて必要なり。即ち載炭速度の多寡は作戦上に最も重大の影響を及ぼすものなるが故に、孰れの海軍にありても、銳意此速度の増進に力め、或は種々の装置を考案し、或は様々の實驗を行ひつゝあるも、未だ一般に適用するゝ良法の案出されたるを聞かず。我が國民の如き君國の爲めには如何なる勞苦をも物とせざる國民にありては、依然神聖的勞働を以て徒手之に當り、却つて

優越なる載炭速度を得べし。回顧すれば日清戦役以前にありては、我が海軍も苦力を使用して載炭せしが、戦役の經驗に依り、爾後は全然艦員の手にて搭載することとなり、爲めに軍事上の一大進歩を得たと共に、國家の經費を節約すること尠少ならざるに至れり。

黔々たる其色、礫々たる其形、艦を汚し人を汚し、随つて搭載すれば随つて灰となり煙となり、絶えず吾人を惱ます此石炭も、具ぶさに之を觀すれば、縦坑幾百間横道幾千尺、始めて達する奈落の炭層より、鑛夫の汗に依りて營々掘り出だされ、更に幾多の勞力を經て車に積まれ、船に積まれ、幾百千哩を運搬され來りしもの、其一片一塊、皆是れ人間勞苦の結晶ならざるはなし。而して今復た吾人の神聖なる勞働を煩はして、漸く艦内炭庫に收められ、茲に始めて我が艦艦を驅るの資料となりて、そが任務を終ると感到するとき、吾人は煙突より濃々立ち騰る煤煙を見てさへ、亦幾多勞力の一部なるを思ひ、徒らに大氣中に飛散し去らしむるに忍びざる



の情あり。又歩兵の足の如く騎兵の馬の如く、石炭が艦艇疾驅の足たり馬たるに想到するとき、吾人は其一片一塊とも猶ほ黄金の如く貴重するにぞある。日暮漸く載炭終りを告げ、幾條の蛇管より滔々潮水を迸らして艦の内外を洗浄し、次で汚服を脱して浴を取り、神聖なる労働の汚塵を洗ひ落せば、快譬へんに物なく、加ふるに既に炭庫は充實し、何時如何なる命令に接するも、直ちに出動するを得べき健足駿馬を有するを思へば、心意自ら安んじて快更に深し。

### 十 勅諭奉讀

畏くも明治の大帝が我等軍人に下し給へる勅諭は、實に我等が精神修養の淵源にして、又我が軍隊の精華を發揚する所以の神髓なり。我等は造次にも顛沛にも此聖訓を服膺して違ふことなくば、護國の務を果たすに於て間然する所なき眞個の干城たり得べく、我が軍隊は克く皇國の權威を維持擴張するに足るを得べし。

袖端に捲ける四條の金線は、胸間に連る幾多の勳章と相映じて燦然輝き、威容四邊を拂ひつゝ、今し艦長は艦尾に翻る大軍艦旗の下に一段高く儼乎として立ちぬ。そが前には部下一千の下士卒通常禮装に不動の姿勢を正し、衛兵隊は銃を執り、共に艦長に面して並列し、副長以下の將校等亦威儀を整ひて艦長の左右に並びぬ。時に金色爛たる菊花の御紋章を見はせる黒塗の函に紫の打紐もて結べるを、一少尉恭しく捧持して艦長の傍に進めば、艦長亦恭しく紐を解き函を開き、中より勅諭の謄本を取り出して兩手に捧げ、先づ勅諭を奉讀する旨を告げ、次で嚴かに一聲「敬禮」と令すれば、衛兵隊は捧銃し、各分隊の指揮者與其他の准士官以上とは齊しく擧手の禮を行ひ、艦長は勅諭を押し戴きたる後、謹嚴敬虔の體度を以て奉讀し始めぬ。

隈なく淨められたる皇艦の上、我が武威を四海に輝かす軍艦旗の下、閻艦千餘の武夫が身も心も清らかに一點の邪念なく、確乎不動の姿勢に肅然立てる處、滿艦寂



として唯だ和風の軽く軍艦旗を撫するの外、微響だになき静閑の境、此森嚴なる光景裡にありて、今聖訓を奉讀する艦長は、當さにそが頭上に先帝の神靈降りませる心地すなるべく、又之を拜聽する部下は當さに神の御前に神の御聲を聴くが如くに覺ゆるなるべし。眞に此刹那に於ける吾人の心頭には何等の妄想なく、唯だ聖訓の一言一句が洽々として五體に沁み渡るのみにぞある。

艦長は次第に奉讀して、「朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ、其親しみは殊に深かるべき」の句に到り、更に之を繰り返へして奉讀しぬ。蓋し上は元帥大將より下は一兵卒に至るまでを、齊しく呼びて「汝等を股肱と頼み」と仰せられたる、將た「其親しみは殊に深かるべき」と宣はせられたる、其至仁至愛の大御心を拜して、吾人は餘りの辱なさに未だ曾て感涙を流さざることなく、又同時に粉骨碎身益々君國に報いんと思はざることなし。艦長の意亦茲にありぬべし。吾人は此尊ふとき聖訓を奉讀し、若くは拜聽したること前後幾百千回なるや知る

べからずと雖も、愈々奉讀し愈々拜聽して、愈々大御心の深遠涯りなきに感激せせんばあらず。而も斯の如き森嚴なる光景裡に於て拜聽するときは、吾人の感激更に一段の深きを覺ゆ。是れ我が艦團隊に於ては日曜日に分隊點檢を行ひ、服装姿勢等を検したる後、之を奉讀するを例とする所以なり。

我が海軍下士卒は斯の如く屢々聖訓を拜聽するの外、尙ほ朝起日出を見れば、先づ聖訓五箇條の首句を暗誦して、其日の一言一行聖訓に違はざらんことを誓ふべく、又軍艦旗の揚降時に、彼の莊重なる「君が代」の軍樂若くは喇叭の奏せられて、最敬禮を爲すときも、此五箇條の首句を胸の中に唱へて、更に一刻も忘れざる様、自ら誓ふべく誨えらるゝを例とするなり。

惟ふに世界の孰れの軍隊に、斯の如く有らゆる宗教の上超越し、至仁至愛、君臣の間温乎として親の子を教ゆるが如き尊ふとき教訓やあるべき。縦し之に倣つて作るとするも、夫れに依りて軍隊と軍人とを克く指導し得るに足るべき國體と帝室



とやあるべき。吾人は此金甌無缺の神州に生れ、此皇統一系、萬古不易の帝室を戴き、此至仁至愛の聖訓を以て、朝夕修養の磁鍼と爲すを得るは、抑も何等の幸運ぞや、何等の慶福ぞや、聖訓灼々日月の懸るが如く、億々萬年の後に至るまで、我が軍隊は永へに此聖訓に依りて其精華を發揚し得べきなり。

## 十一 軍歌の合唱

暮靄既に天を鎖し、海を鎖し、萬點の螢火爛々たる星月夜に獨り漣波を分け行く我が艦上、忽然として勇壯なる軍歌の唱聲は起りぬ。

一千の増良雄が力を雙脚に籠めて、甲板を踏み鳴らす靴音の寥々憂々たる中に、有らん限りの聲を張り上げ、彼の隊一句、此隊一句、交々謳へば、勇壯なる律呂は勇壯なる歌詞と相調和して、其勇絶壯絶譬へんに物なし。

『國旗及軍艦旗』『日本海々戰』『勇敢なる水兵』等一曲終つて更に一曲、譜調亦これ

従つて變はり行き、或は一隊の艦撞海を壓して殺到するが如く、或是一群の快艇波を破つて肉薄するが如く、或は雷霆の霹靂たるが如く、或は急霰のたばしるが如く、曲愈々進んで勇壯愈々加はり來りぬ。

千體齊しく力を籠め、千口齊しく謳ひ出だす大聲の、相混じ相合して高く雲井に轟き、遠く波間に響くと共に、其個々の元氣は相凝集し相磅礴して、活々潑々たる大氣圍氣となり、氤々として艦上に溢れ、大空に漲り、謳ふ者を感動せしめ、聽く者を感動せしめ、闔艦悉く血湧き肉振ひ、天漢の群星も躍るかと思はれ、靜かなる海も波立つかと怪まれ、一日の勞苦は頓に消ゆべく、百倍の元氣は更に起るべく、怯者は勇者となるべく、勇者は更に大勇者となるべく、以て水火も踏むべく、以て白刃も涉るべし。又邪念は去るべく、至誠は増すべく、以て聖訓を守り得べく、以て軍人精神を涵養し得べし。

若し夫れ戰雲一たび鎖せば、之に依りて士氣を鼓舞すること更に極めて多く、殊



に戦闘一段落を告げ、濛々たる爆煙次第に霽れ、沈没か、逃避か、波上に敵の隻影なきに至り、尊ふとき報國の鮮血が唐紅に染め爲す甲板の上に、滿艦の豺貅相並んで「勝いくさ」を高唱するときこそ、眞に勇絶中の勇絶、壯絶中の壯絶なれ。

## 十二 陸 影

陸上より海上を眺めたる風光の佳なると共に、海上より陸上を望みたる風光も亦甚だ佳なり。凡そ一事一物皆表裏あり、其一面を見て他の一面を見ざる者は、未だ以て事物の真相眞價を語るに足らざるが如く、沿岸の風光も亦海陸兩方面より之を觀るに非ざれば、未だ以てそれを極めたりといふを得べからず。吾人は多年海上にありて陸上を望見し、絶景を叫びたること極めて多し。今そが若干を茲に描出して這個の消息を語らん哉。

山勢長く走りて一角海中に突出せる處、幾株の老松蟠居して千秋の緑を湛へ、其

崖に懸れるは巨鷲の舞ひ下がれるが如く、枝葉水に臨みて濶く翠翼を張り、崖下水上悉く牛の如く熊の如き大赭岩が累々として相重り相擁し、或は倒置したる將棊の馬子となり、或は一岩横に一岩の上に丁字を爲して、將さに墜落し來るか危まれば、幾歲月風雨に暴されたる枯木の倒れて白蛇の如きが其上に横はり、一群の海鷗來りて岩頭に憩ひ岩下に浮び、又そがほとりに泊れる漁舟の炊煙緩やかに苦の間に立ち騰り、檣頭高く乾かす白帆は松樹と相交はりて、白緑點々影を水に映じ、更に又附近一丁可りの海上に、同じ岩の小島其處彼處に散在し、中には岩の間に松樹の二三株が茂れるさへあり、眼界一として畫趣滿々たらざるなし。吾人は斯る岬端を航過する毎に恍惚として目送しつゝ、暫し艦を停めて此風光を賞せんとこそ思ふなれ。

我が艦の獨り泊まれる錨地に近く、一帶の雜木山截然として水際より屹立し、滿山の新芽已に半ば嫩葉となり、淡緑に、淡紅に、淡褐に、淡黄に千枝萬梢を彩り、



そが中に松樹の高く群を抜いて處々に翠蓋を張り、今を盛りと咲ける山櫻の或は高く或は低く其間に點綴して、恰も白雲の徂徠するが如く、高く峰に出で、は蒼空の際に搖曳し、低く崖に垂れては碧水の上に靉靆し、春の海は遠く風ぎ渡れる上に、漲潮未だ干も始めずして宛ながら鏡の如く、満山の淡彩を鮮かに投影して、山と水と二面一連の綾錦を織り出だし、水禽時に來りて此處に浮べば、綾文動いて趣更に濃かなり。又半腹には透迤として一條の山徑通じ、稀に樵夫村娘の行くさへ見え、更に又山峽の低地には遙かに二三の草屋菜花の中に點々たるを望み、欸乃櫓聲緩やかに對岸より風に送られ來り、山も海も春光を浴びて融々眠れるが如し。吾人此風光裡にありては艦上に立つとしも覺えず、而も陸上より見たらんには我が艦も亦此風光中の一景物たるべし。

天工削り作す斷崖幾百仞、上には松籟颯々として樹間に不斷の樂を奏し、下には水天杳々として波頭に四時の花を散らし、此光景已に人をして壯大の感を起さしむ

るに足る。而も此斷崖を少しく離れ、一群の怪巖參差として壁立し、高きは十餘尺、低きは數尺、幾千萬年波浪に洗はれけん、巖膚悉く抉り去られ、巖骨稜々、巖面無數の孔竅凸凹を生じて、鷲々萬古の色を湛へ、海上靜かなるときすら、悠悠寄せては返へす長濤の來りて此處に衝撞せば、忽ち怒り忽ち激し、碧水碎けて皚々たる白浪となり、鞆々躍り上つて巖を噛み、瞬時にして巖は白浪を吐き、白浪崩れて沸々彼方に去る間に、孔隙凹窪に残れる水は潺々流れ落ちて玉簾の如く散絲の如く、其美觀の未だ全く消えざるに、次の長濤は早くも寄せ來りて、復た白浪巖を噛み巖は白浪を吐き、忽ち白く、忽ち斑に、忽ち黒く、斯の如く交々循環して盡くるの時なし。若し夫れ海若怒り、狂瀾澎湃として到るときは、巖を撞き巖に激する勢最も猛烈を極め、白浪高く天に沖して、轟々旬々巖を呑み巖を越え、餘勢往々崖上の松梢を摩して飛沫半空に散り、巖の下半は絶えず白浪の中に没して、巖々の白浪相續き相合し、唯だ見る一連の雪密或は高まり或は下り、下りては巖頭白浪の中



に現はれて、一大蛟龍の海中に躍るかど怪まれ、天下の壯觀を極め、天下の雄觀を盡し、眞に男性的の大光景たり。斯る大光景に至つては到底陸上より其妙趣を目撃し得べしくもあらずして、唯だ海上より之を望見し得べきのみ。

鵬程萬里、我が邦土を離れて游戈幾十旬の後、日月水より出で、水に入る太平洋上を、晝となく夜となく蹴破し來りて、始めて伊豆七島を青螺の如く望見したるとき、吾人は先づ我が邦土の陸影に接して、家門漸く近きの感あり。次で右に野島崎燈臺を翠色遙々たる安房の一角に認め、左に大島の高峰を噴煙淡く、巖間に見たるとき、吾人は早や家門を望みたる心地し、やがて赤道附近より直ちに東京海灣目掛けて、滔々押し寄せ來る黒潮の流れに、千波破れ萬波碎けて、白浪空を浸す森々たる大和田の彼方、豆相の連山煙霞模糊の間に倚伏綿亘せる處、芙蓉の靈峰は頭に千古の雪を戴きて、挺然群山をそが脚下に踏み、碧瑠璃の空際に端然として高く聳ゆるを仰ぎ見たるとき、吾人は其豪宕雄大にして崇嚴秀靈なる風光に肅然容を改

め、又同時に日夜憧憬せる我が神州國土の象徴ともいふべき此靈峰に滿腔の懐かしき思を遣り、已に家門を潜りたるが如くに覺ゆるなり。吾人は陸上又は品海等より芙蓉峰を望見するも、其雄大の觀之に及ぶべくもあらず。是れ芙蓉峰の雄大と太平洋の雄大と相和し相應じ、吾人をして最も雄大秀靈を感せしむるものに非ずして何ぞ。豈吾人の我が邦土に憧憬せる餘り、特に此感を深くするものならんや。

一帶の低山起伏して連れるが上に、老松の三々五々歩哨の如く立てる處、今しも半輪の月は上り來りて月光皎然樹間を洩れ、山は暗々として黒く、樹梢は歴々として明るく、銀色微かに波上に映じて、先づ天地の間は破れぬ。眸を轉じて對岸を顧れば、遠山は靡々、近峰は明々、已に素光の中にありて眼界漸く濶然たり。須臾に月は樹端を離れて銀波爛々灣頭に湧き、東岸の山は暗影水に浮んで益々黒く、西岸の山は清輝限なく照りて愈々明かに、此時數條の淡雲月に纏ひ松に絡みて一段の書趣を添へ、暫し恍然として我を忘れて立てば、一葉の漁舟櫓聲緩やかに艦側を過



ぐるあり、銀波そが櫓頭に碎けて銀龍躍り、舟人悠々躍れる銀龍を曳いて彼方に漕ぎ去りぬ。忽ち驚く空中唳々として聲あり。首を上ぐれば、數行の過雁半身に清光を浴びつゝ艦上を掠めて南す。時既に三更、灣外遠く明滅したる幾多の漁火もいつしか消えて跡なく、山は眠り、海は眠り、我が艦亦猛獅の眠れるが如く、獨り月色益々冴えて天地幽寂たり。

水域深く灣入して、一側には大小の山嶽起伏連亘せる處に碇を投ずれば、何處よりともなく、濛々たる濃霧起り來りて、遂に全く我が艦を鎖ざし、霧に暮れ霧に明け、復た霧に暮れ霧に明けて第三日に至るも、滿目唯だ漠々一色、悒鬱轉た禁じ難きとき、偶々天の一角に點々二三の翠綠洗ふが如き島嶼の散在せるを認め、次で五六を認め、次で七八を認め、恰も錯々布置せる叢島を見るにも似たり。「屢氣樓」の聲は忽ち艦内に傳はり、人々此奇異の現象に眸を凝らして眺むれば、叢島は依然として變ずることなく、益々人をして怪訝の念を起さしめぬ。瞻望時餘の後、一陣

の疾風吹き起り、倏忽我が艦を包める濃霧の幕を切りて落せば、眼界俄かに濶然として海を望み天を望み、而も未だ山を見ずして、唯だ山麓の翠黛が一連の長堤を爲し、一大白帯を隔て、天邊の叢島と相對するを見るのみ。頃くにして白帯漸く薄らぎ來れば、天邊の叢島と水際の長堤とは次第に其線を接續して、茲に始めて大小の山嶽起伏連亘せる元の山容を現はし、薄らぎたる白帯は宛然胡粉を以て淡く一刷毛横に山腹を抹せるが如く、そが下には早くも五六の白帆風に孕んで走るを見る。間もなく淡白の山帯は分れて數條となり、吾人は覺えず「嗚呼名畫」と叫びぬ。

海峽次第に狭く、呼べば答へんとする處、左右の山は既に秋の女神の手に染め出だされて、紅黄斑々相錯はり、滿山包むに錦繡を以てす。迂餘曲折せる海峽は我が前方に航路を隠くして、前も左右も皆錦繡となり、更に水に映じて海に亦錦繡を敷き、我が艦は錦繡の中を航過するかと疑はる。

霏々紛々降りしされる雪は漸く歇みて、唯だ見る遠山近峯、樵村漁落、一白皚々



として、家もなく、林もなく、遠く海上より望みたる雲景の轉た雄渾壯大なるを覺ゆ。やがて我が艦は針路を一轉し、次第に陸岸に接して航すれば、白一色の中に山の巖を認め、丘の高低を認め、家を認め、林を認め、景象漸く整ひ來りぬ。更に陸岸に接して航すれば、白浪岸を嚙む處、蟠蜿たる岸頭の老松は白裳の下に翠衣を現はし、白鷗三四そが下に翔けるととき、堆雪片片樹梢より落つるかと思ひ、炊煙空に靡くあたり、疎々たる丘上の枯林は樹々皆時ならぬ萬朶の花を附け、寒鴉五六枝上に止まりて雪を散らすとき、落英飄々地上に舞ひ下されるかと怪み、黒點々蟻の如きが轉びつ倒れつ行くは登校の兒群か、天地一白の中に一片紅の見ゆるは裾を褰げ行く村娘の裙衣か、景象益々鮮かなり。已にして日輪雲を破つて出づれば、燦然灼然忽ち銀山となり、銀野となり、瓊樓玉宇となり、琪林瑤樹となり、晶瑩玲瓏、眼を射、海を射、人をして水晶宮も斯くやあらんかと思はしむ。而も艦一進すれば景一轉し、觀望之を久ふして倦くことを知らず。

若し夫れ瀬戸内海に至つては、外洋に臨める沿岸の如き雄渾壯大の觀に稍や乏しきも、東は明石海峡より西は下の關海峡に到るまで、兩岸十三州航程二百四十浬の間、波靜かに海平かに、津々、浦々、島々、岬々、一として海上よりの眺望絶佳ならざるはなく、大船、巨舶、眞帆、片帆、日夜間斷なく島を縫ひ岬を廻りて往來する處、島々相重り、岬々相錯はり、二島と見れば一島となり、一岬と見れば二岬となり、岬は島と變じ、島は岬と更り、水路盡くるかと思へば忽ち通じ、峰巒斷てるかと思へば忽ち圍み、前程に島を負へて行く艦あれば、後方に山を穿つて來る船あり。兩岸次第に縮まりては聲々相達すべく、水域漸く開いては杳々涯りなく、長汀曲浦となり、奇松怪巖となり、鬼哭啾々の古戰場となり、神韻縹渺の形勝となり、碧瓦白壁を右に望み、竹籬茅舍を左に眺め、翠綠の間に古城を仰ぎ、楓林の中に山寺を指し、孌々たる欸乃を月明に聞き、點々たる漁火を闇夜に見、艦の行くに隨ひ景は移り境は轉じて、絶景に次ぐに絶景を以てし、吾人は再航三航曾て倦むことなく、



多々益々其景象の優れたるを覺ゆるなり。斯の如き明媚の風光が斯の如き廣濶の地域に亘れるは、天下其比を見ざる所にして、西人の之を嘆賞して世界の海上の大公園と稱するもの、蓋し溢美に非ずと謂ふべし。  
所謂日本三景の勝は更に言はずもがな、海上より見たる陸上の風光の秀麗なること大凡斯の如し。苟くも風流韻事に富むの士は、徒らに杖を陸上にのみ曳きて得々たるなく、時に汽船に搭し輕舟に棹して、海上より此自然の大風光を賞せずして可ならんや。

### 十三 漁火 白帆

漁舟は海上に於ける絶好の配景物にして、泊れるもの、棹すもの、漕ぐもの、釣するもの、網するもの、一として雅趣あらざるなきに、尙ほ漁火となり、白帆となりて海洋の眺めに無限の趣を添へ、人の眼を娛ましめ、詩情を湧かしめ、畫思を

起さしむるに至つては、其功德も亦至大なりと謂ふべし。

月なく、星なく、波なく、闇々坦々たる海上を航破し來りて、遙かに漁火の數點を認め、數點又數點、いつしか見渡す彼方は左右幾渾の間無數の漁火點々として明滅し、次第に近づくに隨ひ、燈々水に映じて一燈は二燈となり、百燈は二百燈となり、海上益々燈光を増し來れる様は、遠く提燈の群列を見るにも似たる哉。

星光は天漢に煌き、漁火は波上に點滅し、遙かに水天の接するあたりに之を望めば、漁火星光相錯はりて、星の降れるにも似たる哉。

細雨蕭々として夜沈々、此時古戰場なる海上を航すれば、風悲しみ波騒ぎ、鬼哭の啾々たるを聞くが如く、又數點の漁火明又滅するは、鬼火の陰々燃えては消え、消えては燃ゆるにも似たる哉。

月色皎然、漁火微かに明滅する中を航行するとき、其處彼處仄かに認むる漁舟の黑影に各々一燈を點するは、深夜街上の軒燈を見るにも似たる哉。



幾十の漁火集まりて港門を鎖ざし、艦を進むる餘地だになきとき、一聲の汽笛聞  
を破りて警を傳ふれば、群がる漁舟は忽ち散亂し、螢を狩るにも似たる哉。

曉煙漸く收まりて、朝暎水に跳るとき、濱邊を離れて欸乃勇ましく沖に出で行く

白帆の依稀として相連れるは、根據地を後に奮然敵に向ふ艦隊にも似たる哉。

海門潮上日落ちんとして西空次第に燃ゆるとき、家路を急ぐ漁舟の底に巨口細鱗

激測として充ち、満々風に孕める白帆に紅蓮の燭を浴びつゝ歸り來るは、凱歌奏裡

に戰場を引揚ぐる艦隊にも似たる哉。

暗雲起りて見る々々空を鎖ざし、疾風暴雨倏忽として襲ひ來るや、倉皇漁を止め、

辛くも白帆を半展し、巨濤洪瀾に掀舞搖蕩されつゝ歸り來るは、武運拙く敗竄した

る艦隊にも似たる哉。

水天髣髴青一髮、一髮線上幾帆影、唯だ帆影を見て舟を見ず、宛然白鷺の浮游す

るにも似たる哉。

松風颯々として潮音瀾々たるあたり、或は蘆花蓬々として秋雨霏々たるほとりに、  
點々白帆の行くは、共に一幅の畫を展ずるにも似たる哉。

風は枯死し海は風ぎ渡れる處、幾十の白帆進みもせず、退きもせず、悠々として

水に任せるは、閉鷗の波に眠れるにも似たる哉。

春風習々陸上の菜圃には黄金の花咲ける海峽を、往きつ戻りつ、右しつ左しつ、

白帆の入り亂れて己がじし走れるは、蝴蝶の群がり戯るゝにも似たる哉。

眇たる木の葉の如き漁舟の、海上に無限の趣を添ふこと斯の如く、而も亦漁歌

となり櫓聲となりて、詩に賦せられ、歌に詠せらるゝに至つては雅趣何ぞ多き。

### 十四 海 鳥

海鳥は漁舟と共に海上の好點景物にして、其外觀に漁舟の如き變化こそなければ、  
而も其自然物たる處に漁舟の及び難き雅趣の存するあり。彼の一樹一巖なく、泥臭



紛々たる品海の落に、海鷗一羽止まれるさへ、人をして棄て難き趣を覚えしむるに非ずや。海鳥中通例吾人の眼に觸るゝは鷗と信天翁とにして、鷗は沿岸に翔り、信天翁は洋上に飛び、以て行く處に吾人の眼を娛ましむ。天惠何ぞ至れる。

我が艦の碇泊中、飯粒菜屑の流れて艦尾の下に淹溜するや、其處彼處より幾百の海鷗群がり來りて、之を争ひ啖はんとし、水に浮ぶもの、水より離れんとするもの、水に下りんとするもの、銜へて逃ぐるもの、追ふて奪ふもの、純白のもの、灰色のもの、褐斑々のもの、鳥大のもの、鳩大のもの、幾種幾態、羽音は啼聲と混じて嘩々嘈々、數尋の間寸隙だに餘さずして水面を鎖せる様は、物凄くも亦雄大なり。そが中には純白の者最も多きが故に、唯だ見る暇々たる鳥群が艦體の濃灰色、艦名の金色、軍艦旗の鮮紅、海水の深碧と相對して一大畫幅を展べたる如く、轉た吾人を恍惚たらしめんとす。何等の壯美ぞ。

幾代經にけん老松の盤屈偃蹇として相連り、梢は八方に擴がり、海に向つて垂れ、

翠雲參差として懸ける下には、白砂銀を敷きたるが如く、滿目淨々として神韻の漾ふあたり、白鷗飛び來りて優游水際を緩歩す。何等の仙境ぞ。

一岩黒く突屹として紺碧の海中より現はるゝ頂きに、白鷗唯だ一羽來り憩へるは畫龍點睛の觀あり。何等の淡趣ぞ。

白浪皚々飛沫紛々たる海中の一小孤島に燈臺の高く聳ゆるあたり、海鷗群を爲して飛び交ふこと頻りなり。何等の豪宕ぞ。

一望千里、水は雲に入り、雲は水に浸り、陸影もなく、帆影もなき洋上に、數羽の信天翁艦側を右に左に翔け廻りて、暫し艦に伴ひ來り、吾人をして轉た洋上の寂寞を忘れしむ。何等の好侶ぞ。

風聲瑟瑟、蘆荻蕭々、白鷗三四飛び立ちては下り、下りては飛び立ち、日將に暮れんとして、遠時の鐘聲微かに響く。何等の寂寥ぞ。

日朗かに波靜かに、白帆の青螺を縫ひ行く處、三々五々海鷗其間に翔るを見る。



何等の清楚ぞ。

狂風颯々、千鯨萬鯢浪を捲いて寄せ來り、岸頭の松が枝、時に折れて紛々飛散するあたり、離々たる幾羽の海鷗切りに翅を振ふも、寸進尺退、時に歸るに惱む。何等の悽愴ぞ。

融々眠れるが如き春の海に、漁舟は錨を投じて潮の來るを待ち、漁夫は蒼天を仰いで眠れるとき、海鷗亦そが附近の波上來りて眠る。何等の閑境ぞ。

驟雨一過、炎熱洗ふが如く、草木欣欣として始めて蘇生せば、海鷗亦喜んで荐りに松頭を掠めて飛ぶ。何等の涼味ぞ。

颯風襲來し、狂瀾山の如く、猛雨車軸を流すが如く、天地晦暝たるとき、一群の信天翁戚々難を我が艦に避けんとして、幾回か橋上に止まるも、艦亦動搖して安んずる能はず、怒濤の上を縦横に飛び狂ひ、翅は次第に弱りて屢々水に落ちんとし、遂に行く處を知らず。何等の悲酸ぞ。

我が皇の佳節を祝ひ奉りて、滿艦飾の彩旗橋頭に撩亂たるとき、白鷗幾十其間を徐ろに翱翔す。何等の瑞氣ぞ。

老松の緑は山櫻の白きと交はりて、綾文搖々碧水に映する處、樹下に二三の鷗來り、白裳紅履、楚楚として美女の立てるにも似たり。何等の嬌姿ぞ。

洋上に鵬翼を張れる一大帆船の行くを見て、信天翁何處よりか飛び來れるとき、水夫肉片を餌にして綸を垂るれば、一囀忽ち甲板に引き揚げられ、家鴨の如く歩みて飛び立つを得爲す。何等の痴鈍ぞ。

沙頭に繋げる漁舟の上、一雙の白鷗相接して立ち、時に頸を傾け時に趾を上げ、喃喃として語る如く、穆々として親しむ如く、之を久ふして去らず。何等の琴瑟ぞ。

曉風殘月ほの々と明け行く海に、海鷗幾十陸地の方より來りて我が艦我く飛び廻るを見るとき、吾人は一段元氣の潑々たるを覺ゆ。何等の爽絶ぞ。

暮靄漸く罩めて、利鎌の如き三日月は微かに輝き、遠山近樹濛々漠々たる處、後



れて晴に歸る一群の海鷗忙がしく月を横ざりて行く。何等の幽韻ぞ。

雲雨簌々として斜めに降りしく夜、探照燈の爛々たる大光芒を、艦上より四周の山に水に向くれば、白鷗夢や破れけん、斜雨銀針の如く光芒の裡に映する間を、銀翅燦として右に飛び左に翔る。何等の妖艶ぞ。

半夜雪漸く歇みて、紅芒已に東天を抹するとき、白鷗岸頭に翔るを見れば、そが白妙の翅は玉樹銀梢と共に、紅の綾羅を纏へるが如く、神々しさ譬へんに物なし。何等の秀麗ぞ。

鰲巖相擁する海濱の一角に、數樹の紅錦枝を垂れて水に臨める處、白鷗點々そが間を潜りつ出でつ、忽ちにして錦上白紋斑々、忽ちにして唯だ紅錦一色。何等の濃艶ぞ。

萬歳の聲、送別の樂音共に消えて、我を送り來れる幾汽艇は遠く彼方に去り、やがて觀音崎を後にして相摸灘に入り、次第に針路を南に轉じて、孤艦悠悠々萬里の鷗り落つるに似たり。何等の離愁ぞ、何等の絶景ぞ。

吾人の凡骨俗腸を以てして、尙ほ克く海鳥の雅趣を感ずること甚だ多し。我れに若し詩才あらば海鳥百詩を賦せん。我れに若し畫才あらば海鳥百譜を畫かん。

## 十五 艦上の畫趣

猛虎の踞するが如き庭上の奇巖趣なきに非ず、而も麗花娟々たる一株の牡丹を傍らに配するとき、其處に無限の畫趣を湧かし、蛟龍の躍るが如き樓前の怪松妙ならずとせず、而も玉盤玲瓏たる一輪の明月を上添ふるとき、其處に絶妙の畫趣を生ず。鐵の浮城の上、虎の如き奇巖、龍の如き怪松にも譬へつべき趣々たる武夫の皆以て畫趣を存するあるも、而も牡丹の如く、明月の如き嬌姿妍容を此裡に對照し



て見るとき、吾人は更に満々たる書趣の油然として湧き出づるを禁する能はず。今吾人は奇巖に就き、怪松に就き、牡丹に就き、明月に就き、其他に就き、試みに鐵浮城上の畫情を數へん。

今しも舷梯の下に着ける一隻の艦載水雷艇より、明眸皓齒の花顔兩三楚々として舷梯を登るあり。如何なる人の夫人令嬢にや、奇羅綾錦、絢爛目を驚かし、而も氣品高潔、舉止嫺雅にして、富貴草の咲き匂へるが如く、氷輪の清く輝けるが如く、徐ろに一段又一段、鐵の大浮城に登り行けば、上には筋骨逞しき番兵の儼然銃を手にして、不動像の如く立てるを見る。正に是れ好繪畫に非ずや。

舷梯を登り來れる一連の花顔は、艦長の賓客として艦長室に導かれ、鬢髮半白、長身肥肉、赭顏銅色を爲して奇巖怪松の如き艦長と相對して椅子に倚れば、やがて嬌音婉轉、甲一語、乙一語、時に嬉々たる笑聲さへ洩れ、恰も百花撩亂として巖頭に咲き、黃鸝幽谷を出で、松下に囀づるの觀あり。正に是れ好繪畫に非ずや。

一連の花顔は艦長室を出で、一兵曹に導かれつゝ艦内を觀覽して、今し後部砲塔のほとりに來りぬ。十四時の巨砲は惡魔の如く相並んで長く艦尾に向ひ、艦尾の旗竿には大軍艦旗の春風に翻々として我が武威を語る處、美目笑を含んで立ち、輕羅風に弄ばれて動く。正に是れ好繪畫に非ずや。

一艦遙に警備の任より歸り來り、そが所屬の軍港に碇泊して未だ幾何時も經ざる時、十歲可りの少女と、八歲可りの少年と、共に洋装せるが保姆に伴はれ、黃紅紫白様々の花束を、各々そが細き腕に抱へつゝ舷梯を上り來るあり。豐頬朱唇、眸は星の輝ける如く、宛ながら天使にも似て甚だ可憐なり。正に是れ好繪畫に非ずや。此時恰も艦長の姿が後甲板に現はるゝを見るや、少年少女は疾驅してそが傍に行き、一語「阿父」と叫びて左右の手に絶れば、艦長は愛情籠もれる眼に笑を含んで徐ろに其頭を撫するところ。正に是れ好繪畫に非ずや。

少年少女は絶えて久しき父との對面に喜びを禁する能はず。手に絶り腰に絶りつ



艦長と共に其室に到り、暫しは室内を眺ね廻りて喜びしが、やがて携へ來れる花の一部をそが花瓶に挿し、給仕に伴はれて士官室、士官次室、准士官室と分ち行き、終りに病室に到りぬ。室内の患者は此不意の珍客に驚きの目を以て見るとき、そが小さき手より數莖の花を患者に各々分ち與へ、少女は「艦は已に日本に歸れり、早く病を癒やして上陸し給へ」と言へば、少年は之に續きて、「苦き薬も忍びて飲み、早く癒やし給へ」と言ふ。患者は此天使の如き可憐の口より、此優しき慰安の辭を聞き、病苦も忘れし衷心の感謝を表すれば、中には瘦せ細りたる手を出だして、天使に握手しつゝ涙を催す者さへあり。正に是れ好繪畫に非ずや。

志願兵なるべし、年齒未だ徵兵適齡にも達せざる一水兵の紅顔にして逞ましきが白髮皴面、腰は梓の弓にも似たる老爺老婆を勞り々々艦内觀覽の榮を得せしめつゝあるは、そが兩親にやあらん。階段の傾斜急なる處に到れば、背に負へて昇降しつゝ、老父母亦足の疲るゝをも忘れ、欣然として伴はれ行くは、正に是れ好繪畫に非ずや。

すや。

美々しき一隻の艦載水雷艇あり、艇首には大將旗、艇尾には軍艦旗の共に鮮かなるを翻へし、麗かなる春光を滿艇に浴び、春波を蹴立てゝ來るは、我が司令長官の某外國軍艦を訪問するにぞある。我が艦近く過ぎ行くを見れば、艇首に近く左右二名の水兵相並んで立ち、中央煙突の後ろに老兵曹の舵輪を操る傍ら、一人の少尉候補生艇を指揮しつ立てるあり。眉目清秀、紅顔の美少年にして、紺羅紗の短衣に七個の金釦と細き金線の袖章とを輝かし、雙眼鏡を肩に、短劍を腰にしたる淡装の洒々瀟々として氣高く、未來の提督たる希望の光りそが眉間に漲れる様の何ぞ可憐なる。艇尾の坐席には司令長官其幕僚を従ひ、金色燦然たる禮装に大小幾多の勳章を帯び、紺羅紗に金色の波形と錨と櫻とを縫ひ出だしたる敷物を、少しく艇外に垂れし腰掛けたるは、天晴我が精銳なる艦隊を統率する重鎮とこそ見ゆれ。今我が艦の衛兵隊が「海行かば」の喇叭吹奏裡に捧銃の敬禮を爲すを受けつゝあるは、正に



是れ好繪畫に非ずや。

某外國の艦隊司令官今我が艦を訪問し、我が長官と將官室内に相對して坐す。共に白髪童顔にして、一は瘦身、一は肥大、兩者相識の間と見え、談亦打ち解けて、時々哄笑の聲さへ聞へぬ。今此東西兩個の老提督が相對するほとりの舷窓近く、一雙の鸚鵡を容れたる籠の下に香馥郁たる淡紅の薔薇花、枝もたわ々に咲けるが一鉢置かるゝあり。正に是れ好繪畫に非ずや。

艦橋の下、紅白青黄幾十の信號旗懸け並べたる處に、信號に従事する數人の水兵あり。今艦橋より某々信號旗を掲揚すべき令あるや、聲に應じて旗を連らね、彩旗翻翻として見る々々檣頭高く掲げるは、宛ながら花圃の内より一道の彩雲忽然天に冲するが如く、美觀且雄觀を極む。正に是れ好繪畫に非ずや。

寒月凜として半天に懸り、銀波水の如く萬頃の海に湧き、當直將校は磁鐵と海圖とを案じて、一艦保安の重任を擔ひ、雙眼鏡を手にして、寒光を浴びつゝ、儼乎

艦橋に立てるは何等の雄姿ぞ、何等の清韻ぞ。正に是れ好繪畫に非ずや。

或る日曜日、士官室午餐の席上に數名の麗はしき少女が、將校の間に交はりて食卓に就けるは、萬綠叢中の紅とや云はん。將校等の戲言を弄するまに々々、且笑ひ且興し無邪氣に語るは、正に是れ好繪畫に非ずや。

旗艦の艦尾運動臺に新聞紙を手にして、藤の編椅子に倚れる老將軍あり。赭顔白髯、雪白の夏服に肩章を輝かし、徐ろに紫煙を吹かせるは、是れ問はずして司令官某大將たるを知る。そが頭上の旗竿に翻へる軍艦旗の時々垂れて、紅鮮かなる蔭に將軍の半面を隠くしつゝ、顯はしつする處、正に是れ好繪畫に非ずや。

一群の水兵今擬砲を用ゐて、彈藥裝填の練習を爲しつゝあり。彈丸を抱く者、藥莢を持つ者、尾栓を鎖す者、照準發射に擬する者、彈丸を拾ふ者、隨て裝填すれば隨て發射し、裝填又裝填、其迅速なること目にも止まらずして、一分間十餘發にや及ばん。重量百斤の六吋砲彈を徒手裝填して其餘勢克く擬砲の外端より墜落せし



むるが爲め、彼等が渾身に力を單め、流汗淋漓として傍目も觸らず努力する處、眞に男性美を發揮し、觀る者亦骨鳴るの感あり。正に是れ好繪畫に非ずや。

後甲板の上、一面に張れる天幕の裏には各國の旗章を以て覆ひ、そが下と外周とに無數の岐阜提灯を點じ、又藤の造花を隙間なく垂下し、甲板の其處此處には櫻、山吹、菊、杜若等の造花を以て飾り、砲塔の周圍には、庭園に擬して樹を植え、橋を架し、築山を現はし、燈籠を置き、更に無數の電燈を此等の間に點じれば、美觀極まりなくして艦上としも覺えず。是れ我が艦が某外國の港灣に於て、外人及我が居留民を招ぎ、一夕の歡を盡さんとするにぞある。やがて紳士淑女次第に陸上より運ばれ來り、金髮碧眼、腕も胸も露はにせる美人が、花の如く蝶の如く三々五々群れる處、已に一幅の繪畫を見るに似たり。須臾にして樂音囀亮と起れば、輕羅片々花踊り蝶舞ひ、鐵浮城は化して歡樂郷となる。正に是れ好繪畫に非ずや。數へ來れば威武嚴然たる鐵浮城の上にも、奇巖あり、怪松あり、時に麗花開き氷

輪輝き、畫趣の滿々たるもの少しとせず。天下の畫伯何ぞ其畫筆を此方面に染めんとせざる。



### 第三篇 舷窓閑話

#### 一 海軍々人の出征

海軍々人中士官以上で軍港に住居を構へてゐる者は甚だ少ない。稀にあつても、夫れは一時的の假住居である。戦争の匂が爲始めると、直ぐに東京なり又は郷里なりの本根據地へ家族を送還して了つて、後顧の憂を斷つといふのが例となつてゐる。夫れ故我々海軍軍人はいざ出征といふときにも、普通の航海に出るのと著しい違がない。否な、寧ろ遠洋航海に出るときの方が、傍の騒ぎが大きい爲めに、出かける本人も大事件の様な氣持がする。然しそれには一つの理由がある、艦隊が軍港を出ると同時に、若くは其後に宣戦の布告があるといふ場合が多いので、まだ明らさまに出征することを示す譯に行かぬからである。それで我々は此秘密的出征の首途に何をするかといへば、先づ簡單に手紙の二三本も書いて、兩親の許や、家族の許



へ送り、出征中口にするこの出来ない鰻や新鮮の魚でも味つて口腹に慰安を與へて置き、退屈のときの讀み物として文學や哲學に關する書物の二三冊も求めれば、夫れで出征準備は完成する。其以上には名香を兜に焚き込んで決死の象徴とした傳説に倣つて、香水の一壺も求めれば至れり盡せりである。日用品は艦内の酒保でも、運送船の酒保でも求め得られるから、少しも用意する必要がない。固より暇乞をすべき處もなければ、水盃を酌み交はす相手もない。颯然として出かければ、我が艦は自然に我れを敵前に導いて呉れる。行軍に足の疲れを覺ゆることもなければ、露營の夢の結び兼ねることもない。三度々々暖かい飯を食つて、潮湯ながら大概毎晩入湯も出来る。蝸牛の様にかたつむりやうに家を背負つて行動する我々は、斯ういふときに實に便利である。日露戰爭の時或る少壯將校の如きは、艦隊が明日の朝は愈々出征の途に上るといふ前晚上陸して、出征後は山へ登ることが出来ないから、日本の土地の踏み納めに、夜でも構はない山登りをするといつて、佐世保の烏帽子嶽といふ可

なり高い山の頂上まで、單身一氣に駆け上つて、出る限りの高聲を張り上げ、萬歳を三唱して來たといふ痛快極まる出征の記録を作つた者もある。又日露戰爭の火蓋を切つて落した彼の仁川沖の海戰の前夜、同地にゐた軍艦千代田の士官等は露國の士官と一緒に酒樓に大宴會を催ふした。凡そ斯ういふ點が海軍々人の特色であり、又電光石火的なる海上武力の大權威である。

自分は屢々書物や新聞雜誌で陸軍々人の出陣の狀況を書いたものを見た。さうして其多くのものは神様や先祖の位牌の前で父母妻子と水盃をしたとか、一家揃つて晴れの膳部を並べ出陣を祝つたとか、遺言を書いて箱の中に封じて渡したとか、飽くまで君國の爲めに盡せ、家の事など心疲するなと親から教訓されたとか云ふ様な事が記されてある。自分は此等を讀んだとき、いつでも昔しの軍記に書いてある武士の出陣が偲ばれる、さうして栗毛の逞しいのに乗つたカーキー色の雄姿が、門前で家族の別辭を受けて居る様や、早や遠ざかつた後ろ姿を門前に佇立して眺めて



ある妻子の様などが、おのづと目の前に髣髴される。我々海軍々人の眼から見るとそれが如何にも大袈裟の様に感ぜられると同時に、頗る詩味を帯びてゐるのを認識される。然しながら之が爲め更に一層決心の臍を固めることが出来、又それを見聞した國民に愛國心や敵愾心を増さしめる効果の至大なるを考へると、一定の土地に固着してゐて、其處から戰場に向ふといふ陸軍々人として、それは最も相應はしい適切な事だと思はれる。唯だ海軍と陸軍と其根本の相違が斯ふいふ點にまで現はれるのである。さうして我々は一度出征しても、永い戦役の間には、艦の任務の都合や、修理工事の爲めに、二度も三度も歸つて来て、出征の遣り直しをすることがあるが、陸軍では負傷でもしたとか、又は稀れに職務の更はつたとかいふ場合の外、戦争終結まで歸ることはない。是れ亦海上武力の大移動的性能から起る自然の相違である。

## 二 一 小 孤 島

西經百五十九度二十分、北緯三度五十分のあたりにフアンニングと呼ばれる珊瑚礁の一小孤島がある。周圍二十七哩、廣袤二十五方哩、陸地は楕圓狀の輪を爲し、三方に口のある淺水灣を形づくつて、珊瑚島の特徴を現はしてゐる。自分が練習艦で此島へ行つたのは、今から二十八年前、明治二十二年の昔であつた。

投錨後間もなく上陸して見た。全島椰子の樹が鬱蒼と茂つてゐる。海岸には難破船や遠い島から幾日も幾月も幾年も、波に揉まれ濤に弄ばれて漂い着いた様々の家具船具の壊れや木の片が、永い間海水に洗はれ白骨の様になつて昔の夢を語つてゐる。其間には深紅の寄生蟹が種々雑多の貝殻を背負つて何千か何萬か右往左往に駆け廻はつて水蟲を漁つてゐる。中には椰子の樹へ攀ち登つてゐるのもあり、頗る奇觀を呈してゐる。さうして蒼々とした椰子の葉と、白い漂着物と、此深紅の寄生とが、如何にも鮮やかな色彩の配合を現はしてゐる。少し進んで行くと、其處には小さな粗末な家が二三軒あつて、英人布哇土人併せて二十六人、馬二頭、牛五



頭、鶏數羽が、此島に居る總ての人類と家畜とである。聞けば此島は千七百九十八年ケビテン、フアンニングの發見以來英國の領地で、三十年前から住民が居り、鳥糞と椰子の實を採取して、一年一度寄港する貿易船に賣り渡し、其時食料や日用品を得て生活してゐるのである。それでも一年二萬弗以上の收入があると云つてゐた。家の傍らには鮮かな英國旗が竿頭高々と掲げられて、這座島にも彼等が母國の誇を示してゐる。

日獨戰爭の結果、南洋に拳大の島を我が手に占領した今日では、斯る小孤島の話は何等の感想を我が國民に起させぬであらうと思はれるが、殆んど三十年の昔にあつては、我々に多大の感想を起させずにはゐなかつた。彼等が此大洋中の一小孤島に幾年も寂しい不自由な生活を續けて平然としてゐる所に、英國人が殖民事業に成効する所以が窺はれ、又斯ふいふ小さな島からも遺利を收めて行く所に、英國の富を爲す所以が偲ばれた。曾て我が國が鎖國の令を布いて、東洋の小天地に閉ぢ籠も

らなかつたならば二村か三村にも過ぎない這座小さな島どころではない、大きな幾つかの島々に旭日旗が翻々たるを見ることが出来たであらうと思はれた。否な、今からでも我が海上武力が優越であるならば、早晚其時機が到來するであらうと感ぜざるを得なかつた。

臆て彼等の奮闘と健康とを心に祈つて艦に歸つて見ると、舷上には人垣を築いて捕鳥と魚釣に騒いでゐる。鳥は信天翁其他の海鳥で日頃見慣れたものであつたが、其捕獲の方法が如何にも珍無類である。左の掌にビスケットや罐詰肉の一片を置いて、右手に手頃の棒を持つてゐると、一羽來り二羽來り、五羽となり、十羽となり、忽ち何百羽か數へ切れないほど集つて來て、掌上の餌を見てキー／＼啼きながら、騒がしい羽搏きの音をさせて、右に左に頭上を低く天日を蔽ふて飛び廻つてゐる様は、物凄く耳も聳せん許りである。其内に我慢が出来なくなつて、掌上近く飛び下りて餌を口にせんとする瞬間に、右手の棒が閃くと見れば、大きな翼を擴げ



たまゝ水面にころりと敲き落される。之を見て他の鳥が何と思ふのか、我も我もと後から後から飛び下りて来る、下りて来ては打ち落される。中には肩や頭に止まるのがある、夫れには棒を用ゆる必要はない、徒手で攫み捕る。其面白くこと實に譬へる言葉もない。僅かの時間で艦上水上併せて二百羽の獲物があつた。

釣りの方も亦驚くべき有様で間断なく釣り上げられる。針金を曲げた急造の針で餌があらうが、無からうが、水中に綸を下せば直ぐ引き懸かる。其魚は我が國で見ることのない、青や赤や黄の色鮮かな一尺位のものが多い。中には細い釣糸に大きな鱧が懸つて始末に困つてゐる者もある。一時間餘りで甲板の前半は鳥と魚で殆んど埋つて了つた。

其晩の夕食に獲物を調理して呉れたが、海鳥は勿論、魚も不味極まるものであつた。斯くて夕靄が遠く赤道かけて此孤島を罩める頃、艦は南半球へ向けて錨を抜いた。

### 三 砲塔長の熱涙

明治三十六年の十月頃から日露の間の暗雲が日増しに濃厚となるに随つて、我が艦隊の士氣は刻一刻旺盛になつて来た。昨日は艦隊運動、今日は艦砲射撃、明日は魚雷發射と夜間射撃、其の次の日は何々演習と云ふやうに、朝から晩まで、時としては夜までも、毎日／＼間断なく訓練を積んでゐた。萬一開戦になれば相手は世界の最強國である。清國を相手にした位の決心では、兎ても我が海軍の任務を盡すことは出来ない。何んでも我が腕を磨いて一發でも多く弾丸が中り、一本でも多く魚雷が中り、一節でも多く速力を出さなければならぬと云ふ觀念は、上は最高幹部から下は一兵卒まで、期せずして頭の中に漲り亘つた。そこで如何に極度の訓練が行はれても、誰一人苦しさうな顔をする者もない。

自分は當時某戰艦砲術長の職にあつて、熟ら考へた、若し我が僚艦が百發五十



中する所を、我が艦が百發百中すれば、一隻で二隻分の働をする譯である、戦艦一隻増加したのと同じである。之に反して他艦が百發百中するのに、我が艦が百發五十中ならば、半艦の働をするに過ぎない。主戦艦隊の勝敗が砲力に依つて決せられる今日の戦闘に於ては、取りも直さず、砲術長たる自分等の職責を完全に盡して、多くの命中彈を得るか否かに依つて、全軍の勝敗が決められる譯である。我が司令長官が最も巧妙に最も理想的に艦隊を指揮されても、又我が艦長が如何に良く艦を操縦されても、砲彈の命中が少かつたならば、何等の効を奏することは出来ない。即ち一面より觀察すれば、砲術長は戦闘勝敗の主なる決定者である。自分は今更斯く考へて來たときに、満身に冷水を浴びさせられた様に、今更自分の職責の重大なるを感じた。平常から各艦殆んど競争的に命中彈の多寡を争つて奮勵してゐたのであるが、尙ほ最善最大の努力を盡さなければならぬと云ふことを沁々と感じた。そこで晝間は砲臺將校と共に射手の訓練に就て一日駆け廻り、その間に砲機の分解

手入を爲せたり。照準器の試験を爲たり、具合の悪い所は工廠へ駈け付けて修理改造をして貰つたり。夜は射撃指揮上の諸計算や方法の研究に力めて、食事の間にも夢の間にも、何處かに缺點はないか、より以上に向上する良法はないかと反省してゐた。

這麼状態が幾日か持續されて翌年の一月になつた。暗雲の密度は益々加はり、新聞に危機一髪いっはつの文字は益々多くなり、艦隊の訓練は益々猛烈となり、遂に將校下士卒をして自信力を得せしむる爲め、佐世保港外に實用彈を以て戦闘射撃を行はれることになつた。是に至つて自分自分は亦も責任の重大なるを感せずにはゐられなかつた。何故かといふに、此射撃の成績が良好ならば、艦長以下が深い自信力を以て戦闘に臨むことが出来る。自信は實に勇氣と沈着の根柢である。又司令長官にしても安心して戦術の巧妙を盡すことが出来る。然るに若し其成績が不良であつたならば、艦隊の士氣を銷沈させるのみではない、爲めに當局の決心を鈍らせる様な結果を來



すかも知れぬ。或る意味に於て此射撃は我が海上武力の試金石たると同時に、當局大決心の分岐点であるともいへる。

愈々其當日となつた。自分は實戦に臨む時のやうに朝早く起きて、身體を拭き清め、肌着やシャツを清淨なものと着替へて、自分で自分の決心を表現した。さうして最早人事の最善を盡くした以上は神明の加護を待つより外はないと觀念して、上甲板に出で新鮮の空氣を深く呼吸して、只管精神の安靜を得るに力めた。

艦隊は出港して射場に向つた。射場は佐世保港外で、標的は水雷艇程もない海上の小島である。我が艦は當時旗艦であつたから、先づ第一番に他の一僚艦と共に射撃をすることになつた。一聲の喇叭は艦内に鳴り響いて、瞬く間に悉皆の準備は整つた。二艦は戦闘速力を以て射撃線に入つて來た。忽ち萬雷一時に落ちて射撃は開始せられた。命中弾は一發二發續々數へられる。さうして命中と共に岩を飛ばし土を散らし、爆煙はさつと迸る。見る／＼爆煙で標的は隠れて了つた。射手

は爆煙の真中を目がけて撃ち出す。爆煙は益々濃くなる。間もなく所定の彈丸を撃ち盡くし、艦は一轉して反對舷側の砲火を開き、爆煙は再び島を包んだ。射撃の成績は幸にして良好であつた。夫れに僚艦の射撃は何かの原因で命中弾が少かつた爲め、殊に我が艦の良成績が目立つて見えた。けれども惜しいことには、主砲の射撃が命中しなかつたやうに思はれた。射撃が終つて自分は艦長からも司令長官からも、過分の讃辭を受けた。然しそれは寧ろ射手の伎倆が優秀なる爲めであつたのである。兎に角此日の射撃に依つて艦隊皆我が艦の射撃術の優秀なるを知り、猛烈極まる彈丸の爆發と、標的が濛々たる爆煙に包まれる光景とを目撃して、もう何時開戦となつても驚くことはないといふ大自信力が出來た。

此夜遅くまで自分は己が部屋で射撃の結果に就て默想に耽つてゐた。成績は先づ良好であつたが、果して主砲の命中弾がなかつたとすれば、夫は大問題である。敵艦の死命を制するものは主砲であるのに、其主砲が縦ひ發射彈數の至つて少い爲め



とはいへ、命中しなかつたのは、自分の職責上、否な、我が艦隊の勢力上、大に攻究を要するものであると考へた。射手の照準發射に微少の誤差があつたか、照準機其他に缺點があつたか、如何にして此原因を探究すべきかと、とつおいつ、先きから先きへと思念を走らせてゐた。其内に十一時の時鐘が鳴り響いた。丁度其時自分の部屋の戸をノックする者がある。

「誰か」

「前部砲塔長です。少し申し上げたいことがあつて参りました。」

「入れ。」

扉を開けて悄然と入つて來た前部砲塔長〇〇上等兵曹の兩眼は眞赤に充血してゐた。

「今頃どうしたのか。」

「ハイ、斯様に遅く御邪魔致しまして何とも恐れ入りますが、實は今日の射撃に、私は本艦主砲の射手といふ大任を帯びて居りますのに、命中弾が得られなかつ

たのは、如何にも申譯ありませんで、御詫に参りました。」

言ひ終らぬ内に、其兩眼には早や露を宿してゐた。暫く杜絶て復た語り續けた。

「貴官が御乗艦されてから、三年といふ永い間種々と御盡力になりました、砲塔の機械装置は前よりもすつと具合が良くなり、又御熱心に御指導された御蔭で、私共の腕前も自分ながら餘程上達したと思つて居りますから、今日こそ是非日頃鍛えた腕前を現はして、立派な命中弾を御覽に入れ様と覺悟して居りましたのですが、それが一發も命中させることが出来なかつたのは、寔に何とも申譯が……」

こゝまで語つて來た彼は、もう兩眼から熱涙をはら／＼落してゐる。

「……申譯が御座いませぬ。……今日の副砲以下の彈丸はあの通り美事に命中したのに、主砲の……彈丸は何故命中しなかつたらうかと、……下士以下の射手が話してゐるのを……聞きますと、實に……實に私は面目がありません。……それは私自身の耻を嘆くのでは御座いませぬ。……上官に對して合せる顔があり



ません。……其内でも貴官に……對して。……今日主砲も良く命中したら、貴官の御満足がどの位かと思ふと、……尙ほ更ら殘念で御座います。」

彼は益々熱して来て。一語一涙、熱涙は滂沱として頬を流れぬる。

「それに今日の射撃は平常と違ひまして、今戦争が始まるといふ時、一發の彈藥でも貴いのに。……其何發かを徒にしたと思ひますと、……彼の値段の高い、……貴重な彈藥を徒にしたかと思ひますと、……實に此上もない不忠の次第で御座います。……又承れば今度の射撃は此艦隊の勢力を試めて見たり、……我々に自信を與へたりする爲めであつたといふことでありますが、私の撃つた……彈丸が命中しなかつた爲めに、其筋の方々に御……御心配をかけまして、又此御艦の人々に自信を與へることが出来なくつては、……貴官が……御職務上どの位御心配してゐられるであらうかと思ひまして、……寝ることが出来ませす、……攻めて私の此苦しい胸の……胸の中を申上げて、……御詫したいと存じまして……」

此御部屋の前まで参りますと、まだ明りが點いてゐますから、……嗚呼砲術長も種々御考へになつて、まだ起きてゐられるかと思ひますと、もう……もう私は堪らなくなりまして、……此夜深に御邪魔して、御詫を申上げに参つた譯で御座います。」

彼はもう極度に熱して聲涙共に下つてゐる。自分は始めの内は彼の餘りに女々しいのを見て、一喝して彼が涙を止めて遣らうと思つたが、彼が言ふ所を聽いてゐる内に、彼が五體に至誠の漲るのを取らない譯には行かなくなつた、さうして丁度自分が先刻から考へてゐた問題に逢着したのであるから、自分の頭も次第に彼が頭に接近しない譯には行かなかつた。尙ほ彼が潜然として流す涙は、自分の眼にも露を誘はない譯には行かなかつた。そこで自分は彼が非常に精神を攪亂されてゐるのを見て、之は穩かに諭すのが良いと覺つた。自分は力めて靜かに、さうして同情を表して慈母が其愛兒を諭すやうな心持で徐ろに話した。



「段々聽いて見ると、お前の心は良く解つた。それは今日の射撃に主砲の彈丸も良く命中すれば、之に越した喜びはないが、世の中は萬事さう思ふ通りになるものではない。主砲は副砲と違つて、一から十まで機械の力を借りて遣るのであつて、思ふ處で停めるといふことは容易でない。畢竟今日の機械の進歩では、到底副砲以下を人力で操縦する様な具合に照準を續けることは出来ないのだ。それ故砲塔砲の照準は最もむづかしいものとしてある。それに今日の射撃は彈丸数は少く、標的は彼様に小さいのであるから、中らなかつたとて、射手の腕前が非常に劣つてゐるとは言はれない。命中しなかつたが、其誤差は目にも見えない様な僅かの違ひで、彈丸が標的を外れたらうと思つてゐる。實は自分も先つきから其原因に就て種々と考へて見たが、照準に誤りがないとすれば、照準機に誤りがないとも言へぬ。明日からまた一層精密に調べて見る積りだ。それに今日は後部の砲塔も、他の艦の主砲も命中しなかつたので、お前一人の不成績ではない。兎も角も今日

の射撃を煎じ詰めれば經驗の爲めだ。今日の不結果に依つて缺點を見出すことが出来れば、愈々戦争といふときに百發百中の成績が得られる譯だ。お前の撃つた彈丸が中らないからとて、決してお前一人の不面目ではない。自分はお前の照準に誤りがあつたとは思はん。寧ろ自分の研究の足らなかつたのだ。責任は自分にある。まあさうくよくするには及ばないぢやないか。」

「さう仰しやつて下さりますと、私は尙更面目が御座いませぬ。」

「お互に我が海軍の一等艦に勤めてゐるのは、此上もない名譽の事だが、此名譽の位地を辱めまい、此御艦の名譽を揚げよう、いざ戦争といふときに負けまい、軍人の本分を完全に盡さうと思ふと、却々氣骨も折れ心配もある。我々がこんな寢ても起きてても、心配するのは、皆んな君の爲め國の爲めだ。一通りや二通りの心掛で出来るものではない。お前の涙の一粒々々も皆んな尊い愛國の涙だ。」

自分も茲に到つては、我が日夕の心遣やら、皇國の興廢が迫つて來るのに思ひ及



ぼして、感激の情が次第に高まり、終に一種の感涙が油然として湧き出づるのを禁ずることが出来なかつた。手巾を出して兩眼を拭いた。多感多涙なる彼は此最後の一語を聞き、自分の落涙したのを見て、益々感に打たれて、涙は千條の瀧津瀬と流れてゐる。自分はどうかして彼を慰めて遣らうと思つて、子供の泣くのを宥めるやうに右手を彼の肩に置いた。

「もう涙を收める。如何に愛國の涙も、さう流すものではない。然しお前の涙は何處までも尊い涙だ。いまに其涙でロシアの艦隊を沈めることが出来る。さうして嬉し涙となるときが来る。俺もお前の涙で一層の奮發心を起した。お前も奮發して遣れ。」

彼は愈々感に堪へざるが如く、自分を上官として見るよりは、寧ろ同情ある共鳴者として、より多く感じたらしい。さうして雙手を出して自分の肩に軽く載せた。「砲術長！仰る通り之から私はうんと奮發して百發百中の呼吸を呑み込みます。」

さうして愈々開戦となりましたら、真先にロシアの軍艦を沈めて御覽に入れます。」

「良く言つた。それだ、その精神こそ大和魂だ。」

自分は左手を亦彼の左肩にかけた。さうして二人は何時とはなしに軽く相抱き合つた。さうして思ふ存分泣いた彼は漸く手を離した。彼は始めて氣が落ち付いて來た。發奮の氣分が歴々と見えて其兩眼は輝いて來た。彼は今悔恨の深林から發奮の大道へ出で、失望の谷から希望の山へと登つて來たのである。

「露國がどう出るか、我が政府がどう處置するか、我々には判らないが、九分九厘は戦争となるに違ひない。國の大ききから言へば大人と赤子の様だけれども、日本人は神代の昔から強い。忠君愛國の精神に於てロシア人の及ぶ所ではない、我々の頭には神様が止まつてゐられる、負けることは決してない。お互にうんと奮發して遣らうぢやないか。」



「ハイ、段々と御教訓で、私も甦つたやうな気が致します。これから益々一生懸命に行りまして、いまに開戦となりましたら、始めの第一弾から敵艦に中てるやうに致します。」

「さうぢや、其心掛けて遣つて呉れ。餘りくよくよするな。人間萬事塞翁が馬だ。

今日の失敗は明日の成功だ。心配するな。……もう遅いから行つて寝るがい。」

「ハイ、それでは貴官も御休みになりますように……、寔に御邪魔を致しました。」

彼は漸く解し去つた。先刻来たときの悄然たるに引き替へ、勇氣凜然として出て行つた。自分は床に就ても萬感交々起つて中々眠れなかつた。

彼の大戦争の裏面には斯ふいふ小悲劇が幾つも幾つも隠れてゐるだらうと思はれる。

#### 四 ホノル、の失敗

我が居留民保護の爲め今朝ホノル、港に着いた帝國軍艦浪速の甲板の上に、今しも二人の將校が頻りに艦外の景色を眺めてゐる。

港が狭いので艦の前後四隅から錨鎖を取つて繋がれてゐる。其艦首の方は人の聲が届く程の距離を隔て、直ぐ市街である。市街の先きは、だら／＼上りにボンチポールの山へと續いて青々と茂つてゐる。此翠緑、滴る山腹に。白や鳶色や様々に塗つた人家が、宛ながら繪のやうに浮き立つて見えてゐる。市街の右も左も海岸に添ふて青葉隠れに涼しさうな家が疎らに見える。處々には椰子の樹が群を抜いて麒麟の様に立つてゐる。右舷の方には此緑林の盡くる所にダイヤモンドヘッドの死火山が、巖の多い毒々しい茶褐色の山容を示してゐる。さうして太陽は頭上から強い光線を此萬象の上に浴びせ、樹も家も山もぎら／＼と光つて、遺憾なく熱帯國の氣分を漾はしてゐる。艦尾の方は寄せ来る千波萬波が珊瑚礁に碎けて、軽々と鳴り響きながら一面の白浪を泡立てゝゐる。其處には土人の女が澤山来て、着物を着たり



で半身を水に浸してきやつく騒いでゐる。其先きは渺茫として果てしもない太平洋の大海原が南半球に續いてゐる。陸上の眼界は我が國の一村にも及ばぬ程の蕞爾たるに對して、海上の光景は如何にも雄大である。さうして北東の貿易風はそよそよと間斷なく海上から吹いて来て、熱帯とはいへ暑さに苦しむ程のこともなく、心氣甚だ爽快を感ずるのである。

此光景に見蕩れてゐた二人の内Yと呼ぶ一人の將校は、シガラの灰を落しながら彼の友に話しかけた。

「F！君は此處へ何遍來たか。」

「僕は二度目だ。君は？」

「二度目だ。」

「三度目とはよくく御縁があると見えるねえ」

「實際御縁が深いんだが、同じ外國でも布哇へ縁の深いなどは、餘り有り難くない

よ、此次は移住民にでもならなければいゝが、アハ、ハ、ハ。」

「我々が候補生のとき練習艦で來た頃と變つてゐない様だなあ。」

「政治上には布哇王朝が倒れて、共和政府が出來たといふ大變動があつても、風光は依然として舊布哇だ。然し上陸して見たら、何か特殊の變つた現象があるかも知れない。どうだい、次の小蒸汽で上陸して見ようぢやないか。」

「さあ、久し振りで布哇のアイスクリームでも試みて來るかな、……それではそろそろ仕度しよう。」

二人は上甲板を去つて下へ降りた。暫くすると、取次が小蒸汽の發艇を報ずるベルを鳴らして艦内を一巡した。間もなく白麻の軍服を瀟洒たる背廣服に着換へ、麥藁帽を戴き、ステッキを小脇に抱へながら、二人は上甲板に現はれた。其處には皮肉屋と言はれる一人の將校が居て、直ぐ冷やかし始めた。

「おい、紳士！何處へ行くか、無論波止場から馬車だらうね。電話は先刻から通じ



てゐるから、さう言つて遣らうか。アハ、ハ、ハ、」

Fは答へた。

「無論だ。然し馬車はもうちゃんと待たしてあるから夫には及ばんよ。アハ、ハ、ハ、」  
其時小蒸汽が舷梯に着いたので、二人は急いで乗つた。小蒸汽は白浪を蹴立て、陸岸へ向かつた。

二人は市街の或る町に現はれた。懸て東京なら銀座通りとでもいふ様な處へ差しかつた。二人は話しながら人道を歩いてゐると、向ふから十二三になる白人の女の子が來た。さうして行き遇ひ様に、急がしく廣告の引札のやうな小さな紙片を一枚宛呉れた。二人は何氣なく受取つて其儘二三間も歩いたと思ふと、後から「もし、お待ちなさい、お錢を出さず持つて行つてはいけません」と言ふ。二人は驚いて振り返つて見ると今の少女だ。二人は臍に落ちない顔をして其紙片に目を通ふした。

「おいF！之は引札ぢやないよ。慈善芝居の入場券だ。」

「成程さうだ。僕も廣告の引札かと思つて讀まずに歩いて行つたが、これは失敗つた。仕方がないから買つて遣らうか、入場料はいくらと書いてあるか、え、と五弗だ。五弗は驚くなあ。」

「五弗といへば十圓だ。我々の収入に對して十圓も此處の慈善事業に貢献する義務はないようだねえ。」

「賛成だ、返へして了へ。」  
斯くて入場券は少女の手に返へされた。驚きの目を以て二人の會話を聞いてゐた少女は、愈々呆れた顔をしてゐる。二人は頓着なく歩き出した。さうしてYはFに話しかけた。

「大變失敗つたなあ。大日本帝國軍人も案外吝嗇だつたねえ。」

「なあに、旅の耻はかき捨てたといふから構やしない。彼奴は我々を居留民だと思



つてゐるだらうから、日本の軍人だとは判らないよ。何しろ十圓助かつたんだから、少し位間の悪るかつたのは償つて餘りありだ。」

「それでは今夜ハワイアンホテルで御馳走でも食ふことにするかね。アハ、、、」

「それがよからう。アハ、、、」  
二人は夫から其處彼處と歩いて我が公使館へ行かうとしたが、道が少し疑はしくなつた。すると二十四五になるハイカラ男が一人遣つて來た。其風采も容貌も日本人とほか見えない。Fは日本語で此男に尋ねた。

「日本の公使館へは此道を行けば良いですか。」

ハイカラは驚いた顔をして、怪しい英語で「判りません」と答へて行つて了つた。二人は互に顔を見合せながら其男の後姿を見ると、帽子の下から豚尾が少し現はれてゐた。

「君！あの頭を見給へ。君の言つたことが通じなかつた筈だ。」

「うむ、それにしても彼奴は支那人に似合はない良に血色をしてゐた。どう見たつて日本人だ。」

「おい、そんなに負け惜みを言つても仕方がない。……時に今日は斯ふ失敗が連發しては遣り切れないから、公使館へ行くのは止めにして、郊外を暢氣に散歩しようぢやないか、どうだい？」

「夫れも良からう。這麼小さな街へ來て一度も二度も失敗を遣つては、實際日本軍人の估券が下がるからなあ。」

二人は笑つて失敗の蹟を語りながら、西の方へ市街を出て、郊外へと十四五町も歩いた。左は疎らな雑木林を透して眞珠港の水面を眺め、右は離れ々々に不潔な土人や支那人の家が建つてゐる。豚の子がうろ／＼してゐるから支那人の家だと直ぐ合點が出來た。今二人は少し下り坂になつた處へかゝつたとき、一陣の疾風が颯と來たかと思ふと、Yの帽子を吹き飛ばした。Yは驚いて視線を帽子の行衛へ向けた。



帽子は粗造な木柵を越して支那人の屋敷の内へと落ちた。Yは帽子を己が頭上に復歸せしむる最善の手段を考へてゐる。柵を越して入れば、いやに西洋かぶれのある土地丈けに、家宅侵入だなど、言はれるかも知れない。Yの顔には少しく當惑の色が見えた。そのとき穢い小さな家の窓から五十四五の婆さんが、胡麻鹽頭をにゆつと出した。Yは待つてゐたと言はぬ許りに、

「お婆さん、私の帽子が風に吹き飛ばされて、此處の柵の内へ落ちたから取つて下さい。」

と英語で話した。お婆さんは直ぐ出口から駈け出して来て、帽子を取つて呉れた。見ると土人の女が着てゐるのと同じ型の更紗の擬ひ洋服を着てゐる。どうも支那人らしくない。お婆さんは帽子をYに渡して笑ひながら、

「あなた様方は日本の軍艦の方ぢやありませんか、妾も日本人ですよ。」と日本語で話した。二人は鳩が豆鐵炮を食つたやうに目をぱちくりしてゐる。Yは

斯ふ言つた。

「おや、さうか、此邊の家はどの家にも豚が畜つてあるし、お婆さんの頭丈け見たものだから、矢張支那人だと思つた。アハ、、、それにしてもお婆さんは能く英語が解るねえ。」

「永く此土地に居るものですから、ほんの片言なら解ります。」

二人は此處を辭して元來た道へ歩を返へした。

「君！あのお婆さんは日本人だけれど、あの家は支那人の家に違ひない。支那人の女房になつてゐるのかも知れない。して見ると、僕の間違つたのも幾分の理由がある譯だねえ。」

「君も矢つ張り負け惜みを言ふのか。アハ、、、、」

「アハ、、、兎に角、今日は總計三度の失敗をしたには驚いた。始めの君も僕も同じやうに失敗つて、後とは君が一度、僕が一度だから、一人が一度半宛失敗



つた勘定になる。失敗の成績は二人とも同点だ。」

「這麼成績は同点になりたくないねえ。君に全點を差し上げてても良かったにやあ。

アハ、ハ、ハ、」

「冗談は置いて、僕は今日の第二第三の失敗から熟ら考へたんだが、今日のやうな失敗は我々が此狭いホノル、で演つた許りぢやなくつて、日本人と支那人が澤山住んでゐるアメリカあたりでは、到る處で演つてゐるだらうと思はれるねえ。殊に西洋人からは常時間違へられてゐるだらう。……支那人が其内に進歩して彼の特殊の國風の辨髪を切つて洋服を着るやうになれば、却々見分けの付くものぢやない。所謂支那人顔の黄ばんだ、血色のない、暈如とした眼付きの連中は日本人が見れば大概判るけれど、西洋人の眼には兎ても判るものぢやあないからねえ。」

「眞實にさうだ。そこで其結果は日本人に利益か、支那人に利益かと言へば、文明の程度から見て、遙かに優つてゐる我々日本人の損をする譯になるねえ。絹が木

綿と間違へられ、牛肉が馬肉と間違へられるやうなものだ。支那人に對しては失禮な話だが實際さうぢやないか。」

「して見ると先刻のハイカラは木綿が絹に見られ、馬肉が牛肉に見られた方で、彼奴は今日の一番利け役をしたものだねえ。アハ、ハ、ハ。兎に角我々は支那が長夜の眠りから醒めて、我々日本人と同程度に進化して貰はなければ、實に割が悪いぢやないか。どうしても支那の開発は日本の天職だねえ。」

「夫れには、日本が大海軍力を備へて支那海は勿論、北太平洋に歐米の勢力が瀰漫らない様にするのが第一だ。」

「大分話しが偉い處へ發展したものだ。どうだい「ホノル、に於ける實驗より得たる支那開發の必要」とでも題して二人連署の建白書でも出さうかな。アハ、ハ、ハ。」

「それも宜からうが、それよりは之から失敗をしない工夫をすべしだねえ。アハ、ハ、ハ、」



「アハ、ハ、」  
其夜は此失敗談で士官室は割れるやうな賑かさであつた。さうして時は明治三十年、  
Yといふのは自分である。

### 五 土都君府の思出

曾ては歐亞の兩大陸に跨つて覇業の全盛を極めた土耳其帝國は何を感じたものか、  
修好の爲め明治二十三年使節を我が國に派遣することになつた。土耳其軍艦エルト  
グロールは其新月旗を翻へして、ダーダネルの奥深く君府の港を後に、旭日旗の  
輝く我が日本帝國へ遙々と來航した。既に無事使命を果たして、九月十五日歸航の  
途に就いた其翌日、紀州沖に差しかつたとき、颶風に遇つて艦は操縦の自由を失  
ひ、終に無慘にも檣野崎の下に破壊沈没して、使節以下乗員の殆んど總ては、千秋  
の恨を吞んで遠き異域の水底に藻屑と化して了つた。其生存者六十九人を彼等の本

國に送還する使命を以て、練習旁々我が金剛、比叡の二艦は其年の十月七日、纜を  
横須賀軍港に解いて鵬程萬里土國を指して出發した。當時自分は金剛にあつて此珍  
らしい舊大國を見舞ふことを得たのである。

十二月二十六日兩艦がダーダネル海峽の入口ユーキエリへ達したとき、其處には  
土耳其の船が一隻碇泊して待つてゐた。艦で一高官は我が艦を訪問して遠路態々生  
存者を送還すべく來航された謝辭を述べた上、「當海峽は一切軍艦の通行が出来ぬこ  
とになつてゐるから、甚だ御氣の毒ではあるが、貴艦も此處に留つてゐて貰ひたい、  
就ては生存者は此處で御引渡しを願ひ、又貴艦々長士官下士卒とも、我船船を以て  
當地より首府君府へ交るゝ御案内して御接待申上げたいから、どうか御承諾を得  
たい」と申し出た。我が艦長は之に對し、「生存者を此處で引き渡すことには毛頭異  
存ないが、我が兩艦は我が皇帝陛下から、貴國輦轂の下に赴いて親しく貴國皇帝陛下  
に拜謁し、使節派遣に對する朕が謝意を申上げるといふ聖旨を奉じて來たのである。



其上我が陛下より貴國陛下へ捧呈すべき御親書と貴重の御贈品とを搭載して居る。之を他の船舶に積み移して搬送する爲め、萬一にも損傷などすることがあつてはならぬから、我が兩艦は是非とも君府の港に入ることを要求する。當海峽の軍艦通航を禁止してあることは固より承知してゐるが、今度の我が兩艦の使命は帝室と帝室との間の特殊の關係に基くもので、尋常一般の軍艦通行とは全然趣きを異にしてゐるのである。貴國は須らく此事を關係諸國と協議して、我が二艦の通過出来る様に至急取計はるべきが至當である」といふ意味の申込をした。そこで彼の出張官吏も理の當然に「然らば政府に復命して何れ御返辭をするから、暫くスミルナで御待ち合せを願ひたい」といふことになつて、此處で生存者を引き渡し、小亞細亞のスマルナへ回航してゐると、其年ももう今日を限りといふ三十一日に、土耳其政府から君府へ入港差支なき旨の電報が來たので、直ぐ出港した。明くれば明治二十四年の一月元旦午前八時ダーダネル海峽に入つた。麗かな初日の光を滿艦に浴び舳艫

相含んで堂々旭日旗を翻へしつゝ、此國際法上やかましい海峽を、陸上砲臺との間に交換する禮砲の般々聲裡に進行する様は眞に壯快の極みであつた。艦は翌二日君府城下の金角港に着いた。

入港後帝室の優遇、官民の歡迎は一通りではなかつた。我が艦の碇泊してゐる處は海岸に臨んでゐる離宮の直ぐ前であつた。其離宮の一棟を我々士官以上の宿舎に供せられて、數人の接待員が始終詰め切つてゐる。我々は上陸すると此處に寢食をして、其間に接待員の御國自慢を聴いたり、市中の見物をするのであつた。艦長以下主なる將校は屢々參内して拜謁、御陪食、宮中演劇陪觀などの榮を得た。

我々は滞在中に二三の宮殿も拜觀した、ボスフォラス海峽を抜けて黒海の中へも入つて見た、市中は勿論附近の名所古跡も見た。土耳其風俗の一斑も味はつた。

ボスフォラス海峽に臨んでゐる何とか宮殿の内に夏の御殿と云ふのがあつた。其處



には宏壯な屋内に雪の様な純白の大理石で出来てゐる、楕圓形の大きな水浴池があつて、池の中には底まで透き通る様な清らかな水が中央の噴水塔から滾々と迸つて、池の外縁とすれぐに水が満たされてゐる。周りには二三間置きに童男童女の大理石の裸體像が立つてゐて、其差し上げた兩手の上には種々の花卉が置かれてゐる。夏時には陛下が、澤山の美妃を伴つて時々此池で水浴されるのだと聞いた。後庭に出て見ると虎や獅子などの猛獸が畜つてゐる。宛然昔の西洋の畫にある様であつた。帝室の贅澤は此一點でも想像か出来る。此離宮の對岸にある他の離宮は所謂三千の後宮で、其宏壯な建物が悉く美妃の住居に充てられ、夫等美妃を安全に拘束する唯一の良法として黒奴を以て其身邊の使役に服せしめてゐると、土耳其の士官は話した。さうして此多くの美妃があるのに毎年アルメニヤの美人市から數萬弗を値する美人を一人宛買ひ上げて來るのであるから、幾年の間陛下の御顔も見たことのない者が澤山あると、他の土耳其人は話した。自分は是に於て阿房宮賦の中にある、

「一肌一容盡態極妍纒立遠視而望幸焉。有不得見者三十六年」の句を思はずにはゐられなかつた。

寶庫と云ふのは、古來幾多豪邁の英主が、歐亞兩大陸を席卷した當時に、到る處で分捕つた貴重品の陳列場である。百數十坪の庫内は見渡す限り金の山、銀の山、寶石の山で、見る目も眩い程である。中にも何帝が分捕つて來た何王の玉座と云ふのは、凡そ一間四方、高さ數尺の臺上に、更に天蓋があつて、それが悉く金と寶石で出来てゐるのには、一驚を喫せざるを得なかつた。又昔しの金銀貨幣が杉形に六尺餘の高さに幾つも積まれたのや、何千個かの眞珠を聯ねた王冠や、金銀珠玉を鏤めた幾振の寶劍や、數限りのない貴重品は皆往古の富と強大とを語るものであつた。之を時價に換算したならば、何億圓か何十億圓かを價するであらう。さうして之を國防なり、殖産なり、國家發達の上に適切に使用したならば、富國強兵は立ち處に成つて、此世界の舊大國を瀕死の境から救ふことが出来るであらうと思つた



とき、此寶庫も寶の持ち腐れであると感じた。古往今來國民が貧しく國君が富めば、其國の危殆に瀕するのは一轍に出づるものである。

毎週金曜日には皇帝が皇居を出て數町先きにある教會堂に臨幸され、其處で御祈禱の式が行はれる。夫れが亦仰々しいものである。自分等は接待員の誘導で路筋の二階の上から其盛儀を拜觀した。日本の習慣では高い處から高貴の御通行を拜するといふことは、大不敬に當るとされてゐるのであるが、外國では少しも頓着しない。日本に來た許りの外國人が高い所から高貴の御通行を拜したからとて、直ぐにそれを不敬呼ばりをするのは無理であると其時自分は感じた。宮門から教會堂に到る大路の兩側は歩兵と騎兵で幾重となく固められてゐる。騎兵は一隊毎に馬の毛並を一様に揃へたものであつた。兵隊の後には一般の拜觀人が無數に立ち並んでゐる。此何萬といふ人が軍人も普通の人も、少數の婦女を除いて皆赤い帽子を被つてゐるので、花壇の花を見るが如き一種の美觀を呈してゐる。憲兵と巡查は兵隊の前に一間置

き位に配置されて警戒頗る嚴重を極めてゐる。應て教會堂の鐘が鳴り渡ると、先づ皇子達が徒歩で教會堂へ成らせられる。まだ七八歳の傷い氣な皇子が嚴めしい軍服を着けて劍を重そうに持つてゐるのは、何となくいぢらしい様に見えた。其内に喇叭や奏樂の音が傳はると、陛下の御馬車が轆々として走つて來た。無蓋馬車であつたから能く陛下を拜することが出來た。帽子は矢張赤帽で、軍服を着用されてゐたと記憶する。さうして寶算五十四五で元氣のない御様子に拜した。自分等の拜觀してゐる處から數十歩先きの方へ御馬車が來たときに、何の爲めか一人の兵士が隊列を離れてつか／＼と御馬車に近寄つた。憲兵は直ぐ彼を遮つて引き立て、行つた。斯ふ云ふことがあるから警衛が嚴しいのであることが判つた。又國民の或る部分は誠意を皇帝に捧げてゐないといふことも肯かれた。

皇帝は日本が好きで、日本の事は何でも珍らしく、最も日本熱に侵されてゐる者の第一人者である。それ故侍臣等に日本の軍艦で珍らしいものを見たらば何んでも報



告しると命じてある。或るとき我が艦で主なる土耳其人を招待して宴會を催したことがある。其餘興に日本の武術と兵卒の素人演劇を行つて見せたのが直ぐ宮中に報告された。そこで擊劍、柔道、角力、演劇何でも宮中に來て行つて見せて呉れといふ注文が出た。武藝や角力は兎も角も演劇は御覽に入れる價值がないからと斷つたが、却々聽き入れない。とうとう安物の鬘や、陣羽織や、打懸などを擔いで水兵等が宮中に出かけるといふ騒ぎになつた。さうして此等の演技者中下士卒には白絹の小袋に若干の金貨を容れて賜はり、候補生以上には高價のシャツ釦などを賜はつた。又或る日のこと侍従武官が我が艦上で、乗員が日本の煙管で刻み煙草を吸つてゐるのを見て、新しい煙管を煙草諸共徴發して行つた。我々の短劍が珍らしいと云ふので之も新しいのを徴發された。今度は日本の繪を畫いて見せろといふ注文が出た。繪心のあるものは一生懸命に畫筆を振つて夫れ々捧呈した。昔話にある馬鹿殿様のやうに節制のない氣儘氣隨の皇帝の行跡は、君主專制の一面を遺憾なく語つて

みた。

團隊から歡迎招待されたことは割合に少かつたが、個人の歡迎は旺んであつた。一回一弗の入浴料を取る世界的に名高い土耳其湯では無料入湯を申出て來た。宮内省御用の寫眞屋は何十枚増し焼きしても無料撮影を申出て來た。劇場博物館といふ様なものは到る處無料入場である。我々が買物をする時、後から巡査が付いて來て動もすると性の悪い猶太人などが高價を貪るのを監視してゐる。少しでも英語の出來る土耳其人は我々と交際を結びに來る。一度知り合ひになると、彼等は毎日軍艦に來ては我々を連れ出す。さうして馬車へ載せて其處彼處を案内して呉れる。自分

の懇意にした土耳其人はモクターと云ふ宮内省の會計官吏であつた。彼は其日の勤務は同僚に頼んで大概毎日自分ともう一人の士官を馬車で連れ廻る。彼は成るべく土耳其の風俗を我々に見せてやらうと力めた。食事などは殊更土耳其式の料理屋へ案内して呉れた。土耳其では箸もナイフもフォークも用ひない。總て手掴みで食ふ



國風である。それを屢々自分達に行らせるので、實は内々閉口した。上品にするには始めに先づ手を洗ふのである。食後に手を洗ふのは上流も下流も同じことである。土耳其の飲食物中の名物は珈琲で、汁粉の様に濃く、香りの非常に高いものである。最上等のになると小さな茶碗に一杯で二弗も三弗もする。土耳其人は米食を好む。それは牛肉の細末に味を付けたのを米飯に交せて、バタで熨り付けたもので、日本人の口には最も良く適する。我々が離宮で接待される料理の中にも之は必ず出る。モクターは毎日馬車を先きから先きへと飛ばして自分達を案内した。さうして歸りがけには何日でも土耳其人の菓子屋に寄つて菓子を一折づゝ買つて呉れる。何んだか伯父さんに連れられて歩く様だと友と二人で笑つたことがあつた。彼は宗教の話しが好きであつた。我々に何宗かと問ふから、佛教だと答へた。佛教は耶蘇教と關係がないかと更に訊ねる。全然別の宗旨だと答へると、彼は非常に喜んだ。土耳其人が如何に耶蘇教徒を仇敵視してゐるかは直ぐ判る。それから佛教のことを根堀葉

堀訊ねるが、自分達は宗教上のことは殆んど何にも知らないので、甚だ返答に困つた、良い加減のことを答へてゐると、彼はマホメット教と似てゐると言つて益々上機嫌であつた。國民も斯ふ宗教に偏して了つては困つたものだと思つた。彼は愈々我が艦が出るときに、高貴の婦人が穿く金塗金縫の靴や刺繡の織物などを餞別に呉れた。

土耳其人は上は皇帝から下は一平民まで日本熱に浮かされてゐるので、毎日我が二艦へ數千人の土耳其人が来て珍らしそうに觀て行く、或日などは賄所で主厨が大釜から焚き立ての飯を兵員の飯櫃に分配してゐると、彼等は暫く其處に立つて見てゐたが、其内一人二人の土耳其人は一寸失敬して一掴み口に入れたといふ滑稽が演ぜられた。歡迎熱といはうか、日本熱といはうか、斯ふ熱度が旺んになつて來ると、土耳其人許りではない。所謂群衆心理の作用で他の外國人までも同じ様に騒ぎ出し、我が艦に遣つて來て我々と交際を結ばうとする。土耳其人が耶蘇教徒たる外